

秋田県文化財調査報告書第62集

館下 I 遺跡発掘調査報告書

秋田県文化財調査報告書
第62集

1979年3月

秋田県教育委員会

序

本報告書は、昭和51年度から59年度まで計画されている国営能代開拓建設事業地内の圓場造成事業に先立って圓場整備地域内約11,000m²の範囲を、記録保存を目的として調査を実施した館下Ⅰ遺跡の発掘調査の成果をおさめたものです。

この報告書の刊行が地域史の研究の一助になり、文化財愛護に寄与するならば幸いです。

終りに、発掘調査と報告書刊行に色々ご協力いただいた東北農政局能代開拓建設事業所をはじめ、能代市教育委員会、関係諸機関の方々に深く感謝申しあげます。

昭和54年3月

秋田県教育委員会

教育長 畠山芳郎

例 言

1. 本報告書は、昭和53年5月10日から10月1日にかけて実施した国営能代開拓建設事業に伴う館下I遺跡発掘調査報告書である。

2. 発掘調査・報告書作成にあたっては、下記の方々から御指導、御助言をいただいた。

(敬称略)

村越潔（弘前大学教授）、岩本義雄（青森県郷土館主任研究員）、三宅徹也（同館学芸員）、鈴木克彦（同館研究員）、一町田工（青森県教育庁文化課主査）、市川金丸（同）、三浦圭介（同主事）、杉測馨（秋田県立大曲高等学校教諭）。

3. 報告書の作成は調査員、調査補佐員の討議により、調査員と、調査補佐員が分担執筆した。

Iの1、3、II、IIIの1、3の④⑥、VIの1、VIIは岩見。IIIの2、3の⑤、IVの2は永瀬。
IIIの3の①②③は藤井、田口。

Iの2「米代川下流域の地形・地質」は秋田大学教官白石建雄氏の指導を受けた山本郡八森町立岩館小学校教諭工藤英美氏の執筆したものである。

4. 石器の石材鑑定は、県立博物館学芸員渡辺晟氏にお願いした。

5. 地図に使用した航空写真は、東北農政局能代開拓建設事業所所蔵のものである。遺構の写真の一部に能代市唐津煎氏撮影のものを使用している。

6. 報告書中の遺構・遺物の写真と実測図は、調査員、調査補佐員およびその仕事を手伝われた越後谷敏子、鈴木光子、原田恵知子、宮腰智子諸氏によって作成されたものである。

7. 実測図の作成にあたっては造り方測量を基本にし、一部に平板測量を使用した。

8. 発掘調査における土層の色調観察には、日本色彩研究所の「新版標準土色帖」を使用した。

9. 遺物の細部観察には、オリンパス二眼鏡筒式実体顕微鏡VMを使用した。石器の使用痕の撮影は、県立博物館学芸員高田順、島田忠一氏にお世話をいただいた。

目 次

序

例 言

挿 図 目 次

表 目 次

図 版 目 次

I 館下 I 遺跡と発掘調査

1. 遺跡の位置と立地.....	1
2. 米代川下流域の地質・地形.....	1
3. 発掘調査に至るまでの経過.....	5

II 調査の概要

1. 調査の体制.....	5
2. 調査の方法.....	7
3. 調査経過.....	8

III 検出遺構と出土遺物

1. 遺跡の層位.....	9
2. 旧石器時代の出土遺物.....	10
3. 縄文時代の検出遺構と出土遺物.....	11
① 穴住居跡.....	11
② 穴遺構.....	40
③ フラスコ状ビット.....	46
④ 土 器.....	57
⑤ 石 器.....	59
⑥ 土・石製品.....	66

IV 小 結

1. 穴住居跡.....	68
2. フラスコ状ビット.....	69

V む す び.....

表 目 次

第1表 石器の出土場所別割合	59
第2表 石器種類別の出土割合	60

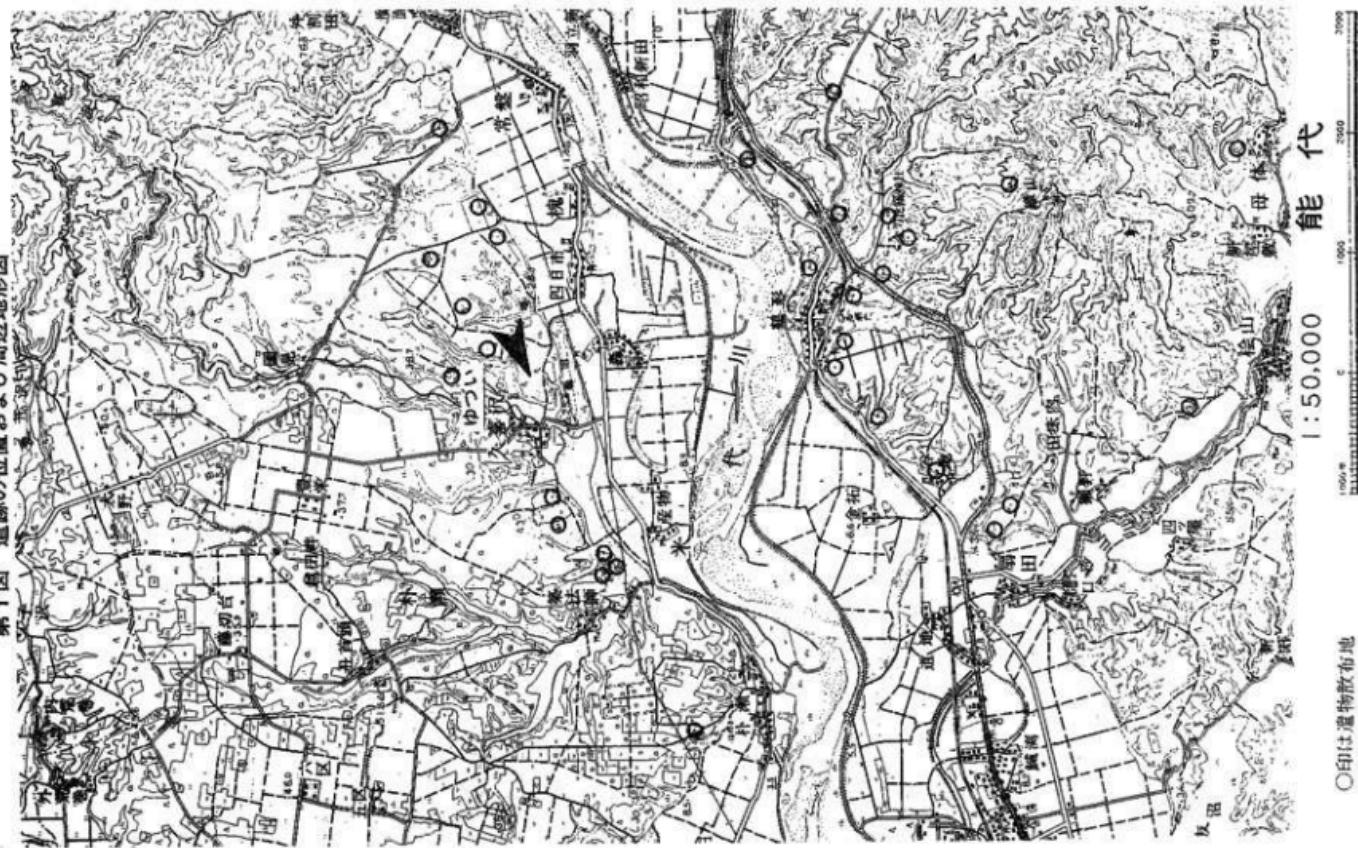
図 版 目 次

館下I 遺跡周辺の航空写真	図版 1
道跡遠景（南から）	図版 2
道跡遠景（北西から）	図版 2
発掘調査前のようにす	図版 3
発掘風景	図版 3
A グループ北西部の住居跡群	図版 4
A グループ南西部の住居跡群	図版 4
A グループ西隅の住居跡とフラスコ状 ピット群	図版 5
B グループの住居跡群	図版 5
1号住居跡の確認	図版 6
1号住居跡	図版 6
4号住居跡	図版 7
5号住居跡	図版 7
6号住居跡	図版 8
7号住居跡	図版 8
12号住居跡	図版 9
13号住居跡	図版 9
30号住居跡	図版 10
31号住居跡	図版 10
34号住居跡と13・14号フラスコ状 ピット	図版 11
15号住居跡と溝状土塁	図版 11
18号住居跡	図版 12
19・25号住居跡	図版 12
20号住居跡	図版 13
21号・23号住居跡と5号フラスコ 状ピット	図版 13
22号住居跡	図版 14
24号住居跡	図版 14
26号・27号住居跡	図版 15
28号住居跡と4号フラスコ状ピット	図版 15
1号竪穴遺構	図版 16
2号竪穴遺構	図版 16
4号竪穴遺構	図版 17
10号竪穴遺構	図版 17
22号竪穴遺構	図版 18
1号フラスコ状ピット	図版 18
7号フラスコ状ピット	図版 19
9号フラスコ状ピット（二重構造 のもの）	図版 19
11号フラスコ状ピット	図版 20
12号フラスコ状ピット	図版 20
13号フラスコ状ピット	図版 21
13号フラスコ状ピット土器出土状 態	図版 21
ナイフ形石器出土状態	図版 22
石皿の出土状態	図版 23
苔石と刷片（6号住居跡）	図版 23
土器出土状態	図版 24
石棒、耳飾の出土状態	図版 25
石器の出土状態	図版 26
石炉	図版 27
ナイフ形石器・垂飾品・耳飾・土 器	図版 28
土偶・スタンプ状土製品・土器底 部	図版 29
石器の使用痕	図版 30
土器	図版 31
土器	図版 32
石器	図版 33
石器	図版 34

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置および周辺地形 図	41
第2図	米代川下流域の段丘分布図	42
第3図	フ拉斯コ状ビット断面の 例	42
第4図	久喜沢付近の柱状図	42
第5図	久喜沢付近の地質模式断面 図	43
第6図	グリット配置図	43
第7図	造構分布図(A グループ)	43
第8図	造構分布図(B グループ)	44
第9図	ナイフ形石器	44
第10図	1号住居跡	44
第11図	2号住居跡	45
第12図	3号住居跡	45
第13図	4号住居跡	45
第14図	5号住居跡	45
第15図	6号住居跡	45
第16図	7号住居跡	45
第17図	8号住居跡	46
第18図	9号住居跡	46
第19図	10号住居跡	46
第20図	11号住居跡	47
第21図	12号住居跡	47
第22図	13号住居跡	47
第23図	14号住居跡	48
第24図	15号住居跡	48
第25図	16号住居跡	48
第26図	17号住居跡	48
第27図	18号住居跡	49
第28図	19・25号住居跡	49
第29図	20号住居跡	50
第30図	21・23号住居跡と5号フ拉斯コ状ビット	51
第31図	22号住居跡	51
第32図	24号住居跡	52
第33図	26・27号住居跡	53
第34図	28号住居跡と4号フ拉斯コ 状ビット	53
第35図	29号住居跡	55
第36図	30号住居跡	56
第37図	31号住居跡	56
第38図	32号住居跡	57
第39図	33号住居跡	57
第40図	34号住居跡	58
第41図	1号竪穴造構	58
第42図	2号竪穴造構	58
第43図	11号竪穴造構	59
第44図	4号竪穴造構	61
第45図	6号竪穴造構	62
第46図	7号竪穴造構	62
第47図	8号竪穴造構	62
第48図	9号竪穴造構	62
第49図	10号竪穴造構	63
第50図	12号竪穴造構	63
第51図	13号竪穴造構	63
第52図	14号竪穴造構	63
第53図	15号竪穴造構	63
第54図	16号竪穴造構	64
第55図	17号竪穴造構	64
第56図	18号竪穴造構	64
第57図	20・23号竪穴造構	64
第58図	21号竪穴造構	64
第59図	22号竪穴造構	65
第60図	24号竪穴造構	65
第61図	25号竪穴造構	65
第62図	26号竪穴造構	65
第63図	1号フ拉斯コ状ビット	66
第64図	2号フ拉斯コ状ビット	66
第65図	3号フ拉斯コ状ビット	66
第66図	6号フ拉斯コ状ビット	67
第67図	7号フ拉斯コ状ビット	67
第68図	8号フ拉斯コ状ビット	67
第69図	9号フ拉斯コ状ビット	68
第70図	10号フ拉斯コ状ビット	68
第71図	11号フ拉斯コ状ビット	68
第72図	12号フ拉斯コ状ビット	68
第73図	13号フ拉斯コ状ビット	69
第74図	14号フ拉斯コ状ビット	69
第75図	15号フ拉斯コ状ビット	70
第76図	土製品	70
第77図	土器実測図	71
第78図	土器拓影(1)	72
第79図	土器拓影(2)	73
第80図	土器拓影(3)	
第81図	石器実測図(1)	75
第82図	石器実測図(2)	76
第83図	石錐の形態分類	76
第84図	石錐の長さと重量	77
第85図	石槍の形態分類	77
第86図	石槍の長さと重量	78
第87図	石斧の形態分類	78
第88図	匙状石器の形態分類	79
第89図	匙状石器の長さと重量	79
第90図	石匙の形態分類	80
第91図	石錐の形態分類	80

第1図 遺跡の位置および周辺地形図



I 館下 I 遺跡と発掘調査

1 遺跡の位置と立地

館下 I 遺跡は、秋田県能代市久喜沢字館下52他に所在する。ここは能代市街地の北東7kmの地点である。

秋田県北部の降水を集めて、能代平野で日本海に注ぐ米代川の北岸には、数段の段丘によって構成された広大な東雲台地が広がる。

館下 I 遺跡は、この東雲台地の南縁に当り、眼下に米代川の河道を臨む標高28mの低位段丘上に位置し、茗荷畠、杉の苗圃、雜木林として利用されてきた。

この米代川に臨む東雲台地の南縁には遺跡が多く、館下 I 遺跡の周辺にも発掘調査の行われた「ゆずり葉遺跡」(縄文、平安)、「中台遺跡」(平安)、「大内坂遺跡」(縄文、平安)が存在する。

2 米代川下流域の地形・地質

① 調査にあたって

これは、米代川下流域右岸の段丘地形とその構成層を中心に調査したものである。調査に当っては「秋田県北部日本海沿岸地帯の段丘群」¹⁾(1977年、白石・工藤)の報告をもとにして、東西1.6km、南北7kmを区切っておこない、また久喜沢部落付近、東西1.5km、南北1kmの区域は特に精査を加えたものである。

② 地形・地質概要

調査地域はそのほとんどが能代平野の段丘群で占められている関係上、能代平野とその周辺の丘陵、山地までを概観してみることにする。

能代平野は米代川が海に注ぐ付近に三角形状に形成された広大な平野で、北は八森町、東は常盤部落まで、また南は米代川左岸沿いまでと広がっている。その東端は丘陵、山地となっていて、山地の地形はなだらかであるが、北にいくほど急峻になる。

山地および段丘堆積物の基盤は、新第三紀層からなり、男鹿半島地質層序の台島層群相当層と船川層群相当層で占められている。

山地、丘陵以外の段丘は9つに区分される。最高位段丘としては北能代第1段丘があり、これは調査地域には分布していない。高位段丘には、米代川第2、第3段丘があり、また、中位段丘としては米代川第4、第5段丘があり、最も広い分布を占める。低位段丘としては米代川

第6, 第7, 第8段丘があり、現河川に沿う形で分布する。なお米代川第9段丘は沖積層からなる。

海岸沿いには海岸砂丘が南北に分布している。²⁾

(3) 段丘群

調査地域にみられる最も古い段丘は米代川第3段丘で、丑首頭付近を中心には南北に延びる帶状の高まりで、調査地域より北に良く発達している段丘の残丘であろうと考えられている。

米代川第4段丘は西は竹生付近に、また東には大野付近に、前者と不連続に分布している。第4段丘はさらに東方の丘陵まで続くが、そこでは、縁辺部にだけ点々と分布するにすぎない。

構成層は地域によって異なり、竹生地域では中疊および砂よりなる良く淘汰された地層と、その上位にくる塊状の砂層からなる。これらの地層は八郎潟西岸に広く分布する渋西層Ⅰ, Ⅱ³⁾に酷似する。また大野地域では、段丘の縁辺部では中～大疊層と砂層からなり、中心部では小疊と青灰色塊状砂などで構成されている。(層厚は5m以内)

これらの事と地形などから、この第4段丘は渋西層Ⅰ, Ⅱが形成された時代、即ち、下末吉期と同じ年代であろうと推測できる。

米代川第5段丘は向能代の拓友付近に広く分布し、第4段丘との高度差はわずかで地形区分はむずかしいが、構成層については両者は全く異なる。即ち、第4段丘の層厚は5m内外で



第2図 米代川下流域の段丘分布図

あるのに対し、第5段丘のそれは10m～20mと非常に厚い。また、前者は海汰の良好な砂が中心的であるが、後者では海汰の悪い中～大礫が中心である。これは、旧米代川が北西方向に流れながら第4段丘構成層を浸食し谷を形成しその後、その谷を河川の運搬物で埋めたものと解される。

米代川第6段丘は第5段丘と明瞭な北高で区別され、ほぼ30m高度の美しい平坦な段丘面を持ち、米代川現河川沿いに分布する。向能代7区では、かつてその平坦面を利用して東雲飛行場がつくられた。

構成層は主に中礫よりなり、上位にはクロスラミナの良く発達する砂がレンズ状に挟まれることもある。⁴⁾ 層厚は10～20mと非常に厚い。

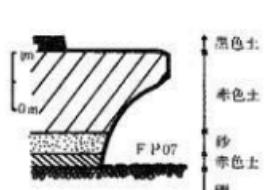
米代川第7段丘は、わずかの北高をもって第6段丘と識別できる。その分布は、西は篠法師から東は天内までの区間で、現河川沿いに認められ、館下I遺跡はこの段丘面に位置する。構成層についてはくわしく後述するが、基本的には第6段丘構成層に類似する。

米代川第8段丘は、その分布が限られており、常盤部落付近の第7段丘の先端にわずかに見られるだけである。

米代川第9段丘は、米代川流域に分布する河岸平野の高位面で、構成層中に軽石が含まれるのが特徴的である。⁵⁾ 鷹巣盆地の洪水シラスの堆積面（平山・市川1966）に対比され、東能代付近ではシラス面ともよばれている。⁶⁾

④ 久喜沢部落付近の地形・地質

館下I遺跡は前述の米代川第7段丘の段丘面にあたり、高度は約25mである。その南端はゆるやかな斜面を経て20m高度を有する段丘面にかかる。この面は米代川第8段丘に相当する可能性が強い。

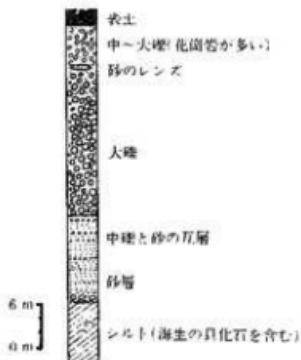


第3図 フラスコ状ピット断面の一例

精査地域の8つの露頭およびフラスコ状ピットの壁面の観察から第4図の柱状図および第5図の地質模式断面図（南北方向）を作成した。以下これらについて説明する。

基盤は塊状のシルト岩よりなり海生の二枚貝の化石を産出する。岩層および化石から本層は秋田油田層序の巣岡層に相当すると思われる。河岸から遠ざかるにつれて基盤の高度は増し、久喜沢部落付近では米代川第9段丘面よりも6mほど高くなる。河床では基盤岩がみられるので、沖積台地での基盤岩はさほど深くはないと思われる。

基盤岩を不整合に覆って、わずかながら平行ラミナが発達する砂層が6mほど堆積し、その上位には整合に中礫と砂の互層が6mほど続く。なお、この地層は海成層とは認めがたい。



第4図 久喜沢付近の柱状図

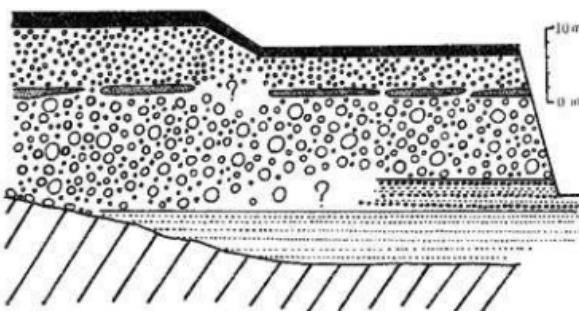
砂、疊の互層の上には厚さ2.0mにもおよぶ大理からなる淘汰の悪い疊層が堆積していて、疊種は安山岩、流紋岩が顕著である、次に泥岩類、凝灰岩類と比較的やわらかい岩石が目立ち、花崗岩もわずかながら認められる。

その上位には厚さ1～1.5mの砂層が断続的に広く分布している。砂層はしばしばクロスラミナを形成している。

さらに上位には中～大理からなる5～6mの厚さの疊層があり、その疊種をみると圧倒的に花崗岩が多く、遠くからみると地層全体が白っぽく見えるほどである。

最上部には粘土および腐植土が形成されている。疊層の直上には厚さ2.5cmほどの赤色粘土が重なり、その上

には厚さ3.5cmほどの砂層があり、この砂層には直径1mmほどのやわらかい白質物（軽石粒ではない）が多數混在する。その上に1.40cmの厚さで赤色粘土が形成され、最後に腐植土がその上を覆



第5図 久喜沢付近の地質模式断面図

っている。

文 献

- 1) 白石建雄、工藤英美、秋田第四紀研究グループ（1977）、秋田県北部日本海沿岸地帯の段丘群——秋田大学教育学部研究紀要第27集
- 2) 工藤英美（1976）、峰浜村蝦夷倉における土器類片を含む砂丘について——峰浜村の文化財（研究・報告編）
- 3) 白石建雄、潤西団体研究グループ（1976）、模式地における淘汰層について——日本地

質学会第83年学術大会講演要旨

- 4) 工藤英美, 鎌 敏春, 脊部和夫, 北川和子, (1970), 能代山本フィールド, ガイド——秋田地学No.13
- 5) 平山次郎, 市川賢一 (1966), 1000年前のシラス洪水——発掘された十和田湖伝説——地質ニュースNo.140, P10-28
- 6) 小川敏郎 (1977), テキスト「地層」の学習 (小5) ——教育研究全国集会報告書

3 発掘調査に至るまでの経過

能代地区では、昭和51年度から、東北農政局能代開拓建設事業所によって、農業所得の増大と土地、労力の生産性の向上をはかるため、3,340haの未耕地、既耕地を対象に、国営の土地改良事業が進められてきた。

この対象地区には、多数の原始古代の周知の遺跡が確認されており、今まで工事以前に発掘調査による記録保存がなされてきた。館下にはI, II, IIIの縄文期3遺跡がある。そのうちI遺跡が同事業の本年度の工事で田畑に造成されるため、記録保存を目的に、事前に発掘調査を実施したものである。

II 調査の概要

1 調査の体制

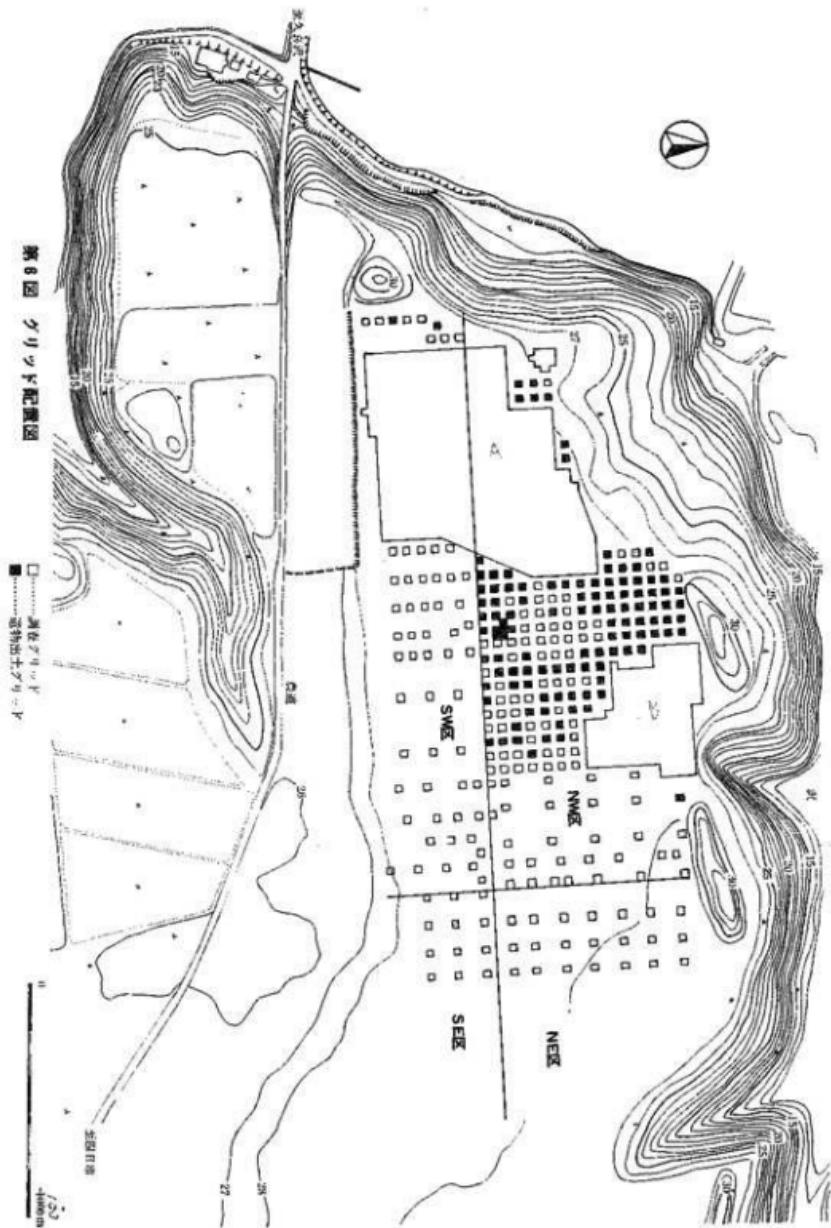
調査主体	秋田県教育委員会	
調査期間	昭和53年5月10日～10月1日	
調査地	秋田県能代市久喜沢字館下52他	
調査員	岩見誠夫	秋田県教育庁文化課 社会教育主事
	永瀬福男	秋田県教育庁文化課 社会教育主事補
	熊谷太郎	秋田県立能代農業高等学校教諭
補佐員	田口 都	
	藤井安正	
事務局	高橋 刑	秋田県教育庁文化課 課長
	門間光夫	秋田県教育庁文化課 課長補佐
	越智秀一	秋田県教育庁文化課 課長補佐
	飯塚喜市	秋田県教育庁文化課 学芸主事
	木村 登	秋田県教育庁文化課 主査
	宮権泰時	秋田県教育庁文化課 学芸主事
	川越 讓	秋田県教育庁文化課 主事

事務局 藤田 勉 秋田県教育庁文化課 主事
新泉美知子 秋田県教育庁文化課 主事
後藤 正 東北農政局西津軽事業所工事課課長
竹内 誠 東北農政局能代開拓建設事業所開発課課長
小野寺宏之、東北農政局能代開拓建設事業所開発課係長

調査参加者 芹田兼三郎、芹田喜代治、芹田末太郎、芹田清一、芹田長作、芹田良雄、佐々木菊太郎、佐々木謙三郎、佐々木信夫、鈴木市郎、鈴木卯吉、鈴木孫治郎、鈴木与三郎、伊藤秀次郎、岩本隆、川村千代吉、菊地勘右二門、熊谷喜久雄、七戸徹夫、神馬常太郎、神馬清美、鈴木多四郎、鈴木常太郎、鈴木弥太郎、棟方仁司、芹田キセ、芹田タカノ、芹田ツセ、芹田トミエ、芹田フクエ、芹田ミツ子、小松範子、佐々木愛子、佐々木カツ、佐々木キヨ子、佐々木トヨエ、鈴木キノ、鈴木ミキエ、田村チヤ、幸坂カヨ、幸坂スギ、幸坂フジエ、幸坂ヤエ、小林ツルエ、鈴木ミサ、鈴木ユキエ、高山ハルエ、渡辺ツマ、岩本美津子、岩森みよ、蝦名キワ、小野タイ子、川村ツ牛、川村ふよ、菊地きぬ子、菊地すぎの、工藤タミエ、工藤ミヨ、工藤ゆき子、斎藤アヤ子、笹森セイ子、神馬ヨシノ、鈴木キヨ、鈴木ふみえ、須藤和子、椚田キミエ、椚田シミエ、棟方カツエ、吉田スナ、三浦淳蔵、小林鉄雄、日諸喜憲、丑沢長生、越後谷敏子、鈴木光子、原田恵知子、宮腰智子、近藤恵子、住吉優子、大高博康

調査協力機関 秋田県能代市教育委員会

2 調査の方法



調査対象地の現況は50000m²に及ぶ畠地と、ブルドーザーによって抜根され、平坦化した原野であった。

この平坦地の中央部よりやや西寄りを通り東西線とそれに直交する南北線で4分割して、それぞれNW区、NE区、SW区、SE区を設定した。各区は更に3m×3mに小区画し、原点とした東西線、南北線の交点からのびる4方向は、方位の記号を最初にした算用数字で示した。グリッドの名称はN 0 1 W 0 4のように、方位の記号と算用数字の組み合せて呼ぶことにした。

3 調査の経過

発掘調査は5月10日から開始した。当日調査員、舩佐員、東北農政局能代開拓事業所小野寺係長、作業員が遺跡に参集し、テント張りのちグリッド設定にとりかかる。15日のNW区グリッド設定をもってNW区の西隅から千鳥に粗掘りを開始。5月16日に発掘基地プレハブが建つ。5月23日に1号住居跡を検出。6月7日までに1~4号住居跡の発掘を完了。いずれも楕円形、大型の住居跡である。6月1日から発掘遺物の水洗い、接合、注記を能代市社教センター内にある調査事務所で、発掘調査と併行して開始。6月7日には県教育公安委員の一行が遺跡を視察し、調査の重要性を理解してくれたことは喜ばしい。7月1日からは大館市の塚の下遺跡の調査に従事していた藤井舩佐員も加わり、作業は順調に進む。6月19日にはローム上面から県北地方では最初の杉久保型ナイフ形石器が発掘された。7月1日には県立能代農高の熊谷調査員が調査に参加、7月6日には文化庁畠田調査官来跡。指導を仰ぐ、NW区の西部で検出されている住居跡は、出土遺物から中期円筒上層C式、D式のものと考えられる。7月16日からNW区住居群検出地の実測を行う。これと併行にNW区の北東部で検出されていた石圓炉を伴う住居跡周辺の粗掘りの拡大と、ベルトのとりはずしを行う。7月・8月は好天ながら高温の日が多く作業は難渋。9月2日にはじめて堆土にベルコンを使用す。9月10日以降未調査地の段丘西端、SW区とNW区にわたる茗荷畠の粗掘りを行う。8基のフラスコ状ビットと2棟の竪穴住居跡を検出す。フラスコ状ビットのなかには2重構造のものも発見された。NW区北東部の住居跡群は石圓炉を持つ円形のもので、大木10式期頃のものと考えられた。9月20日大木10式期の住居跡群実測のため造り方設定に入る。9月23日、秋分の日に現地説明会を開催、200人近い能代市民が来跡す。発掘調査に深い感銘をうけて帰宅とのこと。10月1日写真撮影、実測などもすべて終え発掘調査を終了す。

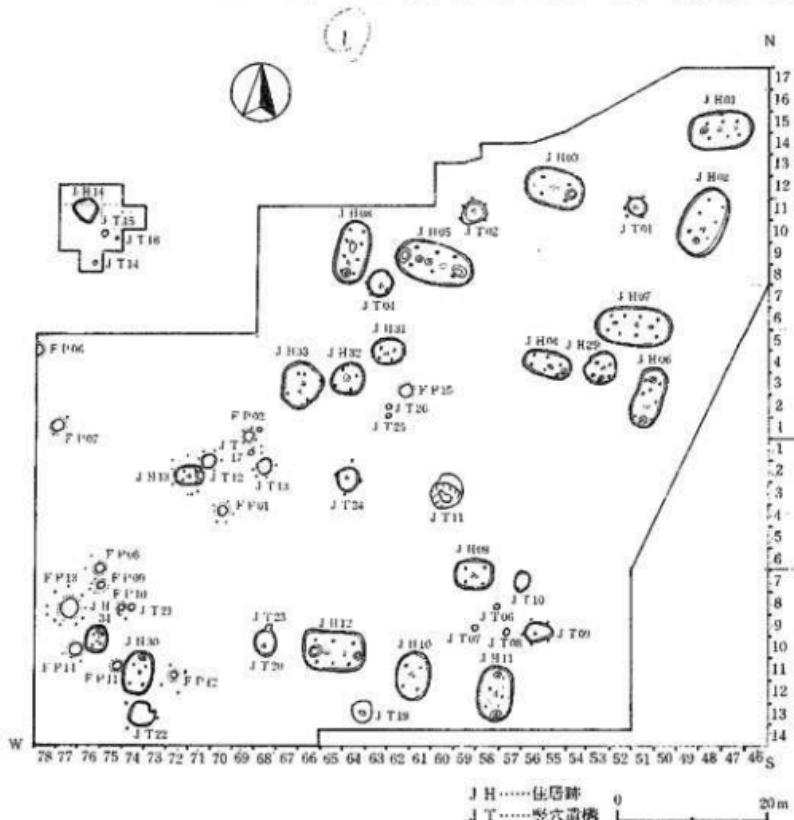
III 検出遺構と出土遺物

1 遺跡の層位

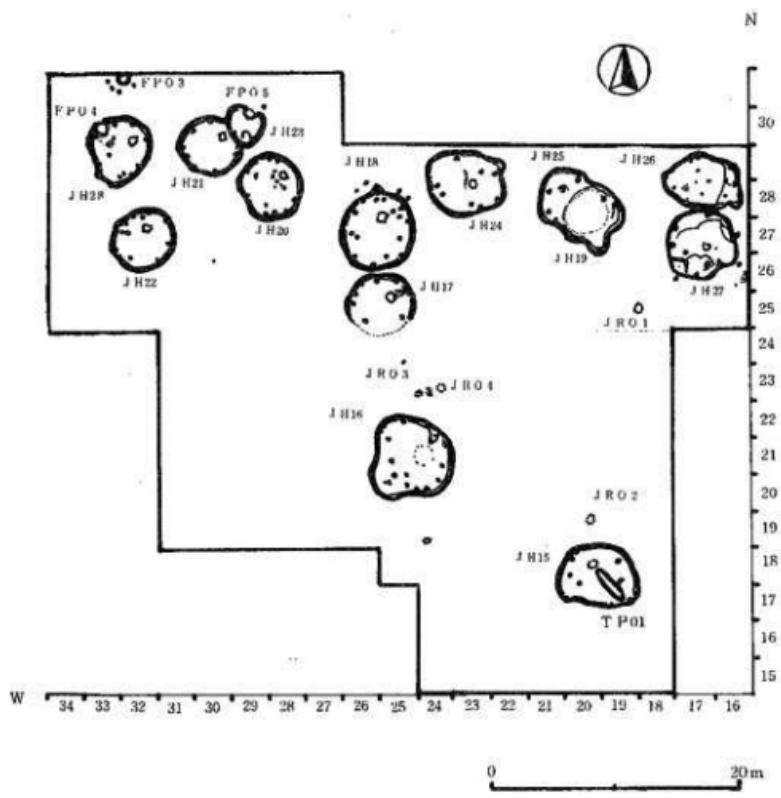
遺跡は段丘の北東縁から西縁にかけて立地している。この調査区の堆積層は、基本的には地山まで、2枚の層である。

中期中葉の住居群の検出された段丘の西縁に近い調査区は、10cmの表土の下に遺物を包含する30cmの黒褐色土の堆積が認められた。

北東縁の中期末葉の住居群の調査区は、段丘縁に向って緩傾斜の見られる地形である。ここでの南側では25cmの黒褐色土の堆積があり、北側の段丘縁では53cmほどの黒褐色土の堆積が



第7図 遺構分布図 (A グループ)



第8図 遺構分布図(Bグループ)

J H……堅穴住居跡
J R……屋外の炉
T P……溝状遺構

認められた。表土の無いのは調査に先立ち開田に便利なようにブルトーザーで削平したためである。このように遺跡の一部には表土の見られない個所がある。遺物は黒褐色土中から出土する。

2 旧石器時代の出土遺物

旧石器時代に属すると考えられる遺物が2点出土した。出土した地点は、舌状にのびる段丘の北縁に位置する。遺物出土グリッドはN 19 W 4 7と、N 19 W 4 8である。

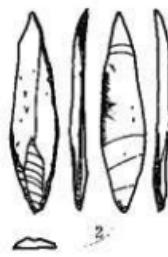
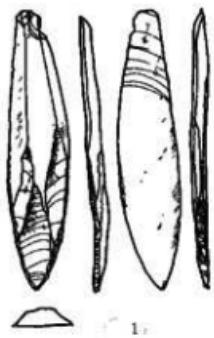
出土地点の地層は、上から黒褐色土層(20~30cm)、赤褐色土層(ローム)、砂層、疊層

となる。石器の出土した層は、ローム層上面である。なお、1点はローム層に突刺された状態で出土した。2点間の距離は2m。

出土遺物（第9図 図版22, 28）

ナイフ形石器

1は石刀抜法によって剥取された縦長の剥片を使用。背面には2本の棱が走る。また、基部



を薄く仕上げるため、背面に打面方向からの剥離が施されている。背面の基部周辺に対する二次加工は、両側縁に認められる。基部は尖るが先端部は丸味を持つ。長さ9.4cm、幅2cm、厚さ0.6cm、重さ10.7g。頁岩。

2も石刀抜法によって剥取された縦長の剥片を使用。背面に1本棱が走る。

背面には基部を薄く仕上げるための剥離が施される。背面の側縁に施された二次加工は、右側縁では先端部に至る。両端とも尖る。長さ6.8cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、重さ3.7g。頁岩。

第9図 ナイフ形石器

0 5 cm

1・2とも使用痕は認められなかった。

なお、2点は杉久保型ナイフ形石器に類似する。

以上2点の石器のみで、遺構、石器組成も不明であり、遺跡の性格について言及することは不可能である。

3 繩文時代の検出遺構と出土遺物

① 住居跡

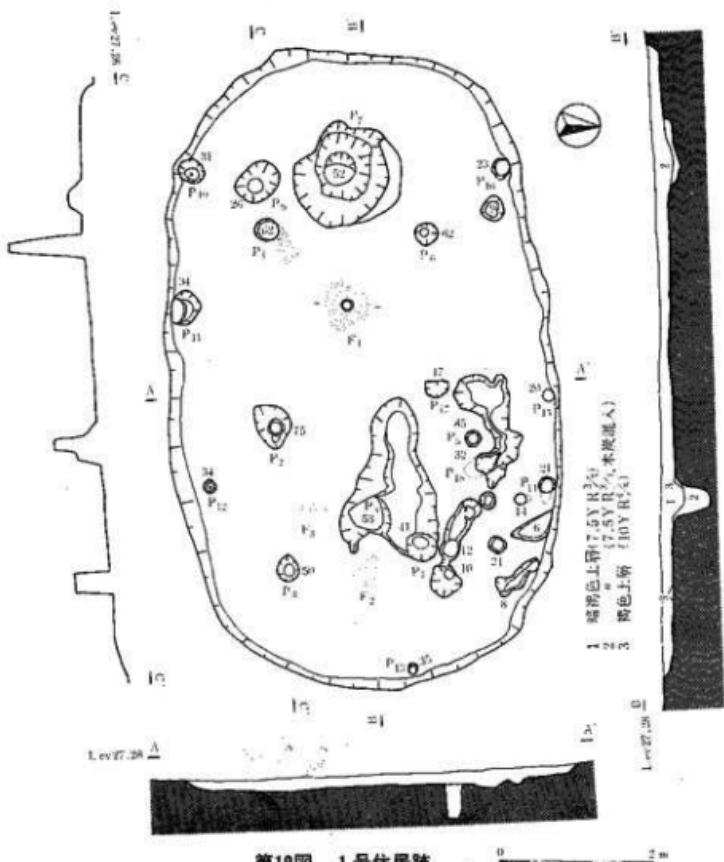
34棟の住居跡が検出された。遺構の確認はすべて地山上面である。

1号住居跡（第10図、図版8）

〈平面形〉長軸8.2m、短軸4.7mの楕円形プラン。長軸は、ほぼW-Eを示す。

〈壁・床〉壁の傾斜は約30度で、10cm立ち上がる。北東部の床面は凹凸をなす。

〈炉〉長軸線上に、土器埋設炉（F₁）、地床炉（F₂、F₃、F₄）。F₁がよく焼けている。



第10回 1号住居跡

〈柱穴〉長軸線と平行に3個ずつ並ぶ。P₁～P₆が主柱穴。

（施設）西壁ぎわにロームの縁のあるすり鉢状ピット（P7）。

〔特記事項〕石棒の折れたものが、北壁にたおれかかる状態で出土。

2号住居跡（第11図）

〔平面形〕長軸8.8m、短軸5.6mの橢円形プラン。長軸は、ほぼN-Sを示す。

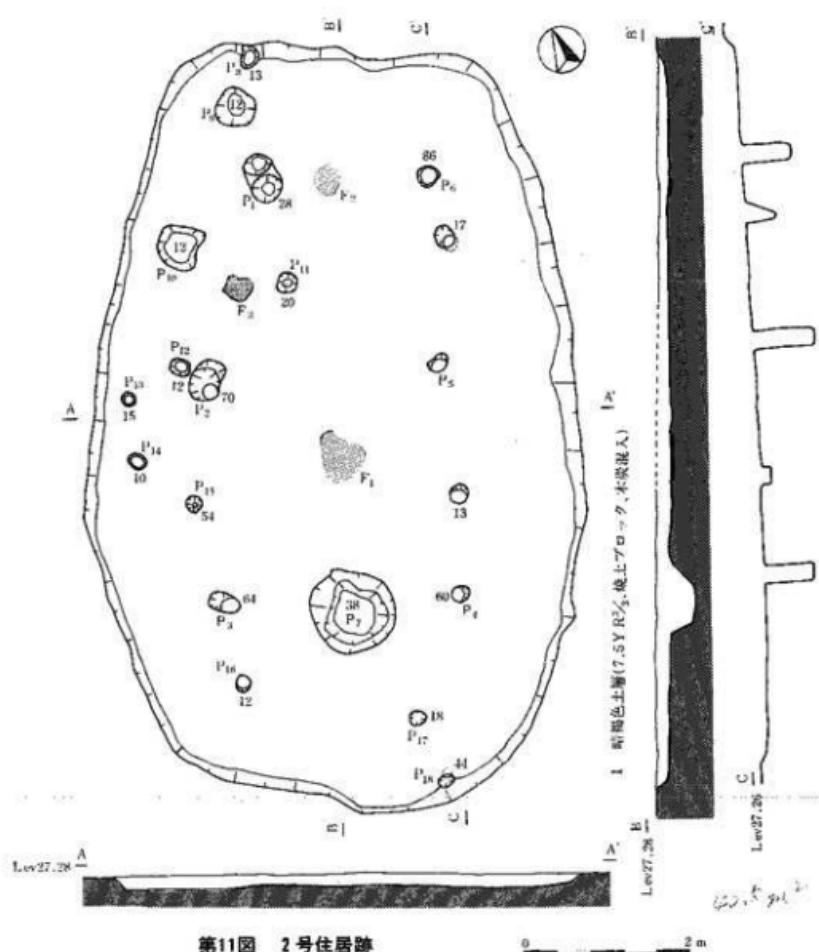
〈壁・床〉 50度の傾斜で10cm立ち上がる。床面は、ゆるやかに中央部に傾斜。

〈炉〉 振動線上に、 $F_1 = F_3$ の地床炉。 F_1 の使用大。

〈柱穴〉 柱軸線上平行に 3 個ずつ並ぶ。P₁ ~ P₉ が主柱穴。

〈施設〉長軸線上に、かつてロームの縁が巡っていたと思われるすり鉢状のピット（（P7）

〈特記事項〉P7内より、石皿出土。



第11図 2号住居跡

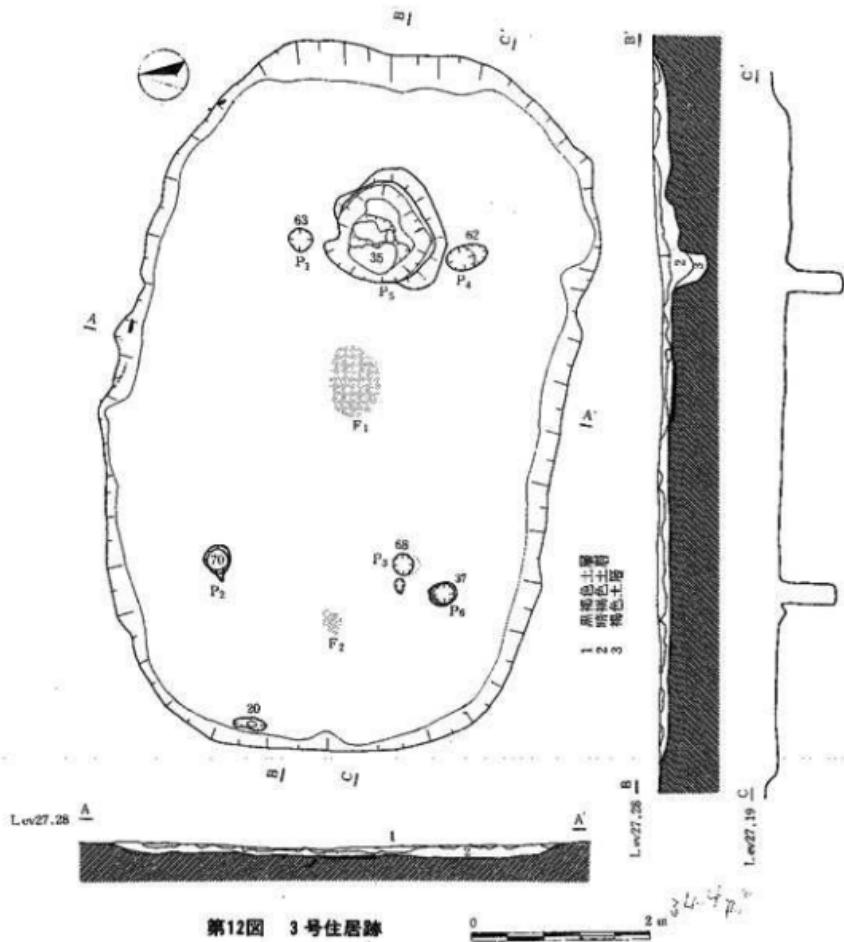
3号住居跡（第12図）

〈平面形〉長軸7.4m、短軸4.5mの楕円形プラン。長軸は、ほぼW-Eを示す。

〈壁・床〉壁は50度で約10cm立ち上がる。床面は平坦。

〈炉〉長軸線上に、F1とF2の地床炉。

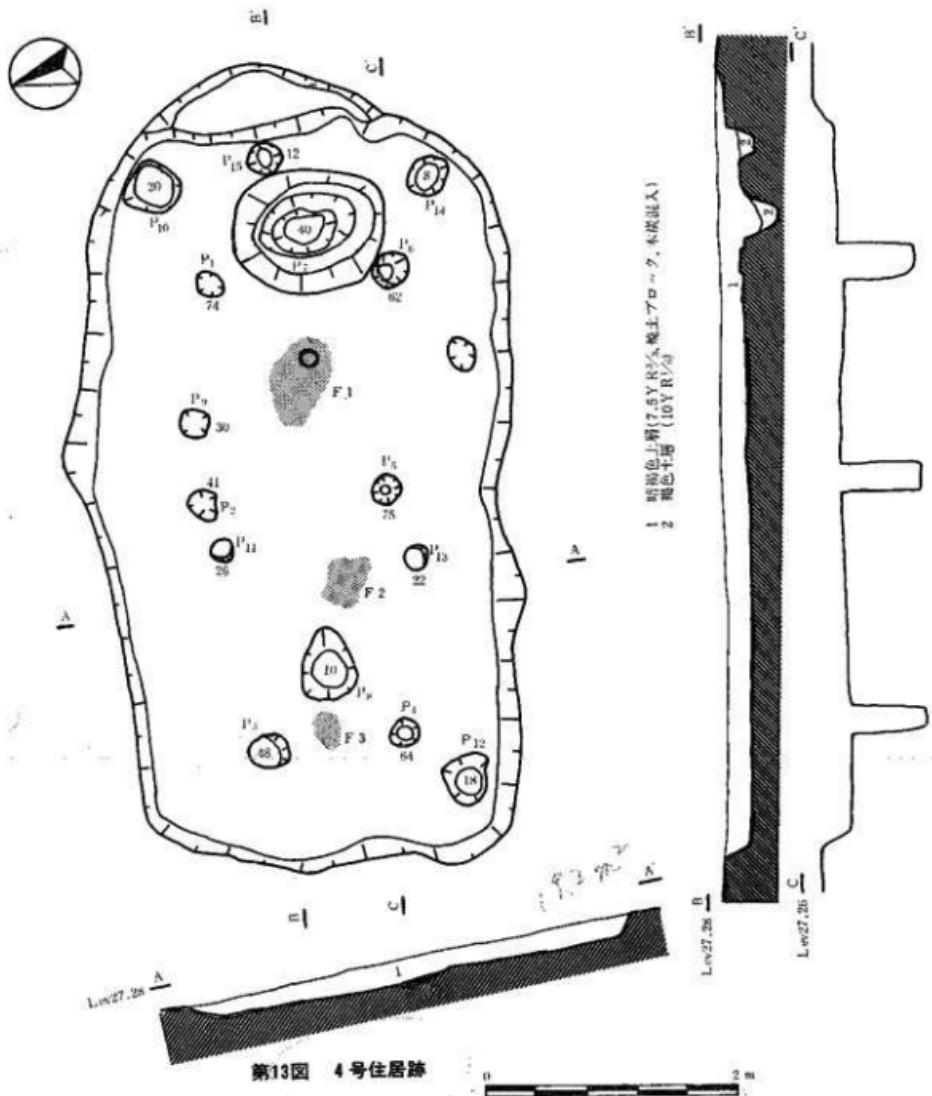
- 〈柱穴〉 長軸線と平行に2個ずつ並ぶ。P₁～P₄が主柱穴。
 〈施設〉 長軸線上にロームの縁を巡らしたすり鉢状のピット。(P₅)
 〈特記事項〉 P₆には、土器が口縁部を下に埋設されていた。



第12図 3号住居跡

〈柱穴〉長軸線と平行に3個ずつ並ぶ。P₁～P₆が主柱穴。

〈施設〉長軸線上に縁のあるすり鉢状ピット（P₇）。東壁北寄りに、テラス状のロームの張り出し。



5号住居跡（第14図、図版7）

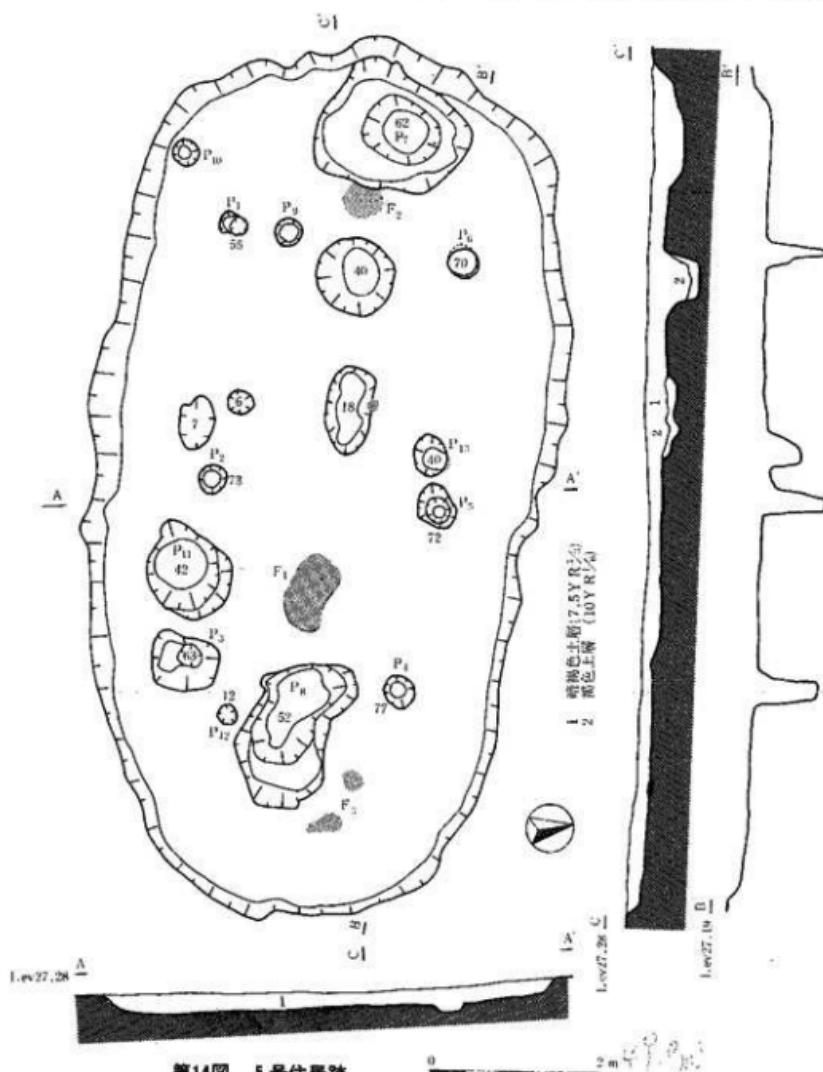
〈平面形〉長軸10m、短軸4・8mの橢円形プラン。長軸方向は、ほぼW-Eを示す。

〈壁・床〉壁は40度で約20cm立ち上がる。床面はほぼ平坦。

〈炉〉長軸線上に、F1～F3の地床炉。良く焼けている。

〈柱穴〉長軸線と平行に3個ずつ並ぶ。P1～P6が主柱穴。

〈施設〉長軸線上に段のあるすり鉢状ピット（P7）。縁のあった痕跡の残るピット（P8）。



第14図 5号住居跡

6号住居跡（第15図、図版B）

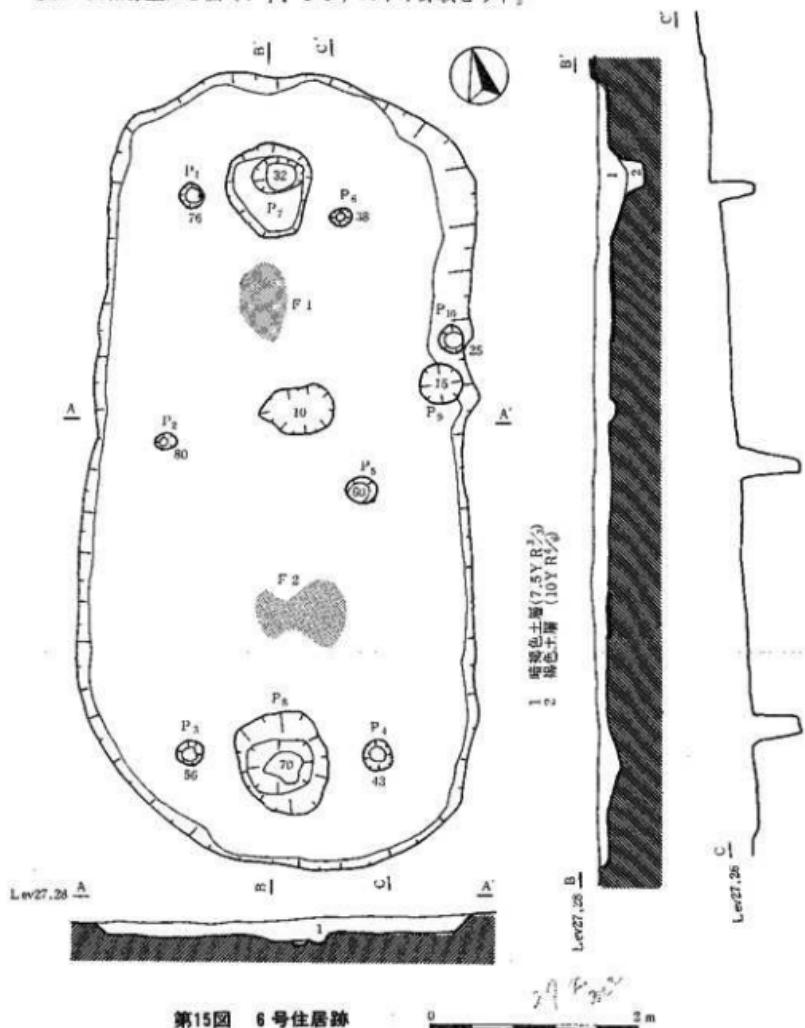
〈平面形〉長軸7.7m、短軸3.4m橢円形プラン。長軸方向は、ほぼN-Sを示す。

〈壁・床〉壁は45度で10cm立ち上がる。床面はほぼ平坦。

〈炉〉長軸線上に、F₁とF₂の地床炉。よく焼けている。

〈柱穴〉長軸線と平行に3個ずつ並ぶ。P₁～P₆が主柱穴。

〈施設〉長軸線上に2個（P₇、P₈）のすり鉢状ピット。



第15図 6号住居跡

7号住居跡（第16図、図版8）

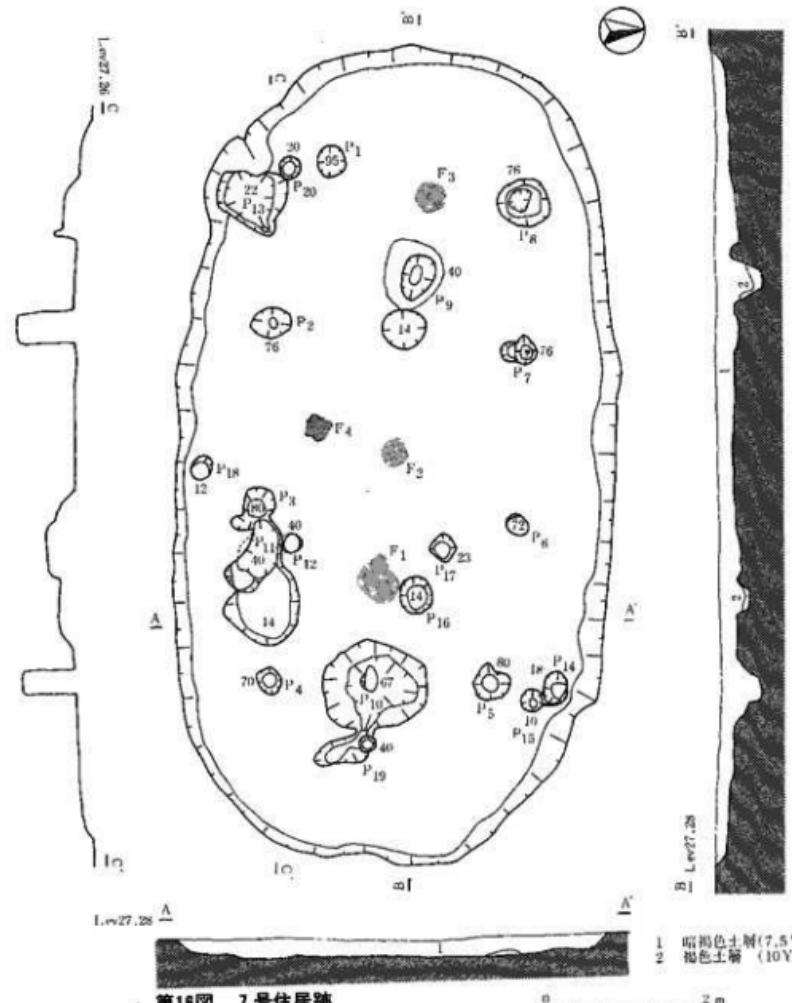
〈平面形〉長軸9.8m、短軸5.1mの椭円形のプラン。長軸方向は、ほぼW-Eを示す。

〈壁・床〉壁は40度で20cm立ち上がる。床面は中央部にむかって、ゆるやかに凹む。北東部は凹凸をなす。

〈柱穴〉長軸線と平行に4個ずつ並ぶ。P₁～P₈が主柱穴。

〈施設〉長軸線上に2個（P₉、P₁₀）のすり鉢状ビット。うちP₉は縁をもつ。

〈特記事項〉P₁₁内床面は石皿が定置されていた。



8号住居跡（第17図）

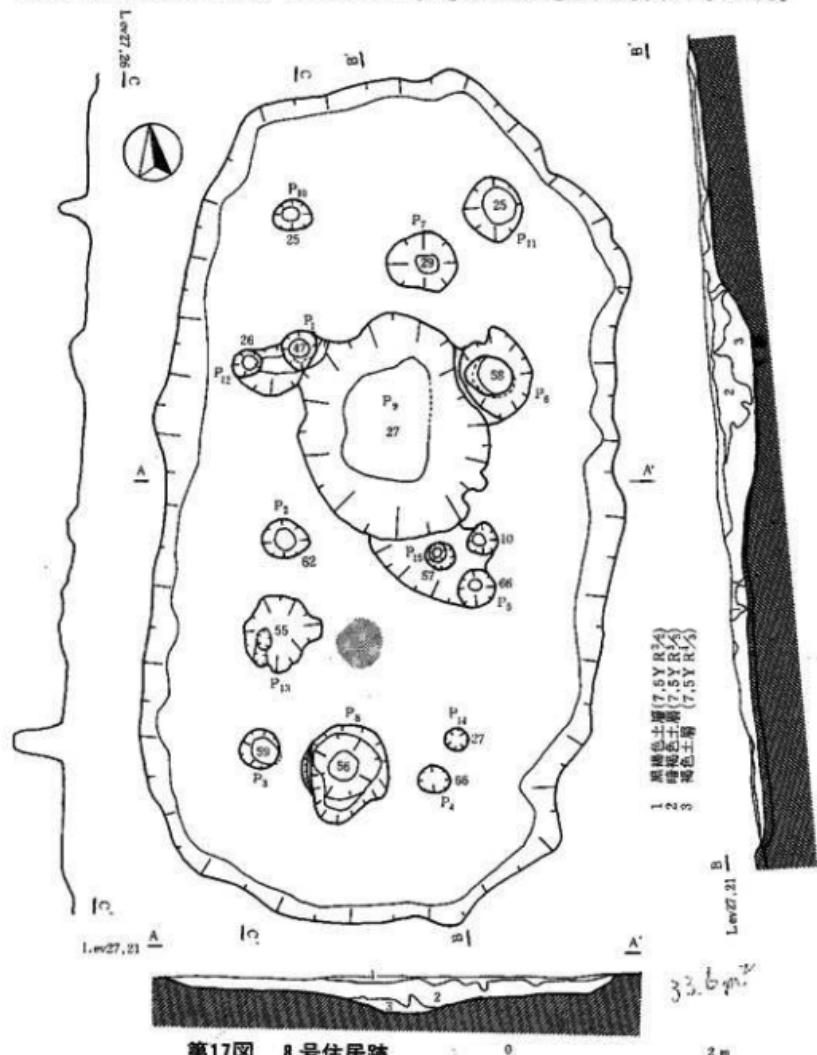
〈平面形〉長軸8.0m、短軸6.9mの橢円形プラン。長軸方向は、ほぼN-Sを示す。

〈壁・床〉壁は20度で8cmほど立ち上がる。床面は、ゆるやかに中央部に傾斜。

〈炉〉長軸線上に地床炉。10cmの厚さで、かなり使用されている。

〈柱穴〉長軸線に平行して3個ずつ並ぶ。P₁～P₆が柱穴。

〈施設〉長軸線上に縁のあるすり鉢状のピット(P₈)と鍋底状を呈するピット(P₉)がある。



第17図 8号住居跡

9号住居跡（第18図）

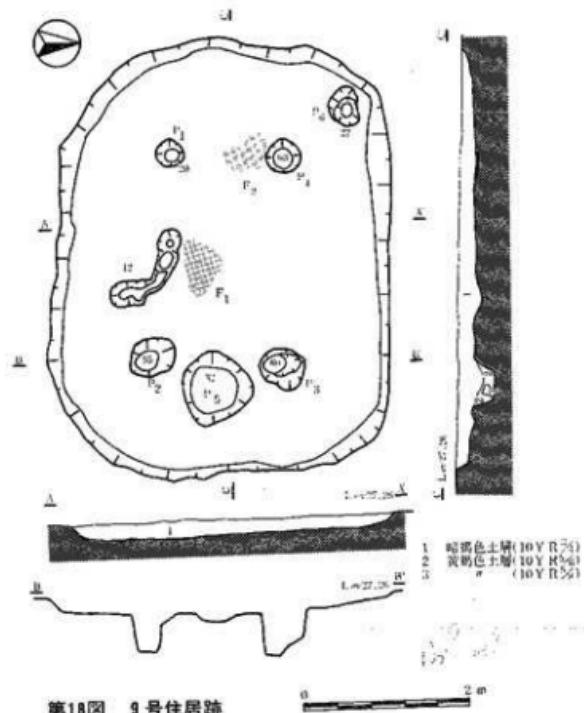
〈平面形〉長軸5.0m、短軸3.5mの楕円形プラン。長軸は、W-Eを示す。

〈壁・床〉壁は20度～60度で14～18cm立ち上がる。

〈炉〉長軸線上にF1とF2の地床炉。良く焼けている。

〈柱穴〉P1～P2が主柱穴。長軸線を中心として、左右対称に2個ずつ並ぶ。

〈施設〉長軸線上にすり鉢状のP5。



第18図 9号住居跡

10号住居跡（第19図）

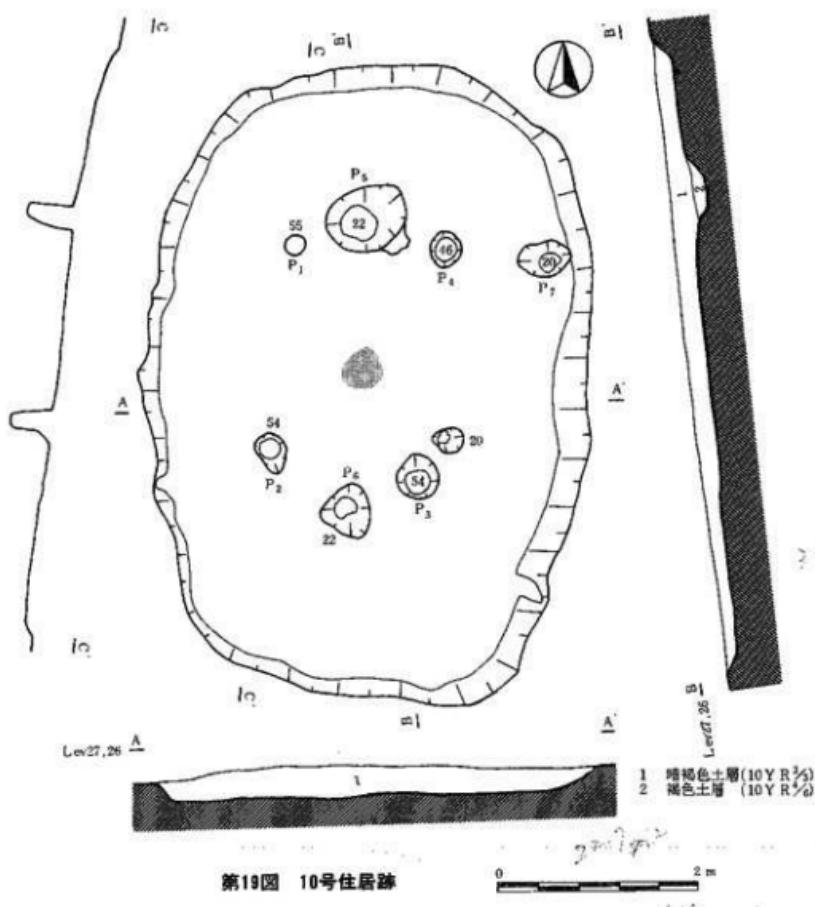
〈平面形〉長軸6.0m、短軸4.0mの楕円形プラン。長軸方向は、N-Sを示す。

〈壁・床〉壁は40度で14cm立ち上がる。床面は平坦。

〈炉〉ほぼ中央に地床炉。10cmの厚さ。

〈柱穴〉長軸線を中心に2個ずつ平行に並ぶ。P1～P4が主柱穴。

〈施設〉長軸線上に、少し縁の残るピット（P5）。



第19図 10号住居跡

11号住居跡（第20図）

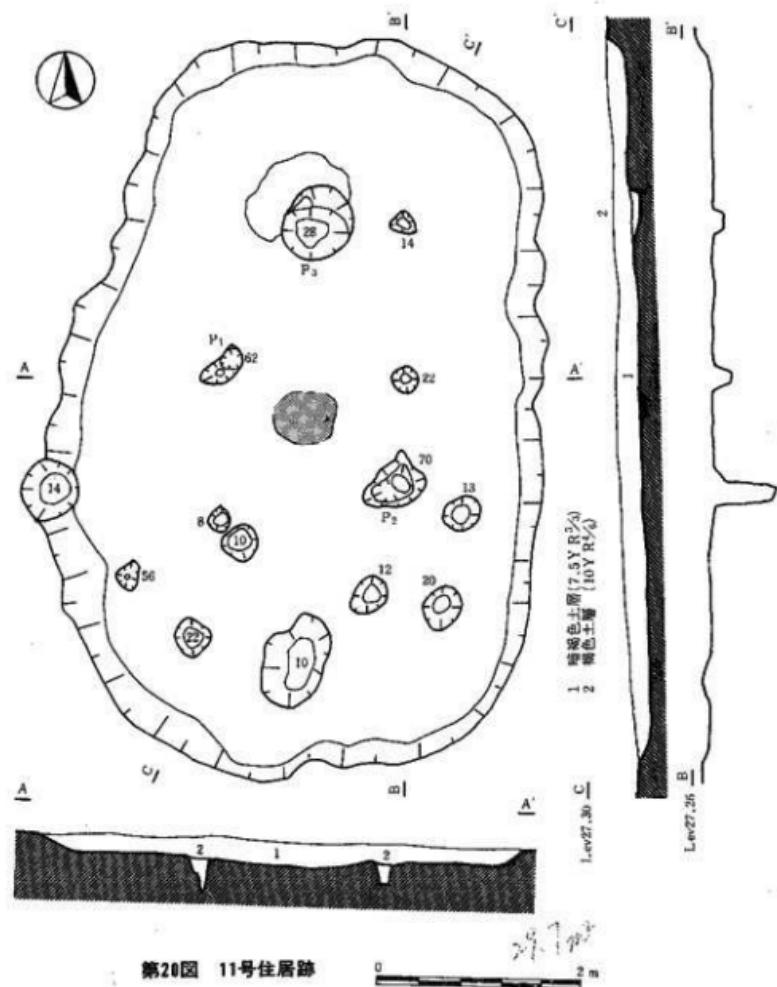
〈平面形〉長軸7.0m、短軸4.3mの楕円形プラン。長軸方向は、短軸N-Sを示す。

〈壁・床〉壁は2.5度で10cm立ち上がる。床面は、やや起伏がある。

〈炉〉ほぼ中央に地床炉。

〈柱穴〉2個の柱穴（P₁、P₂）しか確認できなかった。

〈施設〉長軸線上に緑のあるピット（P₃）

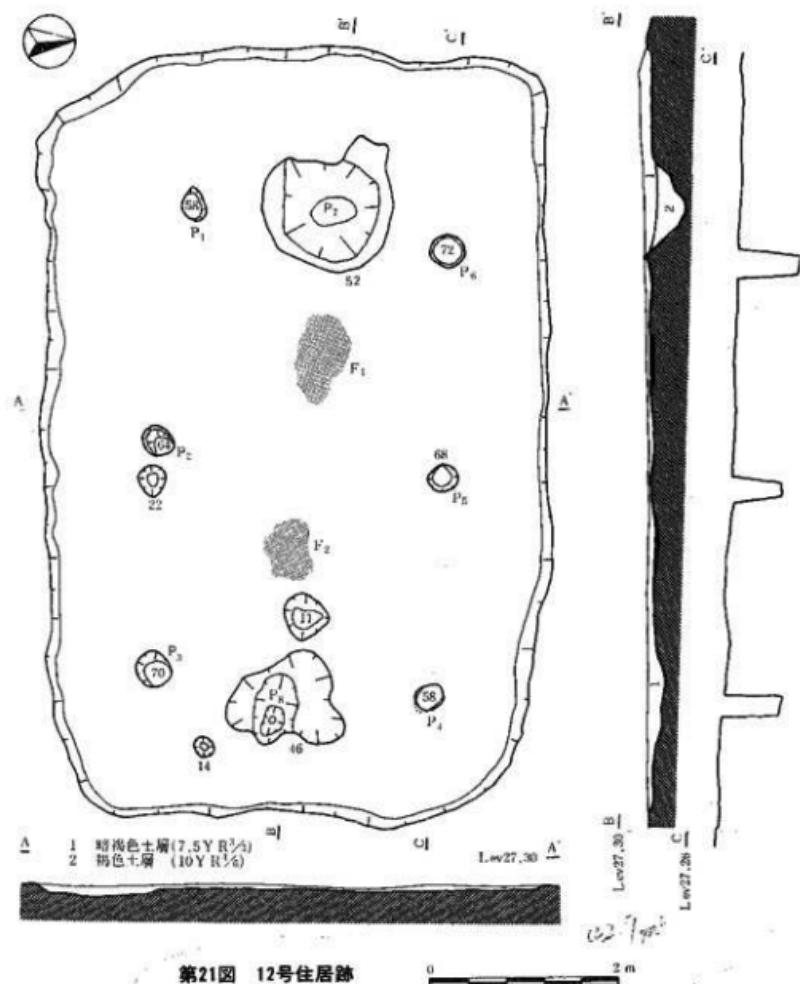


第20図 11号住居跡

12号住居跡（第21図、図版9）

- 〈平面形〉長軸8.0m、短軸5.2mの隅丸長方形プラン。長軸方向は、W-Eを示す。
- 〈壁・床〉壁は40度で、4~5cm立ち上がる。床面は凹凸が激しい。
- 〈炉〉長軸線上に、F1・F2の地床炉。
- 〈柱穴〉長軸線を中心に3個ずつ平行して並ぶ。P1~P6が主柱穴。

〈施設〉長軸線上に、縁のあるすり鉢状のピット（P 7），と縁のないピット（P 8）がある。



第21図 12号住居跡

13号住居跡（第22図、図版9）

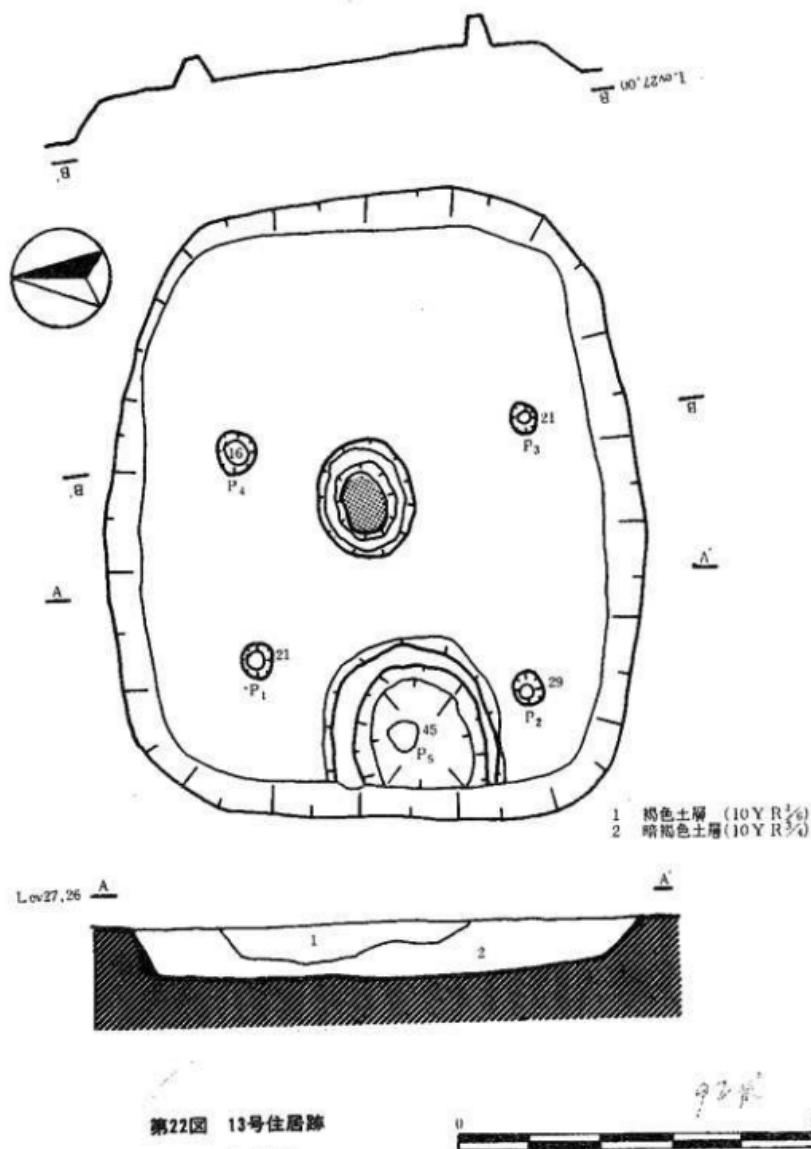
〈平面形〉長軸3.2mの隅丸長方形プラン。長軸方向は、W-Eを示す。

〈壁・床〉壁は50度で30cm立ち上がる。床面はほぼ平坦。

〈炉〉中央に浅く掘り凹めた炉。炉には縁がめぐる。焼土は薄い。

〈柱穴〉 長軸線上に平行に 2 ずつ並ぶ。P₁ ~ P₄ は主柱穴。

〈施設〉 長軸線上の西壁に接して縁のめぐるすり鉢のピット (P₅)。



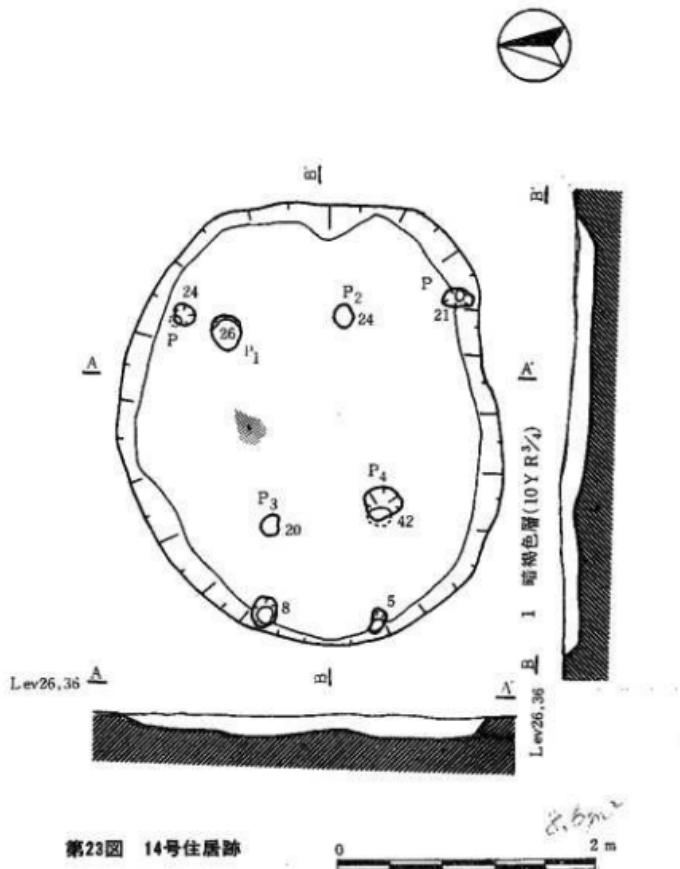
14号住居跡（第23図）

〈平面形〉長軸3.0m短軸2.6mの円形に近い橢円形プラン。長軸方向は、W-Eを示す。

〈壁・床〉壁は40度で15cm立ち上がる。床面は、凹凸が激しい。

〈炉〉長軸線北寄りに地床炉。

〈柱穴〉長軸線を中心に2個ずつ平行して並ぶ。P₁～P₄が主柱穴。

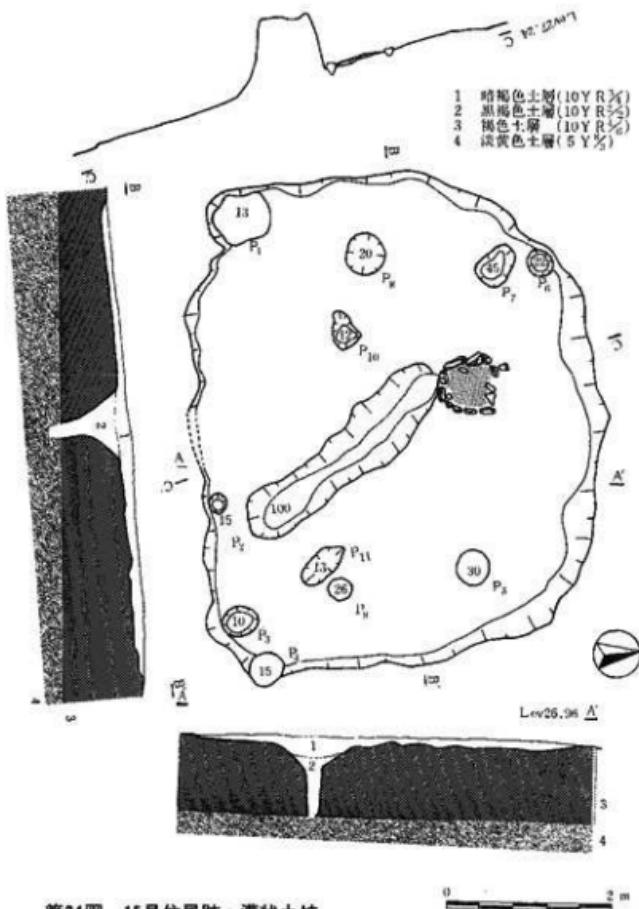


15号住居跡（第24図、図版11）

〈平面形〉不規則円形。長軸5.74m、短軸4.65m。

〈壁・床〉浅い掘り込みで壁高3～6cm。床面はしまっている。

〈炉〉中央より北に石壠炉。



第24図 15号住居跡・溝状土塀

〈柱穴〉 11個の柱穴が検出された。

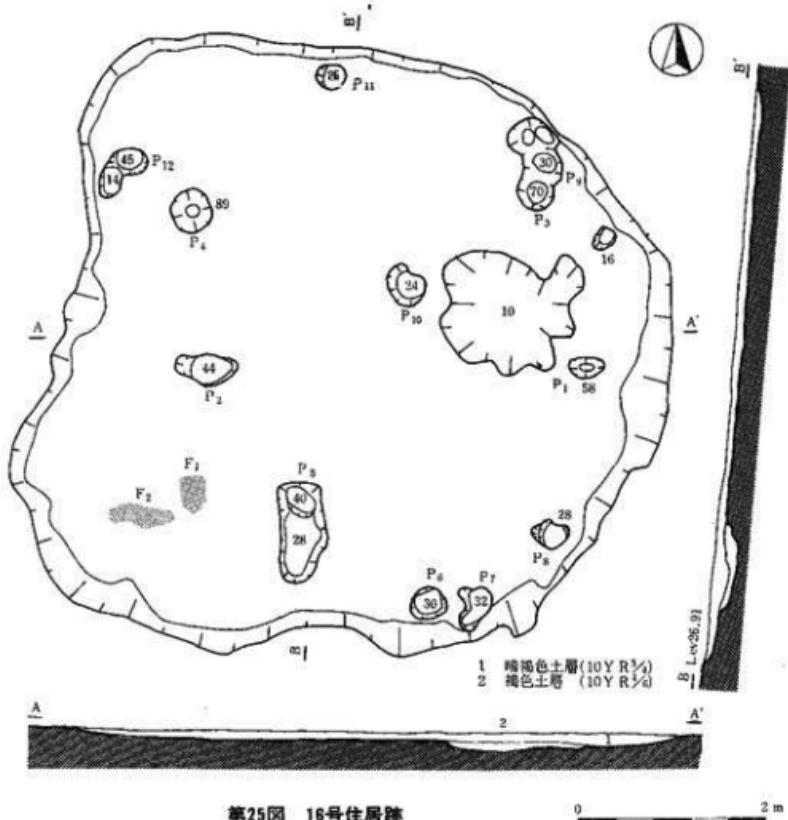
16号住居跡（第25図）

〈平面形〉 不整円形。長軸5.97m、短軸5.88m。

〈壁・床〉 壁高は6~10cmで、ゆるやかに傾斜する。床面は平坦で、堅くしまっている。

〈炉〉 石のぬき取られた思われる炉。

〈柱穴〉 柱穴と考えられるピットは12個検出。



第25図 18号住居跡

0 2 m

17号住居跡（第26図）

〈平面形〉 南側の壁ははっきりしない。東西径は 5 m。

〈壁・床〉 北側で壁高 5 cm、南側は攪乱で不明。床面には凹凸があるが、堅くしまっている。

〈炉〉 北東よりに石囲炉。床面の一部が焼けている。

〈柱穴〉 柱穴と考えられるのは P₁ ~ P₁₂。壁にそってめぐる。

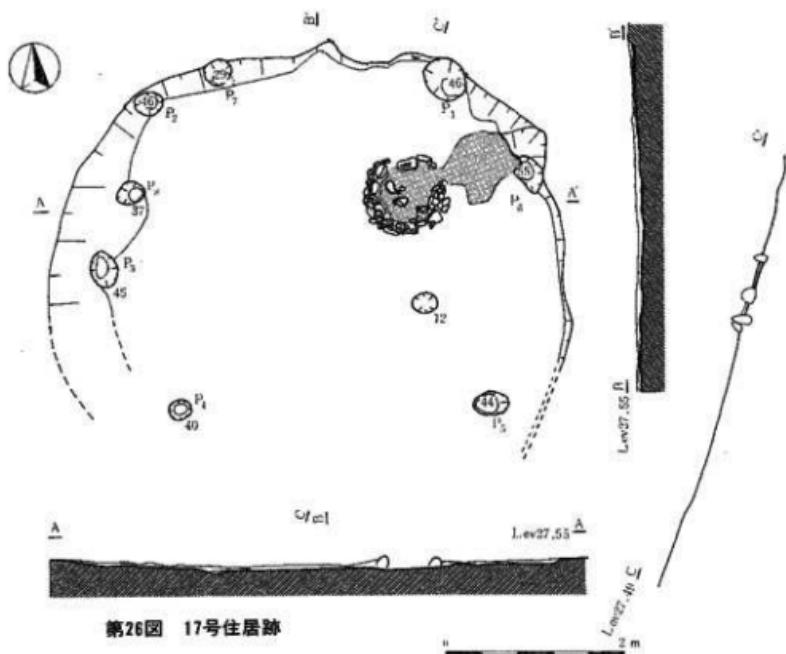
18号住居跡（第27図、図版12）

〈平面形〉 径 5.5 m ~ 6.21 m を測る不整橢円形。

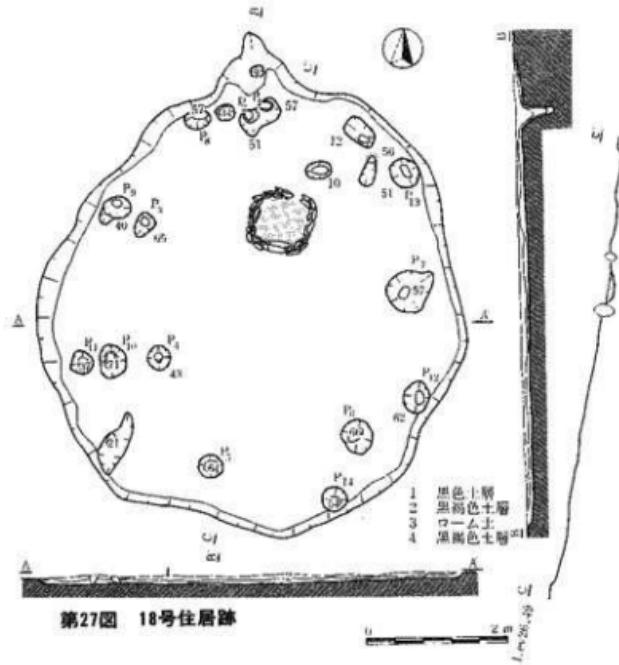
〈壁・床〉 壁高は 5 ~ 6 cm。ゆるやかに傾斜する。床面は平坦で、堅くしまっている。

〈炉〉 北よりに石囲炉。

〈柱穴〉 P₁ ~ P₁₄ が主柱穴もしくは補助穴と考えられる。



第26図 17号住居跡



第27図 18号住居跡

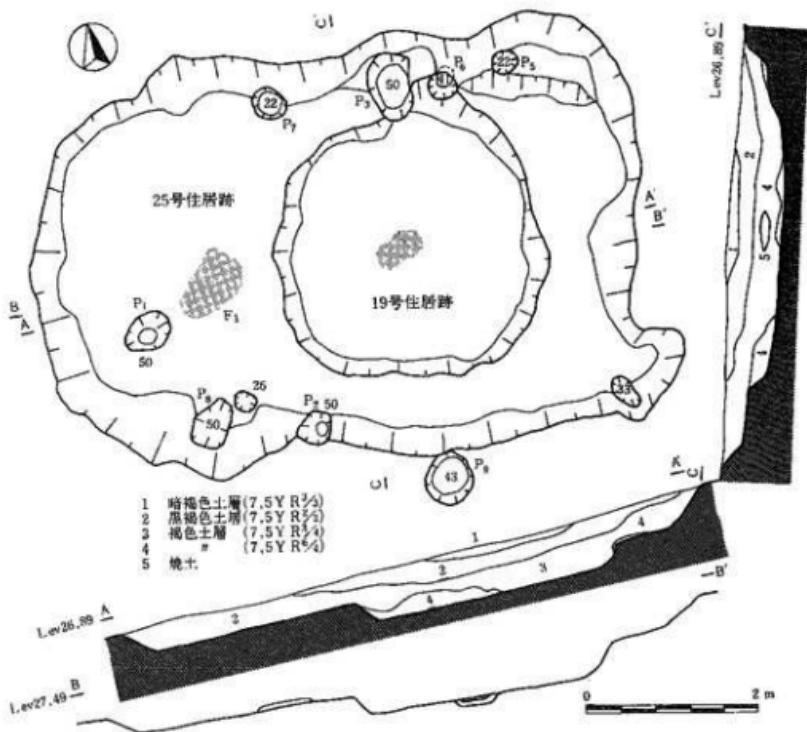
19号住居跡（第28図、図版12）

〈平面形〉 25号住居跡と重複。本遺構が古い。直径2.76mの円形。

〈壁・床〉 壁高は25m～30cm。急傾斜をなして落ち込む。床面は平坦、かたくしまる。

〈炉〉 中央部に位置する地床炉。

〈柱穴〉 不明である。



第28図 19・25号住居跡

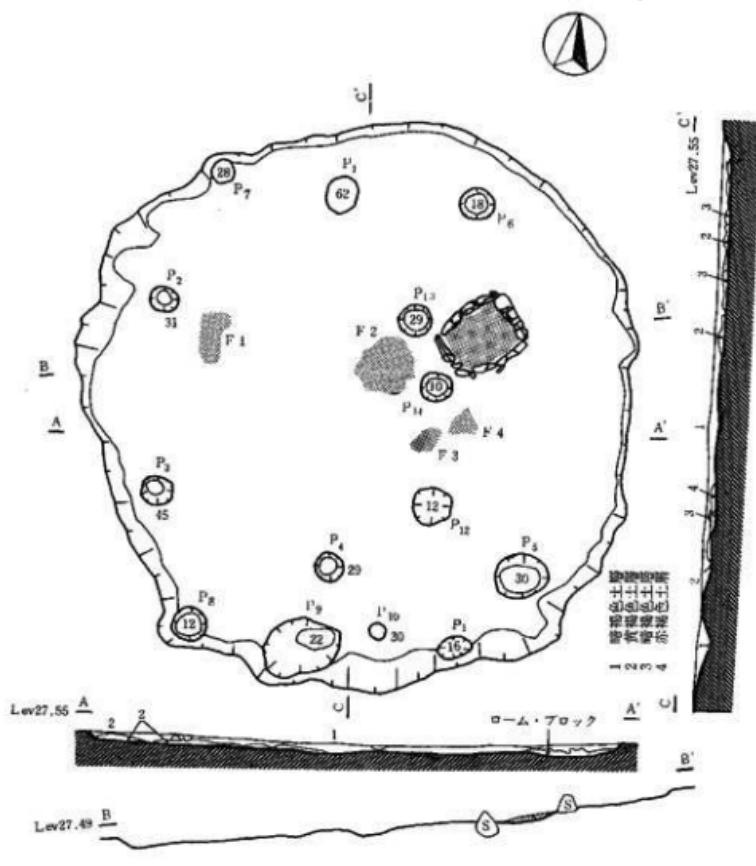
20号住居跡（第29図、図版13）

〈平面形〉 直径4.8mの円形。

〈壁・床〉 壁高は7～10cmで、ゆるやかに床面につづく。床面は凹凸をなすが、堅くしまっている。

〈炉〉 北東よりに石圓炉。この周辺に焼土F2～F4あり。北西よりにF1。

〈柱穴〉 14個の柱穴状ビットが検出された。



第29図 20号住居跡



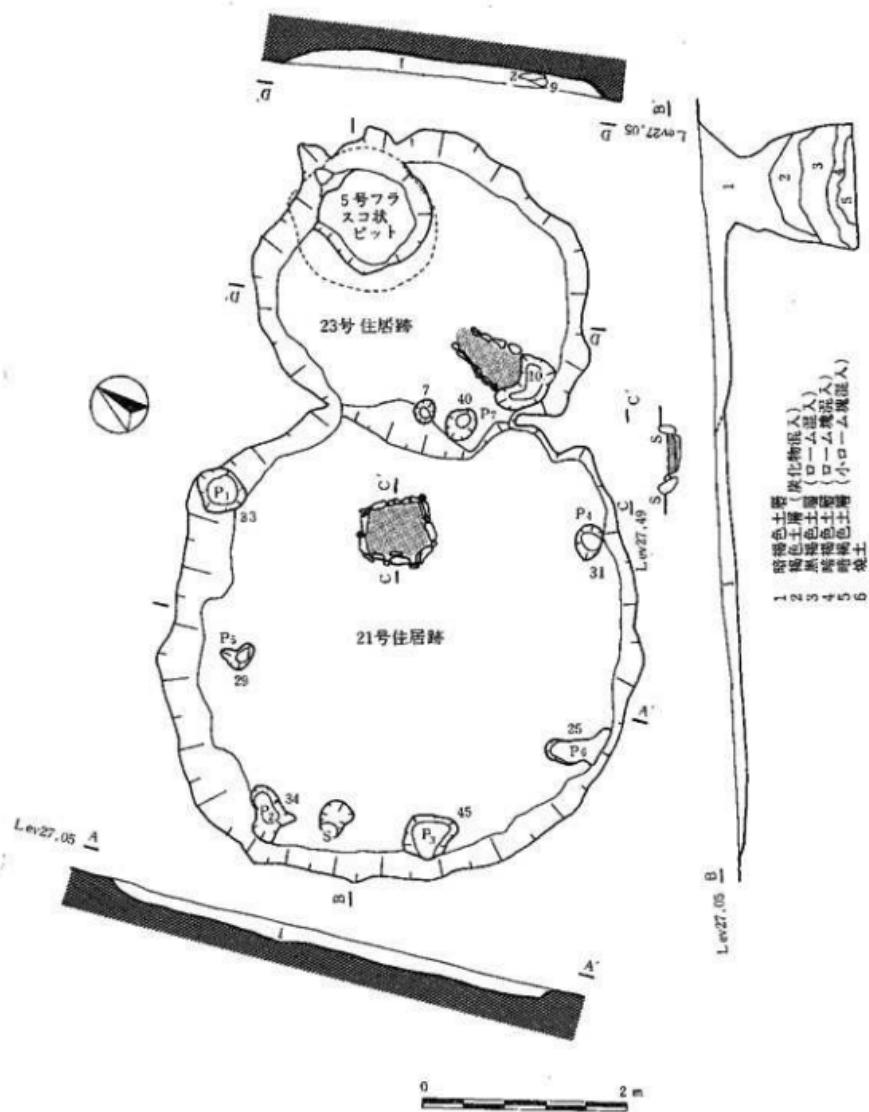
21号住居跡（第30図、図版13）

〈平面形〉 東側の部分が23号住居跡と重複している。本住居跡が古い。径4.2mの円形。

〈壁・床〉 壁高は10~12cm。床面はゆるやかな起伏を呈し、堅くしまっている。

〈炉〉 東北よりに石囲炉。

〈柱穴〉 壁にそって配置されたP₁~P₇。



第30図 21.23号住居跡、5号フラスコ状ビット ピット

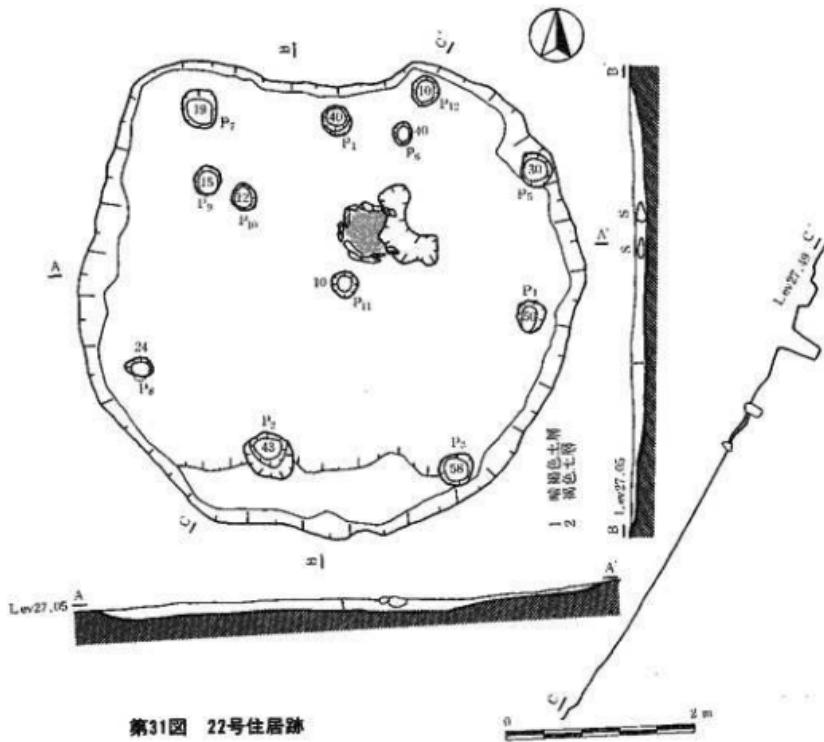
22号住居跡（第31図、図版14）

〈平面形〉 直径4.8mの不整円形。

〈壁・床〉 壁高は8~10cmで、床面になだらかに続く。床面平坦で、堅くしまる。

〈炉〉 石圓炉。

〈柱穴〉 内部から12個の柱穴状ピットが検出された。



第31図 22号住居跡

23号住居跡（第30図、図版13）

〈平面形〉 直径2.9mほどの円形を呈する。西側において21号住居跡と切り合う。本住居跡が新しい。

〈壁・床〉 壁高は1.5cmを測る。床面は堅くしまる。5号フラスト状ピットを付設している。

〈炉〉 南側に開く石組炉。

〈柱穴〉 確認されなかった。

24号住居跡（第32図、図版14）

〈平面形〉不整隅丸長方形。長軸5.8m、短軸4.95m。

〈壁・床〉壁高は3~5cm。ゆるやかに床面に続く。よくしまっている。

〈炉〉石圓炉。床面に焼土あり。

〈柱穴〉柱穴状ピット13個検出された。



第32図 24号住居跡

25号住居跡（第28図、図版12）

〈平面形〉不整橢円形。長軸6.90m、短軸3.90m。長軸は東西方向を向く。19号住居跡と重複。

〈壁・床〉壁高は3.0~4.0cm。急傾斜をなして床面に移行する。床面はかたくしめる。

〈炉〉地床炉。

〈柱穴〉9個検出された。

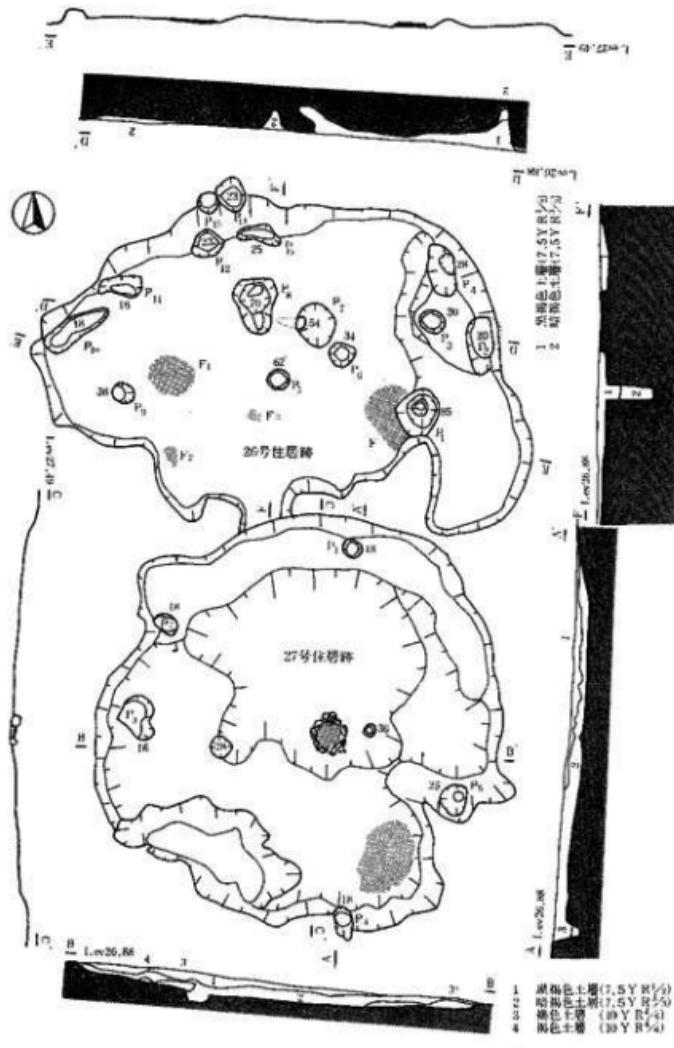
26号住居跡（第33図、図版15）

〈平面形〉不整橢円形

〈壁・床〉壁高は北側において10~15cm、南側4~5cm。

〈炉〉焼土面が4ヵ所検出。

〈柱穴〉柱穴らしいピット15個。



第33図 26・27号住居跡

27号住居跡（第33図、図版15）

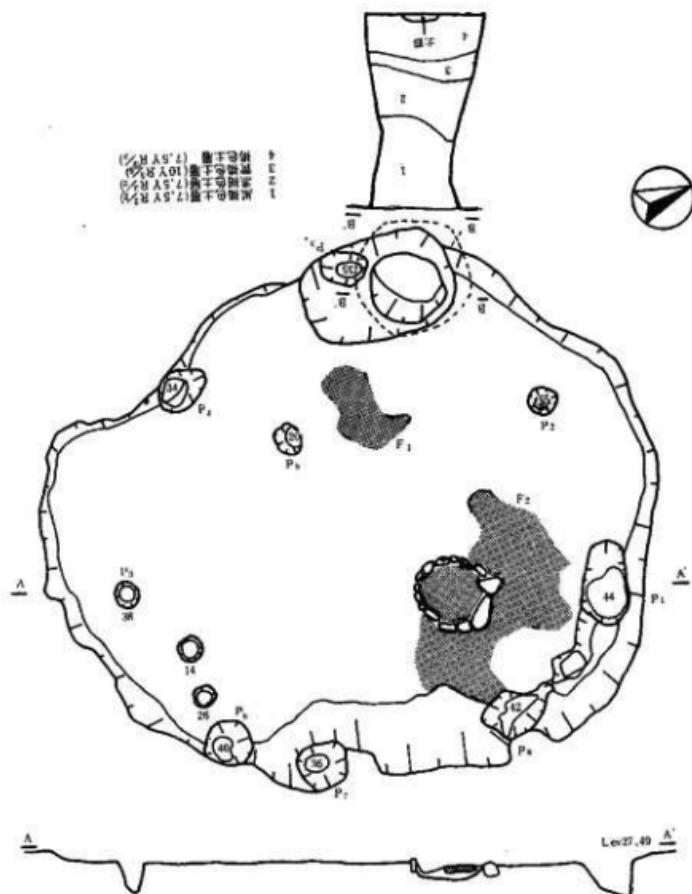
〈平面形〉 不整円形。径約5.2m。

〈壁・床〉 壁高は10~20cmで、ゆるやかに床面に統く。

〈炉〉 石開炉。

〈柱穴〉 壁にそって配置されたP1~P5が柱穴であろう。

28号住居跡（第34図、図版15）



第34図 28号住居跡・4号フラスコ状ピット



〈平面形〉 不整円形で径5.3～4m。

〈壁・床〉 壁高は約10cm。床面は平坦で堅くしまる。第4号フラスコ状ピットを付設する。

〈柱穴〉 號にそって配置されたP1～P8が主柱穴であろう。

〈炉〉 石圓炉

29号住居跡（第35図）

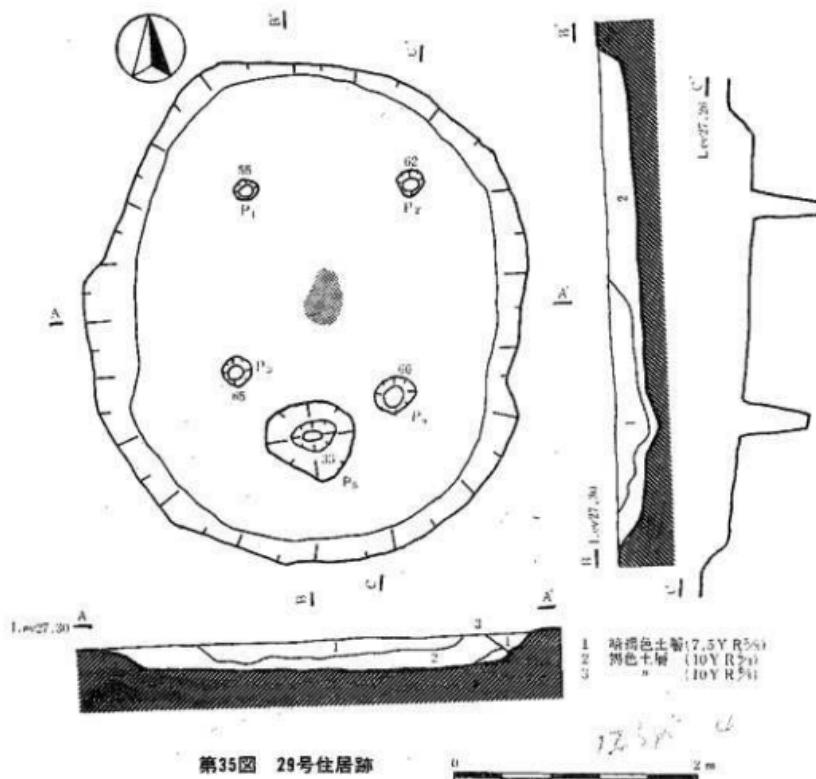
〈平面形〉 長軸3.96m、3mの橢円形プラン。長軸はN-S方向を向く。

〈壁・床〉 壁高は20～25cm。床面は平坦で堅くしまる。

〈炉〉 地床炉

〈柱穴〉 主柱穴4本（P1～P4）。長軸線を中心に2本ずつ並ぶ。

〈施設〉 長軸線上には、すり鉢状のピット（P5）がある。



第35図 29号住居跡

30号住居跡（第36図、図版10）

〈平面形〉長軸5.70m、短軸3.40mの隅丸長方形。長軸方向はN-Sを示す。

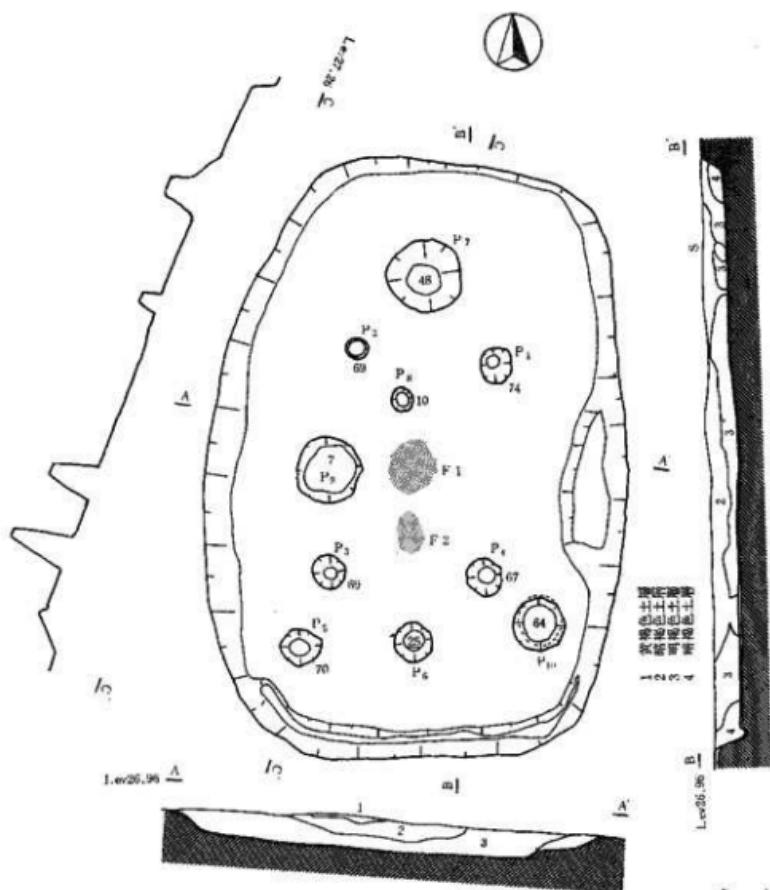
〈壁・床〉壁高2.5cm。急角度で床面にいたる。床面は平坦で、かたくしまっている。

〈周溝〉南側壁に沿ってめぐる。幅4~5cm。深さ4cm。長さ3.60m。

〈炉〉長軸線上に地床炉。

〈柱穴〉P₁~P₄が主柱穴。長軸線を中心にして2本ずつ並ぶ。

〈施設〉長軸線上にりす鉢状のピット（P₇）がある。東壁中央には階段状の施設があり入口ではないかと考えられる。



第36図 30号住居跡

31号住居跡（第37図、図版10）

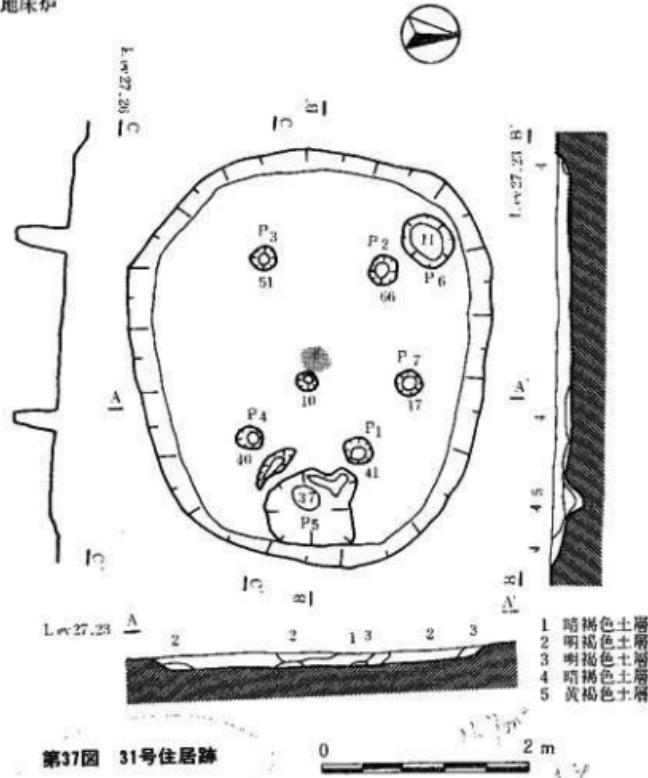
〈平面形〉長軸3.55m、短軸3.60mの楕円形。長軸はE-W方向を示す。

〈壁・床〉壁の立ち上がりが急である。床面は平坦でしっかりしている。

〈柱穴〉長軸線に平行して2個ずつ並ぶ。P₁～P₄が主柱穴。

〈施設〉長軸線上にすり鉢状のピット（P₅）あり。

〈炉〉地床炉



32号住居跡（第38図）

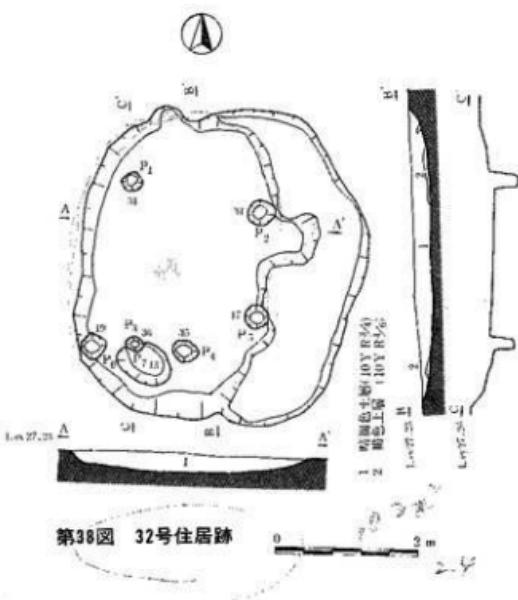
〈平面形〉楕円形プラン。長軸4.0m、短軸3.8m。長軸はN-S方向を向く。

〈壁・床〉壁高1.5m。床面は平坦で、しっかりしている。

〈炉〉地床炉。

〈柱穴〉P₁～P₄が主柱穴であろう。

〈施設〉長軸線上にピット（P₇）がある。



第38図 32号住居跡

33号住居跡（第39図）

〈平面形〉 径6.6～5.4mの不整橢円形。長軸方向はN-Sを示す。

〈壁・床〉 壁高は8～5cm、床はしっかりしている。

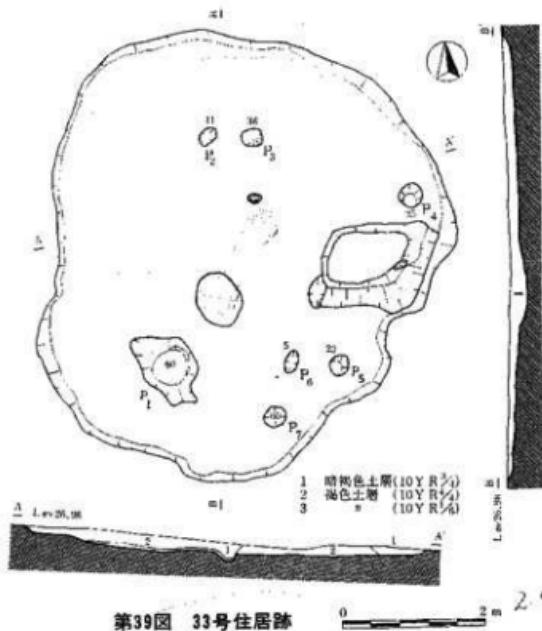
〈炉〉 地床炉

〈柱穴〉 P₁～P₇の柱穴状ビットが検出される。

34号住居跡（第40図、図版

11)

〈平面形〉 長軸3.4m、短軸2.42mの橢円形を呈する。長軸方向はN-Sを示す。



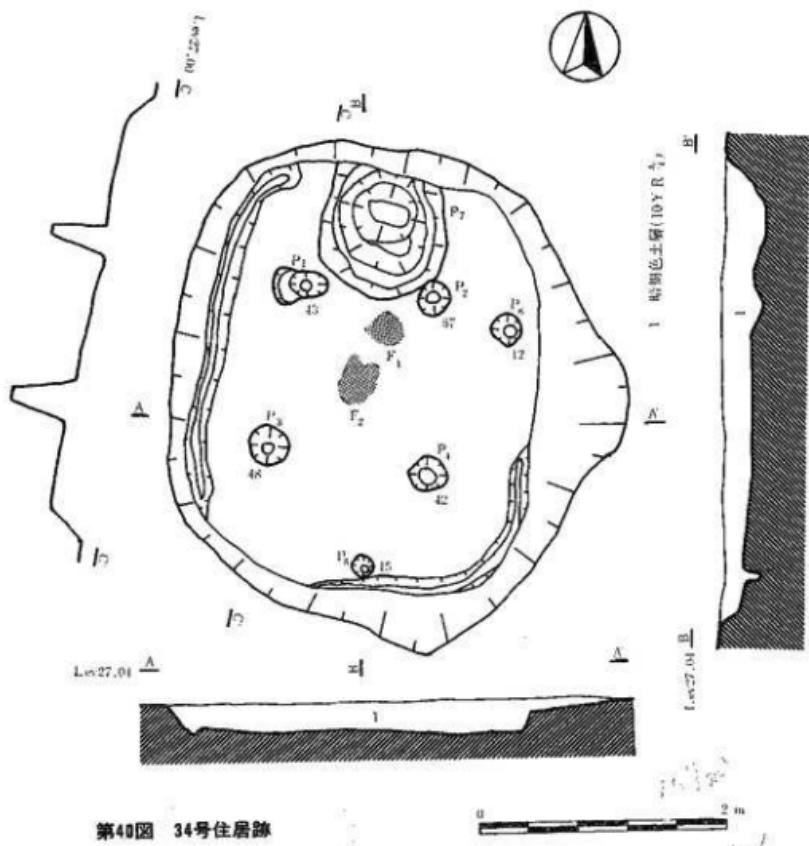
第39図 33号住居跡

〈壁・床〉 壁高 2.0 cm。東壁を除き壁面は急である。床面はかたくしまる。

〈周溝〉 南東コーナーと西壁に認められる。

〈施設〉 中軸線上に北壁に接して、縁のめぐったピットがある (P 7)。

〈柱穴〉 P 1 ~ P 4 が主柱穴。長軸線に平行して 2 個ずつ並ぶ。

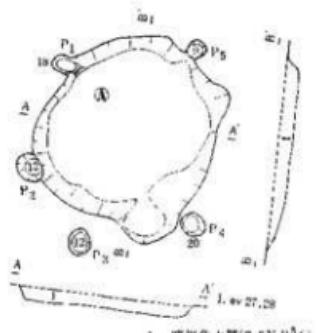


第40図 34号住居跡

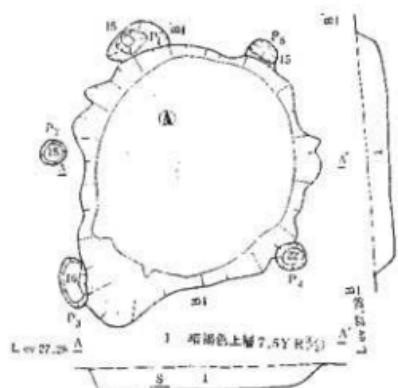
② 穫穴造構 (第41図、図版16)

長軸 2.3 m、短軸 2.0 m の不整指円形。床面は 50 度で 1.7 cm 立ち上がる。床面はかたくしまる。

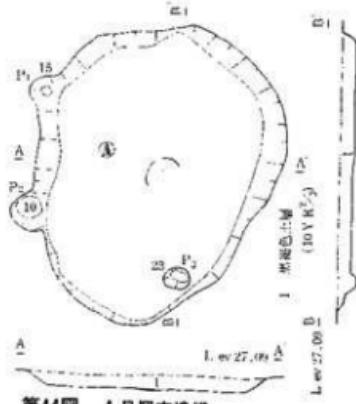
ほぼ中央に焼土あるが、小さく薄い。周囲に P 1 ~ P 5 のピットがめぐる。



第41図 1号竪穴遺構



第42図 2号竪穴遺構



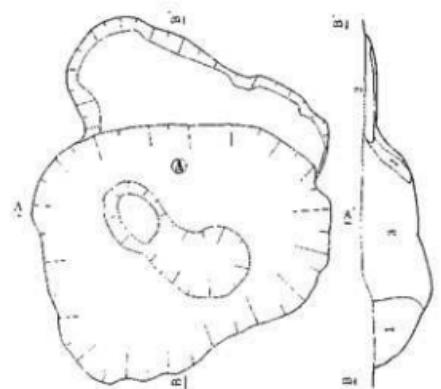
第44図 4号竪穴遺構

2号竪穴遺構（第42図、図版16）

長軸12.8m、短軸2.5mの不整梢円形プラン。壁は30度で2.6cm立ち上がる、床面はほぼ平坦で、中央に薄い焼土がある。周囲にP₁～P₅のピットがめぐる。

3.5.11.19号竪穴遺構（第43図）

平面形が1辺2～3mの不整方形を呈する。1.5mほど掘り込まれているが、埋土の状況を観察すると、いったん掘り上げた土をすぐうめもどしたような状況であった。遺物は皆無である。後世の仕事でないだろうか。11号の実測図のみ提示した。



第43図 11号竪穴遺構

4号竪穴遺構（第44図、図版17）

長軸3.5m、短軸2.5mの不整梢円形。2.0cmほどの深さ。床面は平坦で、ほぼ中央に焼土あり。

6号竪穴造構（第45図）

直径1mほどの円形プラン。60cmの深さである。

7号竪穴造構（第46図）

直径0.8mの円形プラン。壁は65度で28cm立ち上がる。床面平坦。

8号竪穴造構（第47図）

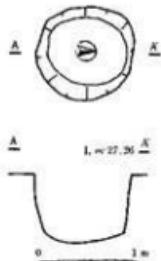
長軸1.2m、短軸0.6mの不整橢円形。壁は30度で8cm立ち上がる。底面はゆるやかに凹む。

9号竪穴造構（第48図）

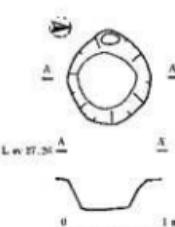
長軸3.1m、短軸2.10mの不整橢円形。壁は20度で20cm立ち上がる。平坦な床面中央に薄い焼土が認められる。壁の外周に5個のピット（P₁～P₅）。

10号竪穴造構（第49図、図版17）

長軸2.3m、短軸1.84mの不整橢円形プラン。深さ10cm。床面ほぼ平坦。かすかに焼土が認められる。



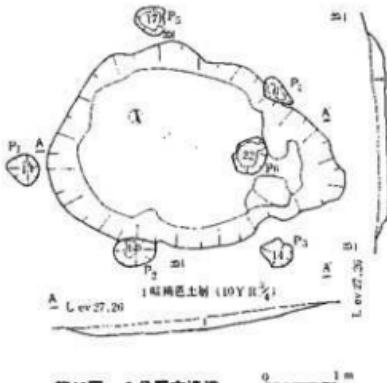
第45図 6号竪穴造構



第46図 7号竪穴造構



第47図 8号竪穴造構



第48図 8号竪穴造構



第49図 10号竪穴造構

12号竪穴遺構（第50図）

長軸1.9m、短軸1.5mの不整橢円形プラン。深さ約1.0cm。床面中央に薄い焼土あり。壁の外周にP₁～P₃がめぐる。

13号竪穴遺構（第51図）

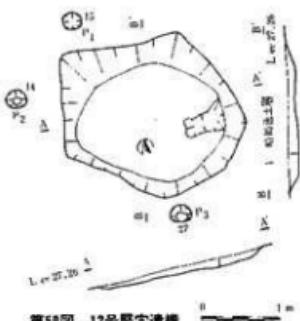
長軸2.0m、短軸1.7mの橢円形プラン。深さ1.0cm。平坦な床面中央に薄い焼土が認められる。

14号竪穴遺構（第52図）

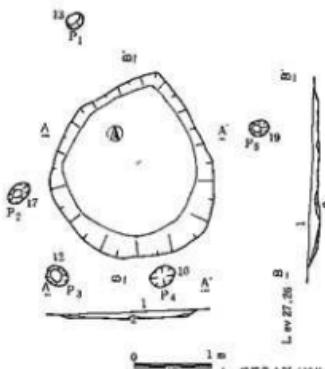
直径1mの不整円形プラン。深さ8cm。

15号竪穴遺構（第53図）

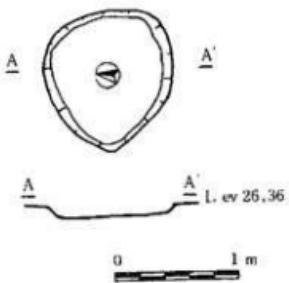
長軸0.9m、短軸0.7mの橢円形プラン。深さ1.0cm。床面平坦。



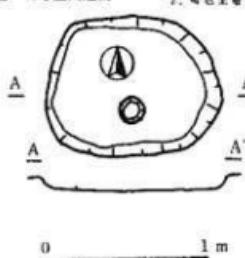
第50図 12号竪穴遺構



第51図 13号竪穴遺構



第52図 14号竪穴遺構



第53図 15号竪穴遺構

16号竪穴造構（第54図）

直径0.3mの円形プラン。深さ10cm。床面やや起伏あり。

17号竪穴造構（第55図）

直径0.8mの円形プランの深さ56cm。床面は平坦。

18号竪穴造構（第56図）

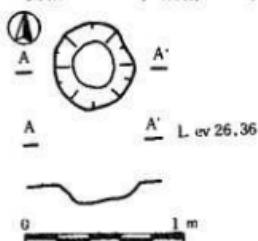
直径8.4cmの円形プラン、深さ6.0cm。

20号竪穴造構（第57図）

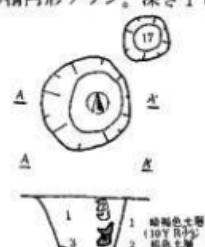
長軸3.6m、短軸3.0mの不整橢円形。深さ10cm、平坦な床面に薄い焼土。

21号竪穴造構（第58図）

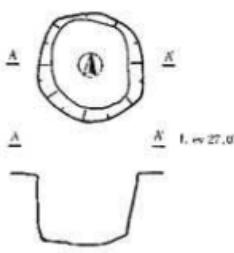
長軸0.78m、短軸0.76mの楕円形プラン。深さ10cm。



第54図 16号竪穴造構



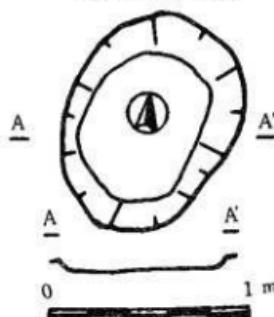
第55図 17号竪穴造構



第56図 18号竪穴造構



第57図 20+23号竪穴造構



第58図 21号竪穴造構



第59図 22号竪穴遺構

22号竪穴遺構（第59図、図版18）

直径3.1mの不整円形プラン。深さ10cm。床面中央に焼土あり。

23号竪穴遺構（第57図）

直径0.6mの円形プラン。深さ10cm。



第57図 23号竪穴遺構

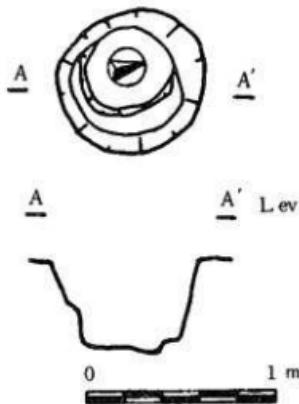
長軸3.1m、短軸2.8mの不整橢円形プラン。床面に薄い焼土あり。壁に沿って5個のピットがめぐる。

24号竪穴遺構（第60図）

直径0.68mの円形プラン。50cmの深さ。

26号竪穴遺構（第62）

直径0.78mの円形プラン。深さ38cm。



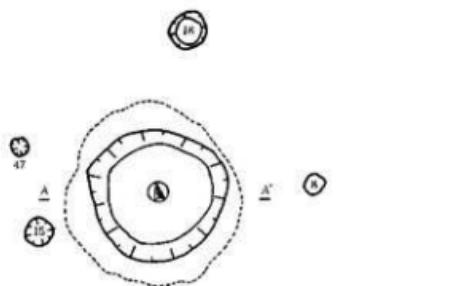
第61図 25号竪穴遺構

26号竪穴遺構

⑧ フラスコ状ピット

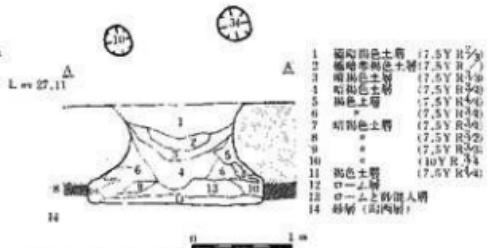
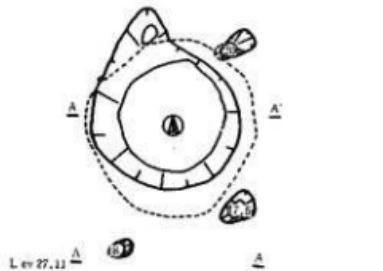
1号フラスコ状ピット (第63図、図版18)

口縁部1.32m、口頸部1.02m、底径1.74m、深さ1.08m。砂層まで掘り込んでいる。周辺に6個のピットを有する。



2号フラスコ状ピット (第64図)

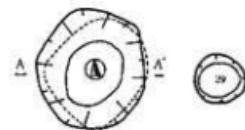
口縁部1.50m、口頸部1.03m、底径1.20m、深さ1.74m。砂礫層まで掘り込む。周辺に3個のピット。



第63図 1号フラスコ状ピット

3号フラスコ状ピット (第65図)

口縁部1.08m、口頸部0.48m、底部1m、深さ1.18m。砂層まで掘り込んでいる。周辺に2個のピット。



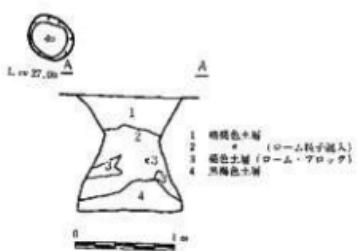
第64図 2号フラスコ状ピット

4号フラスコ状ピット (第34図)

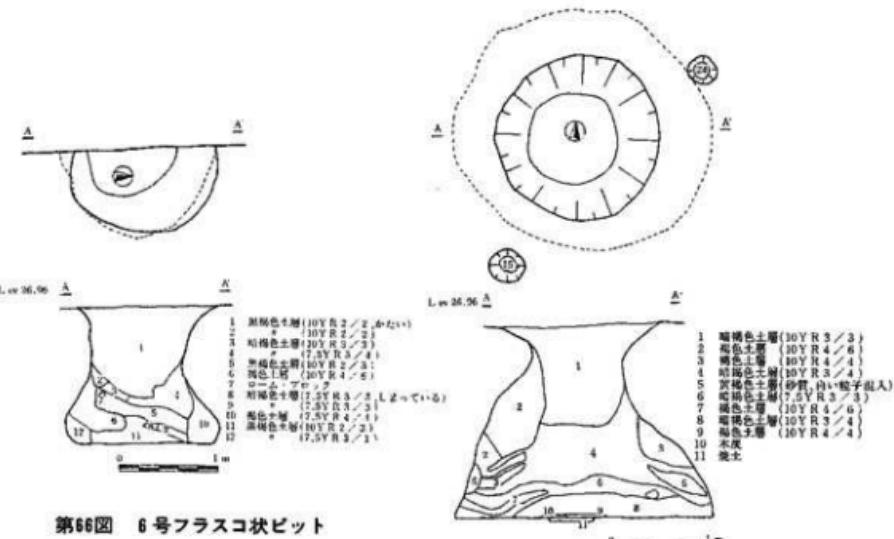
28号住居跡に付設されたものと考えられる。
口縁部0.7m、口頸部0.56m、底部0.98m深さ
1.27m、砂層まで掘り込んでいる。

5号フラスコ状ピット (第30図)

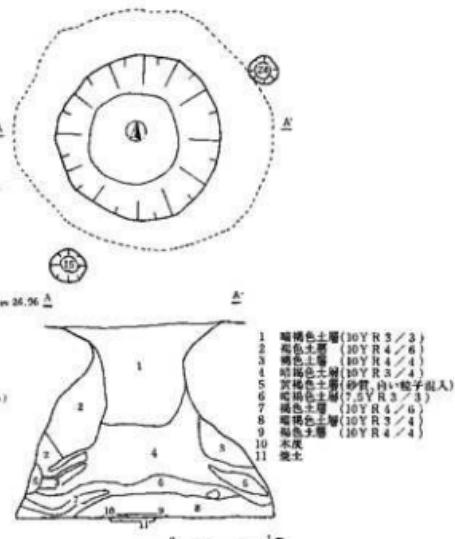
23号住居跡に付設されていたと考えられる。
口縁部1.64m、口頸部0.9m、底部2.6m、深さ
1.94m。砂層まで掘り込んでいる。



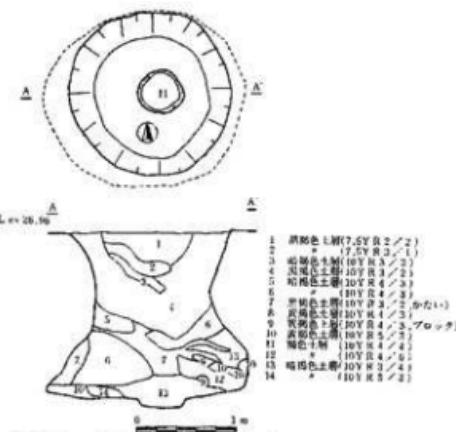
第65図 3号フラスコ状ピット



第66図 6号フラスコ状ピット



第67図 7号フラスコ状ピット



第68図 8号フラスコ状ピット

6号フラスコ状ピット（第66図）

口縁部1.4m, 口頸部0.7m, 底部1.4m,

深さ1.4m。壁の崩壊がみられる。

7号フラスコ状ピット（第67図, 図版19）

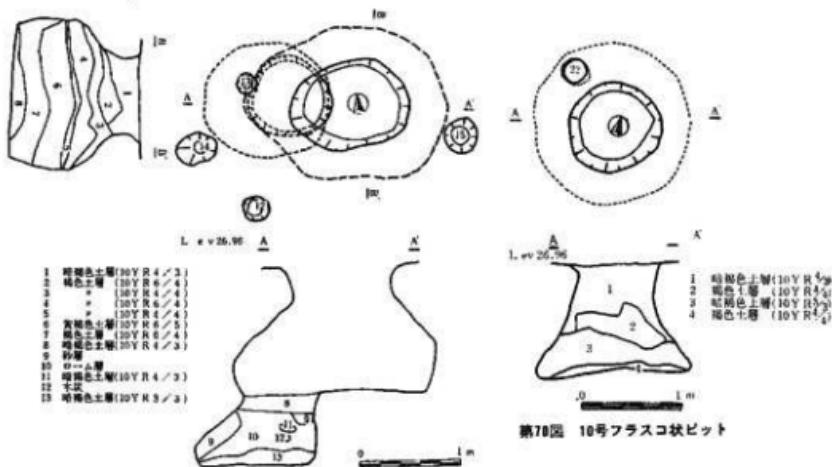
口縁部1.64m, 口頸部0.9m底部2.6m

深さ1.94m。砂層まで掘り込んでいる。

8号フラスコ状ピット（第68図）

口縁部1.62m, 口頸部1.14m, 底部

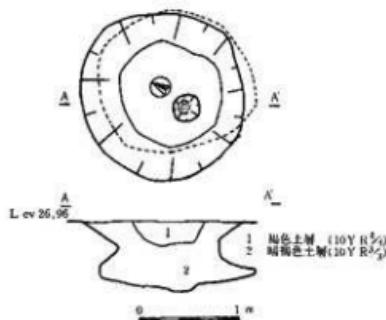
2m, 深さ1.93mの底部に浅いピットあり。



第68図 5号 flask状ビット

9号 flask状ビット (第69図)

二重構造の flask状ビット である。上段の口
緑部 0.9 m、口頸部 0.76 m、底部 1.4 m、深さ
1.28 m。口緑部は 0.86 m、口頸部 0.78 m、
底部 0.12 m、深さ 0.72 m。周辺に 4 個のビット
トあり。

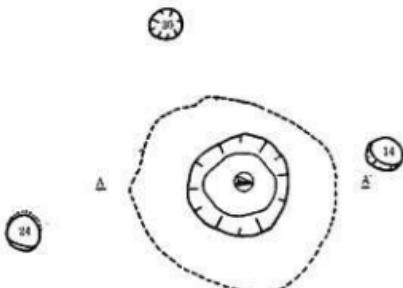


第69図 9号 flask状ビット

b.

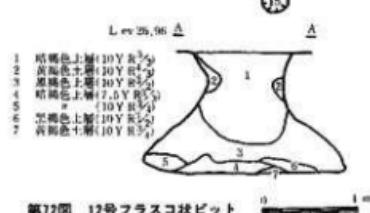
10号 flask状ビット (第70図)

口緑部 0.9 m、口頸部 0.8 m、底部 1.5 m、深
さ 1.04 m。

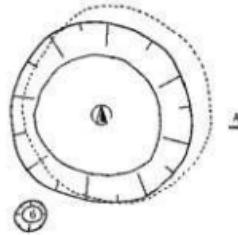


11号 flask状ビット (第71図、図版20)

口緑部 1.6 m、口頸部 1 m、底部 1.58 m、深
さ 0.66 m。底部中央に浅いビットあり。



第71図 11号 flask状ビット



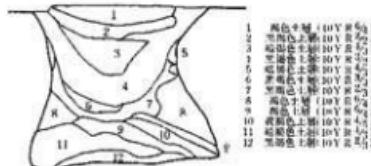
12号フラスコ状ピット（第72図、図版20）

口縁部1.06m, 口頸部0.8m, 底部2.12m,
深さ1.3m。周辺に4個のピット。

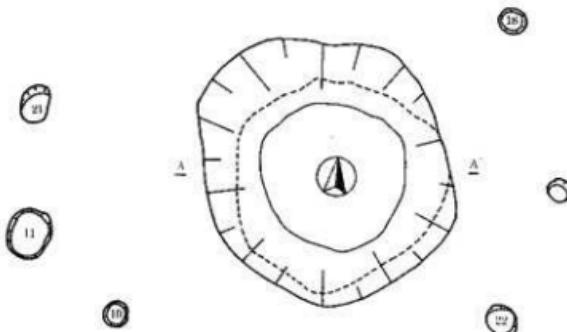


13号フラスコ状ピット（第73図、図版21）

口縁部2.46m, 口頸部1.52m, 底部2.2m,
深さ2.02m。周囲に10個の柱穴状ピットを配置。

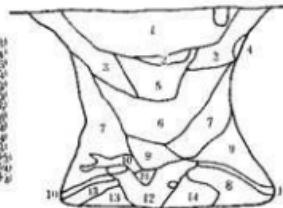


第74図 14号フラスコ状ピット



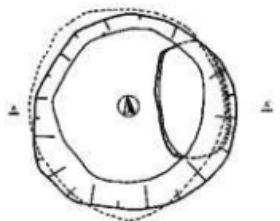
L rev 26.96

A A'



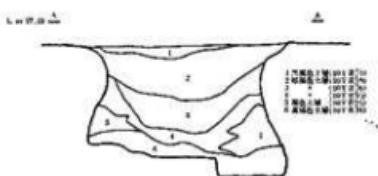
第75図 15号フラスコ状ピット

0 1m



14号 フラスコ状ビット (第74図)

口縁部1.79m, 口頭部1.26m, 底部
1.9m, 深さ1.60m。



15号 フラスコ状ビット (第75図)

口縁部1.9m, 口頭部1.44m, 底部
1.86m, 深さ1.06m, 底部東壁に接し
て梢円形のビットあり。

第75図 15号 フラスコ状ビット

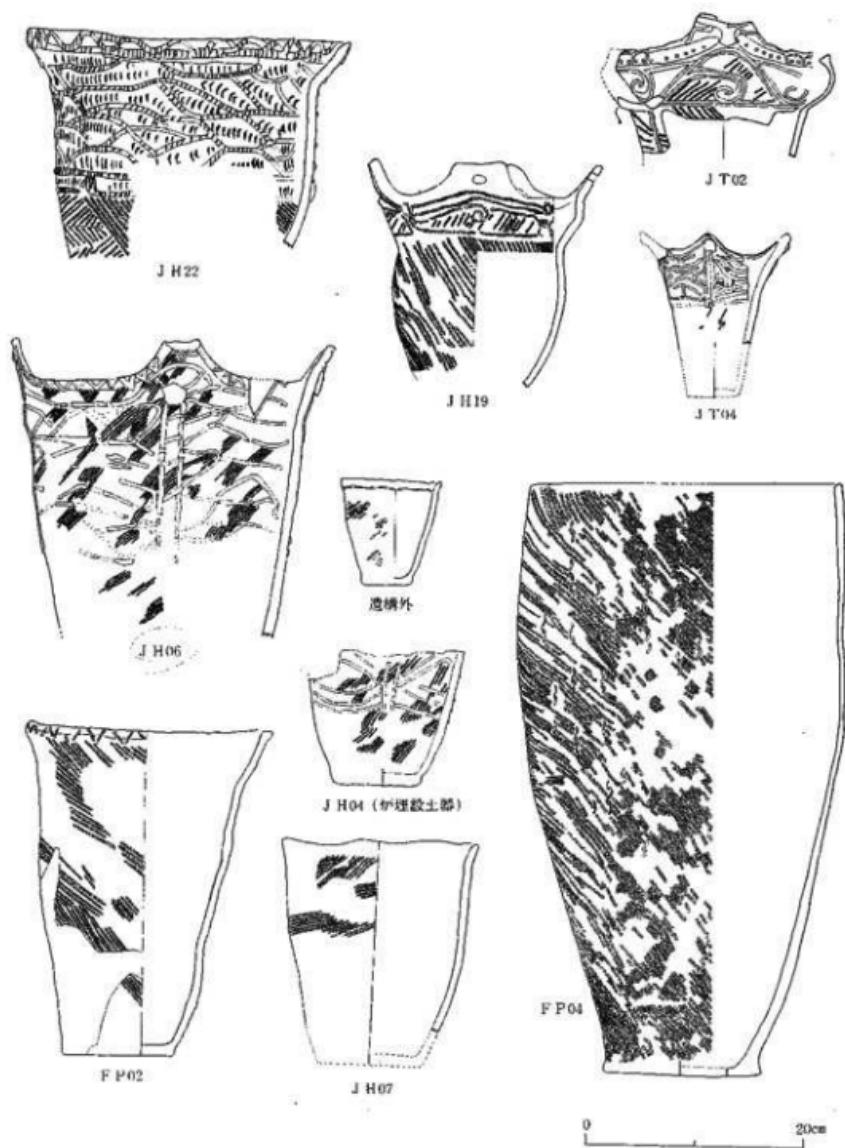
⑧ 溝状土塹 (第24図, 図版11)

15号住居跡と重複した状態で検出された。溝状土塹のほうが古い。口縁部0.5~0.72m,
底部0.2~0.76m, 深さ1m, 長さ2.94m。地山面を掘り下げ、淡黄色粘土層に達している。

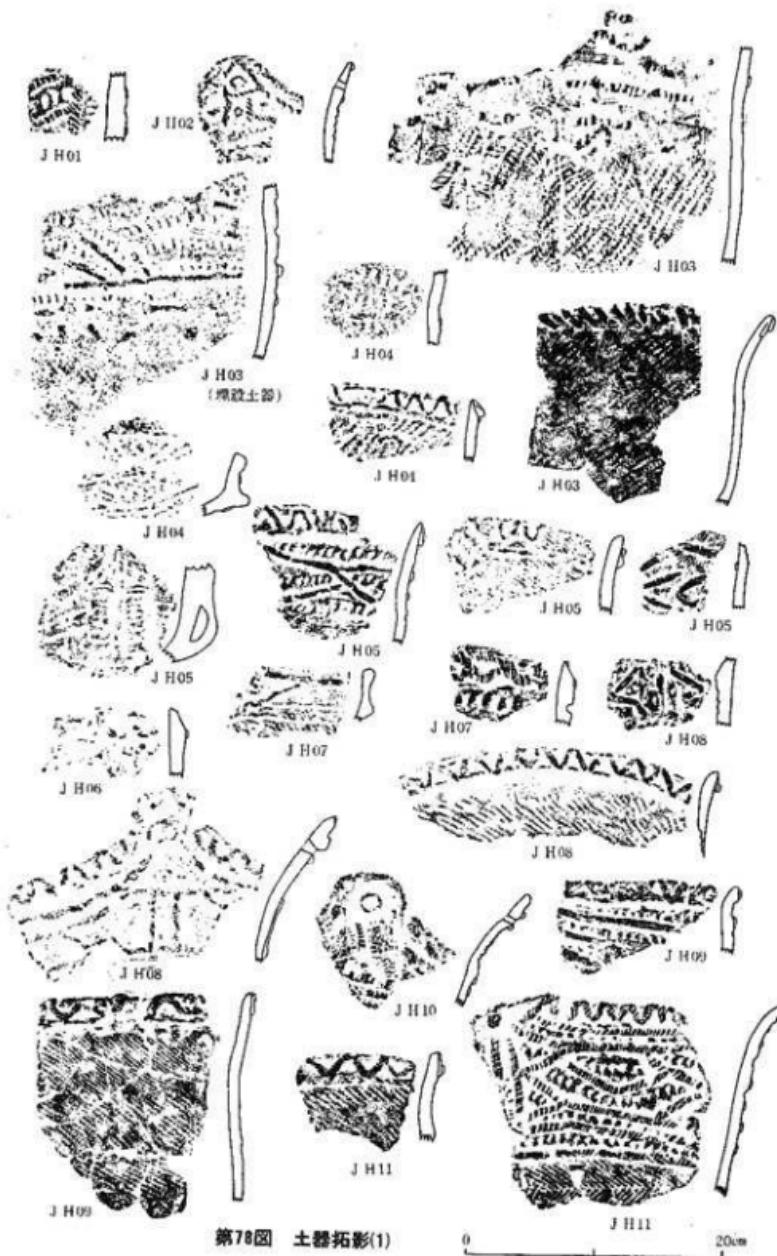


第76図 土製品

0 5m



第77図 土器実測図

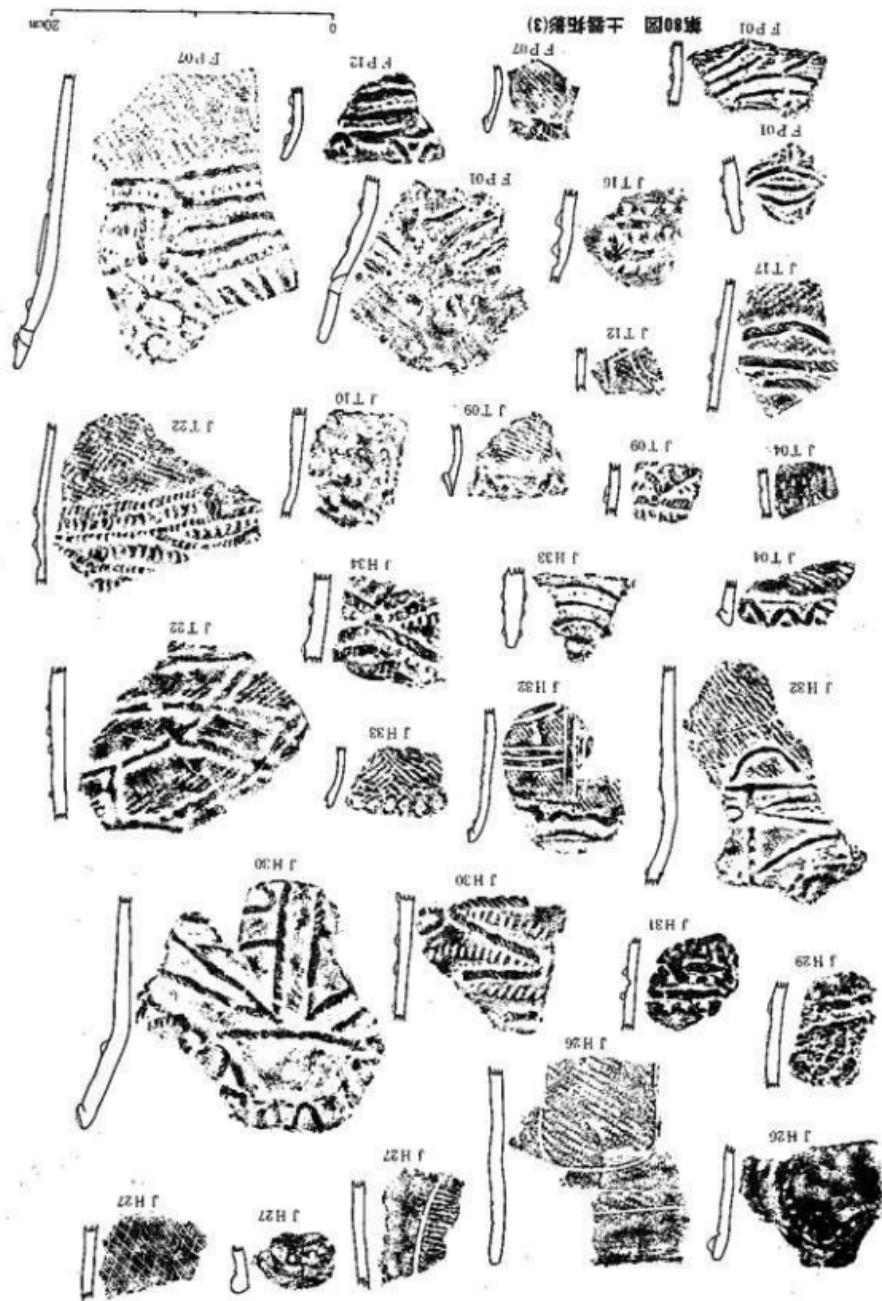


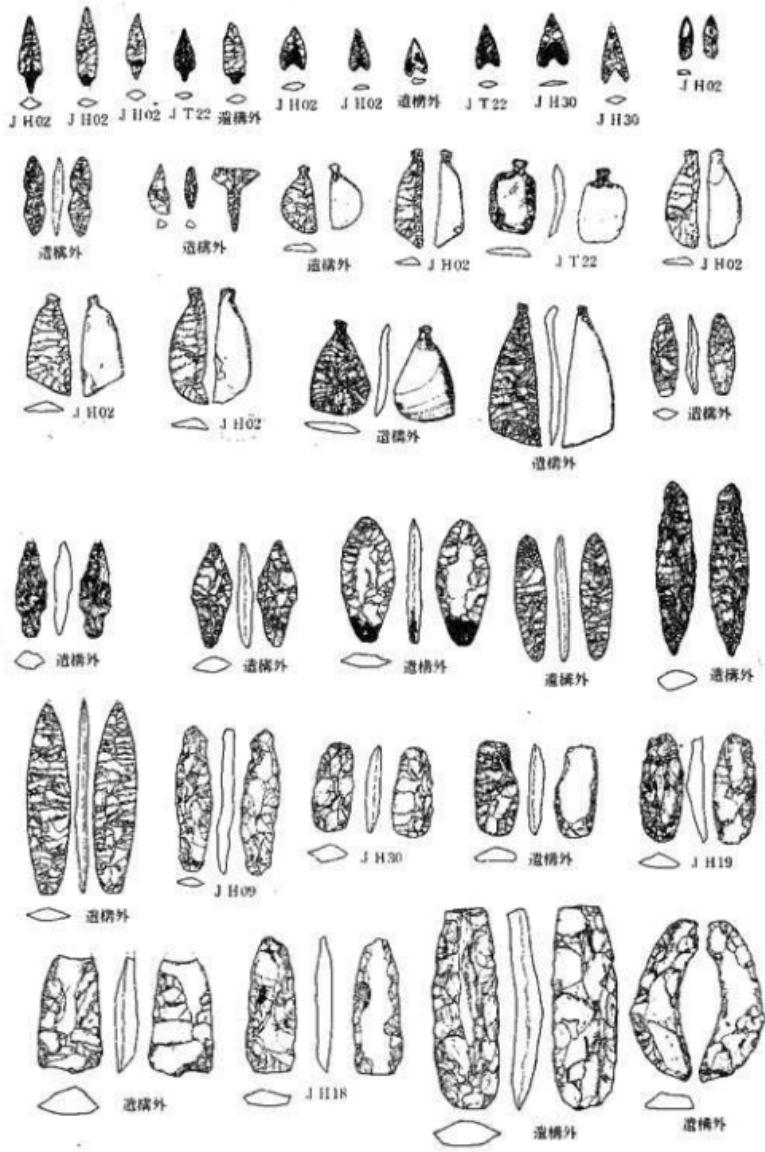
第78図 土器拓影(1)

0 20mm

第79圖 土器拓影(2)



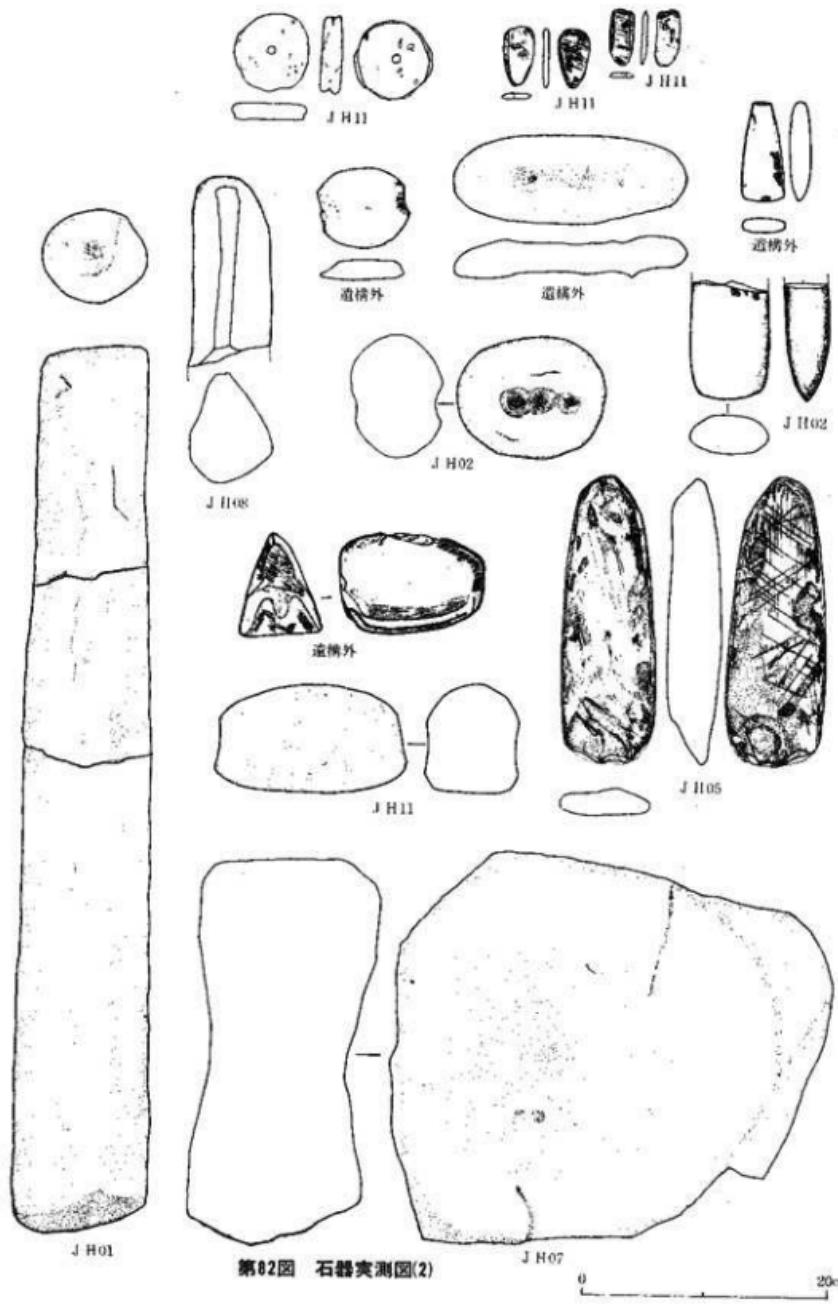




第81図 石器実測図(1)

10

20cm



第82図 石器実測図(2)

④土 器

出土土器はすべて破片で、コンテナ100箱である。そのうち実測可能な資料は10個体、ほとんど中期の土器で、次のように分類できる。

第一群土器（円筒上層式土器）

第一類土器

口頭部文様帶に格子体圧痕文のある土器で、この類は5号住居跡から1点出土している。A1式土器である。

第二類土器

範状工具の刺突による爪形文と、細い粘土縫を器面へ貼付ける文様構成が特徴的である。円筒形容が基本である。12号住居出土の大破片のように、口縁部が大きな弁状を成すものと、22号住居出土の復元土器のように平縁を成すものがある。平縁のものは胸部がややふくらむ。C式である。

第三類土器

6号住居跡、4号竪穴造構出土の復元土器で代表される土器である。前類とは異なり爪形文が消失し、文様は粘土縫による隆帯のみになる。D式である。

第四類土器

沈線によるいわゆる胸骨文の施文された土器である。この類の土器片は非常に少ない。13、33号住居から突起や胸部破片が出土しているのみである。E式である。

第二群土器（大木式土器）

第一類土器

口頭部に隆帯で囲まれた梢円形の文様圈があり、撚糸文の施文の見られるものである。12号住居出土の1例がこれで、文様圈内の隆起線にそって撚糸文がめぐり、中に撚糸による爪

形文がある。また、文様面の下部には途中で「V」形に下垂しながら横位にのび、先端が渦巻状をなす撚糸文が施文されている。7 b式と一部に上層B式の特徴の見られる土器である。

第二類 土 器

浅鉢器形を呈し、口頸部に撚糸や細い粘土紐でもって、渦巻文の施文されている類である。4号住居跡などから少量出土している。8 a式と考えられる。

第三類 土 器

隆起線と沈線による渦巻文が特徴的である。4号竪穴遺構から出土している。8 b式である。

第四類 土 器

口縁部から斜めに下垂する隆起帶と、それにそって刺突列点文を施した類の土器である。器壁は一群の土器に比し薄く、比較的焼成も良い。口頸部はやや外反し、口縁部は波状をなすようである。沈線で画された中に繩文が残り、磨消区画の一角に鱗状の隆起の見られる破片が胴部のものと考えられる。本類はBグループの住居跡埋土とその周辺から主に出土している。大木10式の新しい仲間と考えられる。(後藤、1967)

第三群土器

撚糸文の施文された仲間である。単節の縱の撚糸文のものと、網目様撚糸文に細分できる。

第四群土器

条痕文のある土器である。

第五群土器

沈線によるS字状文の見られるもので、16号住居跡出土のものが代表格である。

県内で第三群の網目様撚糸文土器を出土しているのは、鹿角市大湯黒森山麓の竪穴住居跡などである(奥山1971)。岩手県門前貝塚出土の網目様撚糸文土器は後期初頭に位置づけられており、青森県では後期初頭の大曲一号から出現する。(及川1974、鈴木1974)以

したことから第三群土器は後期初頭のものと考えたい。第四群土器についてははっきりしない。第五群土器も後期初期のものと思われる。この三群の土器は少なく、Bグループ住居跡群の地区から出土している。

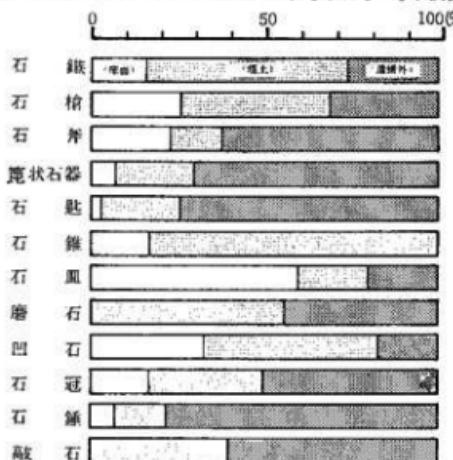
⑤石 器

調査で検出された石器の総数は、515点である。

これら石器の出土地点を遺構内床面、遺構埋土、遺構外に分けて、その割合をみると、遺構床面上12%（63点）、遺構埋土33%（169点）、遺構外55%（283点）である。埋土層中の石器は、住居跡などの遺構が廃棄されたあとで、投げ込まれたか、流れこんだかしたものであろうから、床面上の遺物と一緒に取扱うことはできない。むしろ、遺構外の遺物と同様な取扱いのほうがいいと考えられる。そうすると、石器の88%が遺構外に捨てられたことになる。この現象は、石器の使用場所、保管場所などとも関連するものと考えられる。

たとえば、表1は、各石器の出土場所別割合を表わしたものであるが、大部分の石器が遺構外に捨てられているなかで、石皿は、床面上で出土する場合が多い。7号住居跡では、石皿が浅いピットの中に定置されて出土している。石皿が室内で使用され、保管されていたことが理解できる。

また、大部分の石器はAグループでの出土であり、Bグループ出土の石器は稀少である。表2は、石器の種類別の出土割合を表わしている。500余点の石器が、館下I遺跡で生活した人々が使用したすべての石器とは考えられない。未検出の石器もあるだろうし、移動のさい持つ



第1表 石器の出土場所別割合

ていった石器もあるだろうし、石錐のように持ち歩き、遠くに飛んでいった石器もあったであろうからである。しかし、石器組成の概略は知ることができるであろう。特徴的なことは、石鉋、穹状石器、石匙の多いことと、石錐の多いことである。

つぎに、それぞれの石器について、
①形態、②製作技術の特徴、③石材、
④使用痕（摩耗痕、線状痕、欠損部位、
光沢、付着物）、⑤共伴する土器（遺
構内における共伴）などをまとめてみ
たい。なお、使用痕の観察には双眼実

体顕微鏡(20倍、40倍)を使用した。

石鎌

石鎌は125点出土している。これを形態分類してみた。

a類) 凸基有茎式石鎌、75点(61%)、長さは、2.7~5.2cm、重さ1.7~7.5gであるが、長さ3~5cm、重さ2~4gのものが多い。

b類) 凹基無茎式石鎌、38点(31%)、長さ1.6~3.7cm、重さ0.4~4.9gであるが、長さ2~3cm、重さ1~2gに集中する。

c類) 平基無茎式石鎌、8点(6%)、長さ1.8~3.8cm、重0.4~2.8g。



第2表 石器種類別の出土割合

d類) 「石刀鎌」に類似するので石鎌に分類した。3点(2%)長さ3.0~4.9cm、重さ1~2.6g。

a~c類は、ていねいな二次加工が施され、とりわけc類は精巧である。d類は縦長の側片の先端部を尖らしている。二次加工は背面の周縁に施されている。「石刀鎌」は、主要剥離面に二次加工を施している(芹沢、1960), d類と「石刀鎌」ととの相違点である。



石材は頁岩が105点(8.5%), 鉄石英8点、黒曜石7点、凝灰岩2点、石英2点である。c類は全部鉄石英であり、黒曜石の7点はb類である。

基部にアスファルトの付着した石鎌が39点ある。a類26点、b類13点であり、a、b類のそれぞれの34%である。c、d類にはアスファルトの付着はみられなかった。アスファルトは石鎌と弓柄との接着

第3回 石鎌の形態分類

に使用されたものであろう。a類には、1点だけであったが基部と先端部両方にアスファルトが付着したものがあり、a類が効率のよい石鎌であることが推察される。共伴する土器は、a、b類は円筒上層C、D式、大木10式土器と、c、d類は円筒上層C、D式土器にのみ共伴する。

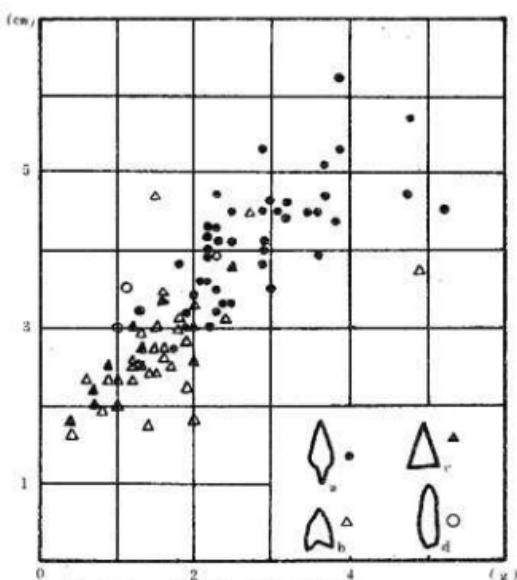
石槍 23点出土、4類に形態分類した。

a類) 尖基式石槍。88点(35%)長さ5.2~13cm、重さ7.5~42.5g。横断面は凸レンズ状を呈する。

b類) 平・円基式石槍。8点(3.5%)、長さ5.6~14.3cm、重さ10~37g。横断面は凸レンズ状を呈する。

c類) 尖基式石槍であるが、a類より幅広である。1点出土。長さ9.7cm、重さ43.5g。横断面は扁平な六角形を呈する。重さ15~17.5g。

d類) 有茎尖頭器。2点出土。長さ7.2~8cm 横断面菱形を呈する。a類、b類には、精巧



第84図 石槍の長さと重量(完形品のみ)

な押圧剝離を両面に施している石器が多い。C類は両面に大剥離を残し、周縁の両面に二次加工が施されている。d類は前者にくらべあらいつくりで、ステップ、フレーキングも用いられている。

石材は頁岩21点、石英2点である。

C類の石槍の基部にはアスファルトが付着している。また、中央部で色調が、わずかに変化している。このアスファルトと色調の変化は着柄に関係あるものだろう。長軸と平行に着柄されていたものと

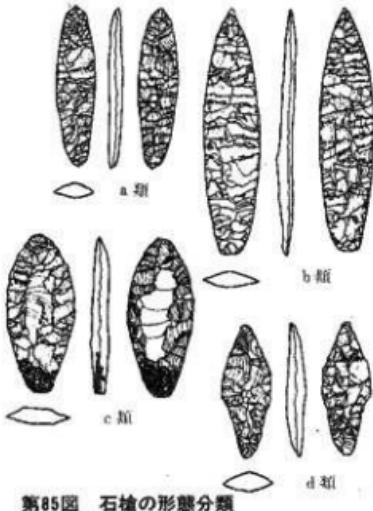
考えられる。

a類は円筒上層C、D式、大木10式土器と共に、c~d類は円筒上層C、D式土器のみと共に伴する。

石斧

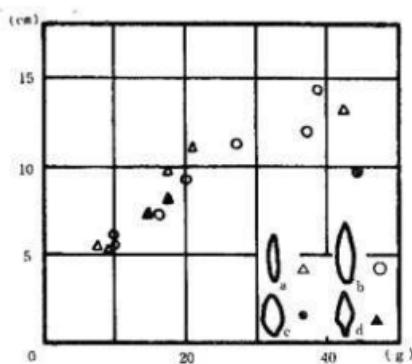
石斧は39点出土。5類に形態分類できる。
a類) 磨製石斧。25点(64%)。分厚い精円形の横断面を呈する。完形品ではなく、脇部中央付近で欠損している。刃縁は円刃をなし、斧の中軸線で左右相称の両刃である。

b類) 崩製石斧。7点(18%)。刃部がもっとも広く、基部が狭くなる。横断面は、扁平な精円形を呈する。中軸線で左右非相称の片刃である。



第85図 石槍の形態分類
る。長さ約10cm、重さ約100g。

c類) 崩製石斧。2点(5%)。大型の石斧で長さ18~19.5cm、最大幅5~6cm、厚さ2~



第86図 石槍の長さと重量(完形品のみ)

3.5 cm、重さ 310～735 g。刃部は丸刃を呈しやや片刃ぎみである。

d類) 打製石斧。2点(5%)。両面加工され鎧状石器に近似するが、大型であり石斧に分類した。刃縁は円刃を呈し、両刃である。横断面は凸レンズ状を呈する。側縁は鋸刃状をなす。長さ 13～14.5 cm、幅約4.5 cm、厚さ約2 cm、重さ 14.2～17.6 g。

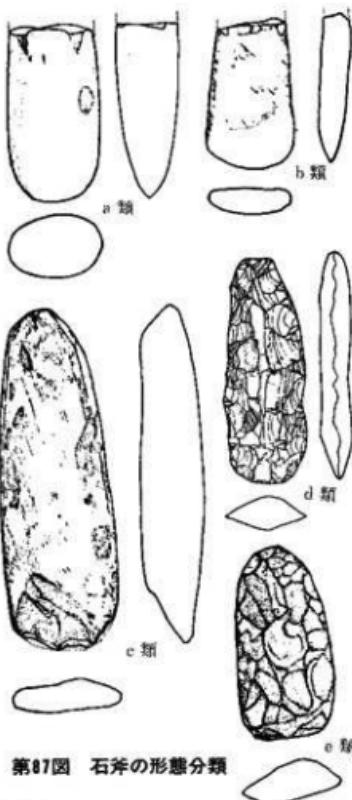
e類) 打製石斧。3点出土。刃縁は円刃をたし、片刃である。横断面は扁平な蒲鉾状である。長さ 1.1～1.4 cm、幅5.5～7 cm、厚さ約2 cm、重さ 1.86～3.25 g。

a・c類は敲製によると思われる。b類のなかには、擦切技法で製作されたと考えられる痕跡を有する石斧が1点あり、b類の製作技法を理解できる資料である。d類は縱長の分厚い剥片の両面をフリーフレーキング、ステップフレーキングで仕上げている。

e類は礫の表皮を1面に残し、地面を粗く打欠き、仕上げている。

石材は泥岩11点、砂岩7点、安山岩6点、玄武岩2点、頁岩2点、変成安山岩2点、玲岩1点、粘板岩1点である。a類は安山岩、b・c類は泥岩、玄武岩、b類は頁岩、e類は砂岩が多く使用されている。

a類のほとんどは柄部で欠損している。これは、使用のさい折れたもので、着柄に関係するものと考えられる。b類の1点に線状の使用痕が観察された。この石斧は、弱凸強凸片刃であるが、両面に刃縁に直交する線状痕が認められた。アックスの使用が推察される(セミヨーノフ・田中訳: 1968)。他の石器については、アックス的使用か、アックス的使用か判断ができるかねた。た



第87図 石斧の形態分類

だ、c類は砂岩で軟かく、樹木を切る、削るなどの機能をはたすことはできないだろう。他の用途を考えねばならない。

石斧の大部分が、円筒上層C・D式に共伴する。

箋状石器

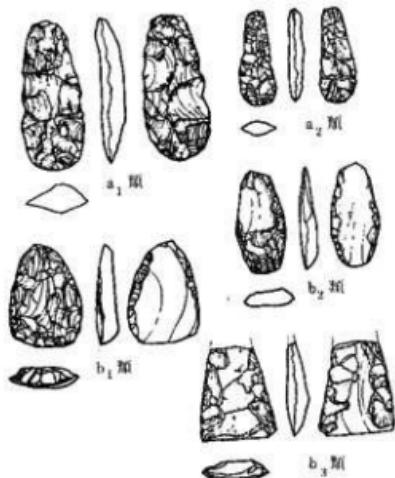
90点出土した。5類に形態分類してみた。

a₁類) 40点(4.5%) 両面加工で、横断面が凸レンズ形を呈する。刃縁は丸刀をなし、両刃である。幅は基部に向ってやや狭くなる。長さ6~10cm、最大幅2.5cm~3.5cm、重さ2.5~5.0g。

a₂類) 3点(3%)。a₁類より小型である。5.3~5.7cm、最大幅約2cm、重さ2.0~1.7g。

b₁類) 41点(4.6%)。すんぐりした形をなし、刃部が広く、基部は狭くなる。横断面は溝鉢状を呈する。長さ5~6cm、最大幅4cm、重さ2.0~3.0gのものが一般的である。

b₂類) 2点。b₁類にくらべると、すんぐりしたところはなく、基部と刃部の幅がほぼ同じである。重さはa₁類とほぼ似ている。幅は約3cm。



第88図 箋状石器の形態分類

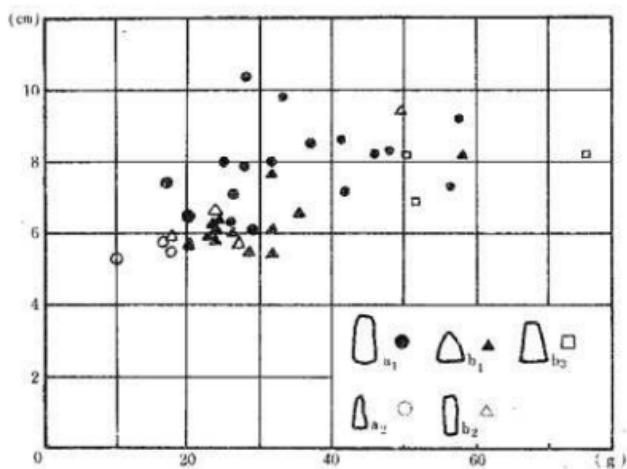
b₃類) 4点出土。平面形は台形を呈し、刃縁は直刀をなし、片刃を呈する。b₁、b₂類よりやや大型である。

a₁、a₂類は分厚い縦長の剥片の両面に、フリーフレーキング、ステップフレーキングによる二次加工を施して仕上げている。基部に打面を残すものもある。側縁は鍔刀状を呈する。b₁~b₃は横長の剥片を使用し、背面は全面加工、主要剥離面は両側縁にのみ加工が施されている。b₃の刃部は一次加工のさいの鋭い縁刃である。

石材は、84点(9.3%)が頁岩、泥岩が2点、石英が4点である。

b₁、b₃類の7点には使用痕(光沢、線状痕)が認められた。使用痕は主要剥離面の刃部にのみ認められる。光沢は刃縁から1cmほどに広がり、明るく、輝きがある。また、光沢面には、刃縁に直交する線状痕が認められる。また、縁には刃こぼれが認められるものもある。b₁類には脇部で欠損したものが17点もあり、すべてが刃縁に平行に折れている。光沢(キーリー、1978)、使用痕(セミヨーノフ、田中訳、1968)、欠損状況などから考えて、b₁~b₃は着柄して、アッズ的に使用したものと推察される。なお、a₁類の基部、または

頭部にアスファルトの付着したものが3点ある。着柄の可能性をうかがわせる。先端部の摩滅したものが1点ある。a₁、a₂類が着柄して使用したものとすれば、土掘り具を想定したいのであるが、積極的な根拠はない。



第89図 箇状石器の長さと重量(完形品のみ)

a₁、b₁類は、円筒上層C、D式と大木10式土器と共に伴し、a₂、b₂、b₃は円筒上層C、D式土器と共に伴する。

石匙

90点出土、6類に分類した。

a₁類) 線形の石匙。

81点(89%)。先端部が幅広くなり、平面形は切出し型ナ

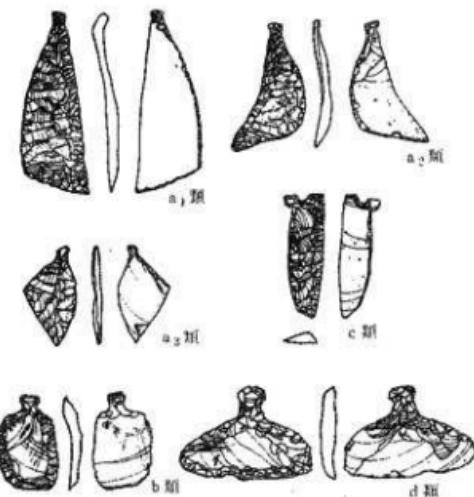
イフ状を呈する。長さ5~10cm、重さ9~20g。

a₂類) 1点出土。先端部がa₁類とは逆方向に作出されたものである。

a₃類) 体部が短かく、つまみ部に対する彫縁の長いもの。小型であり、長さ5~6cm、重さ6g前後のもの。

b類) 4点出土。長方形の体部につまみ部を中軸線上に作出したもの。長さ約5cm、重さ約9g。

c類) 1点出土。体部はa₁類に類似するが、つまみ部が体部と直角に作出されている。



第90図 石匙の形態分類

d類) 1点出土。横形を呈し、刃部に直交するように、つまみ部を作出している。

a₁~a₃・c類は綫長の剥片を使用し、背面に精巧な押圧剥離を施している。また、主

要剥離面の一個縁から先端部にかけて細加工を施している。この細加工を施した側縁に摩耗痕が認められ、刃部として使用したものと理解される。b類は縦長剝片の背面周縁に二次加工が施されている。d類は横長の剝片を使用している。

石材は100%頁岩である。

a₁, a₃, c類は、右人差指の第一関節を鏡にあてると使用しやすい。a₂類は左ききの人が使用する場合有効である。

a₁～d類は円筒上層C, D式土器と、a₁類の数点が大木10式土器と共に伴した。

石錐

6点出土した。2類に形態分類できる。

a類) つまみ部と錐部からなるもの。5点出土。錐部の横断面は菱形を呈する。

b類) 錐部のみのもの、1点出土。横断面は菱形を呈する。

石材はいずれも頁岩。使用痕は観察できなかった。

すべて、円筒上層C, D式土器と共に伴した。

石皿

10点出土した。6類に形態分類できた。

a₁類) 凹部の平面形が円形を呈する。6点出土。6点のうち、1点は両面使用である。

a₂類) 凹部の平面形が横円形を呈する。1点出土。

b類) 凹部の平面形がU字状を呈する。1点出土。

c類) 周縁に縁を有し、裏面に4個の凸状の脚を有する。1点出土。

d類) 周縁に縁を有し、裏面に板状の脚を有する。1点出土。

石材は安山岩6点、凝灰岩4点。

a₁～b類は円筒上層C, D式土器と、c, d類は大木10式土器と共に伴する。



凹石
12個出土。ほかに石錐と兼用か転用かされたものもある。凹部の断面が円錐形をなすものと、不規則をなすものとがある。また両面に凹部のあるもの、片面のみのもの、凹部が1個のもの数個のものなどがある。

石材は凝灰岩7個、安山岩5個、いずれも片手で持てるくらいの重さの河原石を使用している。凹部が円錐形を呈するものは、細い木か骨のパンチを上から押圧しながら回転（非連続往復回転であろう）させ使用したものであろう。凹部の不規則なものは、細い木か骨のパンチを上から叩いたためできたものであろう。

円筒上層C, D式土器とも大木10式土器とも共伴している。

石錘

97個出土している。

河原石の長軸の両端を打ち欠き、切目部を作出している。

漁網に使用する石器と考えられている（渡辺、1973）。

遺跡の下を米代川が流れているので、漁業がさかんに行なわれていたものと考えられる。

40g～1000g。500g前後のものが多い。

石冠

6点出土している。

a類) 4点出土。体部に凹部が一周する。底面は摩滅している。北海道式石冠（大場、1961）と称されている。石材は花崗岩。700～970g。

b類) 2点出土。縦断面三角形を呈する。一側面には凹部がある。底面は摩滅している。石材は凝灰岩。重さ375～422gで片手でもつには手ごろである。a類の使用面は短軸方向に傾斜する。

石皿とセットにして使用したものでないだろうか。

磨石

安山岩の河原石の一面を摩面に使用しているものが大部分である。

敲石

棒状の河原石の両端を使用しているものが多い。石材は安山岩。

石棒

安山岩。流紋岩の石材を使用。一端の表面に凹部を作っている。いずれも3～数分割されている。加熱を受けたものもある。破片が住居跡の床面にころがっていたり、フラスコ状ピットの中に投げこまれたり、造構外にころがっていたり、奇異な出土状態を示す。

⑥ 土・石製品

土偶（第76図）

1・3は13号住居跡出土で、板状を呈する。円筒土器に伴うものである。1は頭部に2孔があり爪形の刺突文が見られる。2は18号住居跡出土で、3はその傍からの出土である。両者とも刺突文があり、2にはボタン状の突起と背面に二本の隆線がある。5、6とも18号住居跡のあるBグループ地区で出土したものである。

スタンプ状土製品（第76図）

24号住居跡出土で、きのこ状を呈する。傘状の表面はすべすべしている。

滑車形耳飾（第81図）

11号住居跡出土品。石材は茶褐色を呈する火山礫凝灰岩で、最大径5.4cm、円周上に凹の見られる不整円で、中央に径5mmの一孔がある。

垂飾品（第81図）

耳飾と同じ11号住居跡出土品。石材は粘板岩。

IV 小 結

1 壓穴住居跡

館下 I 遺跡から発見された住居跡は総数 34 棟である。うち 1 ~ 14, 29 ~ 34 号の 20 棟は段丘の西部に、残りの 15 ~ 28 号の 14 棟は約 50 m 北東の段丘中央部北東縁ぞいに存在する。前者を A グループ、後者を B グループと呼ぶ。

〔A グループの住居跡〕

このグループの住居には次のような共通点が認められる。

- ① 平面形は楕円形が多い。
- ② 長軸 6 m ~ 10 m の大型のものが過半を占める。
- ③ 主柱穴は住居内にあって、中軸線に並列相対して 4, 6, 8 本存在する。
- ④ がはほとんど地床炉である。
- ⑤ 大型の住居には特殊ピットを伴うものが多い。
- ⑥ 住居の長軸は N-S を指すものと、E-W を指すものとがある。
- ⑦ 主柱穴の内側の床面がほかに比べて堅い。

大型の住居には炉が 2 基あるものもあり、いずれも、中軸線の附近にある。特殊ピットは径 50 ~ 60 cm、深さも同じ位の大きさで、すり鉢状に落ちこんでいる。そして掘りあげたロームでもって幅、高さとも 10 cm 前後のへりをまわしている。が使用の際に出来る木炭や灰の捨場とも言われているが、そのような埋土の堆積状態ではなかった。性格は不明である。

A グループの住居は間隔を置いて構築され切り合いかない。床面や炉から出土している土器から 1, 2 号住居が大木 7 b 式もしくは円筒上層 B 式期 1, 2, 3, 5, 11 号住居が円筒上層 C 式期、4 号住居は炉の埋設土器から D 式期と考えられる。ただ、4 号住居の埋土からか埋設 D 式土器より古い C 式土器が出土していること、このグループの住居の埋土から C 式 D 式土器が一括出土することが多い事実から、C 式 D 式土器を同時に使用した可能性も考えられる。集落跡の調査が進み、廃棄された住居跡に土器を残置、投棄する行為のパターンが論考されている(小林 1974)。A グループのパターンは C 1 に近いと思われる。以上のことなどから、A グループの住居は何期か考えられるが、現段階では確言できない。

〔B グループの住居〕

円筒上層 C 式期の 19, 25 号住居を除いた残り 13 棟は中期末大木 10 式期のものと考え

られる。

- ① 住居の平面形は円もしくは不整円形が多い。
- ② 床面のロームへの掘り込みが浅い。
- ③ 主柱穴ははっきりしないものが多いため、検出ピットの分布から壁に沿うものと考えられる。
- ④ 炉は石開炉で、住居の中心から北東にずれているものが多い。

B グループの住居には以上の傾向が認められた。

石開炉の構築は

- ① 最初に浅く炉の大きさにロームを掘り込む。
- ② 次に石の大きさによって、並べる石の下を少し掘りこむ。(地上に出ている石のレベルが同じ位になるように)
- ③ 石を並べる。

の手順をとる。16号住居の炉の石は抜き取られてなかった。廃棄の際に転用されたものと考えられる。

B グループの住居は、19・25号住居の二時期、炉の形態と住居の切り合い関係から、小型の23号住居と他の円形の住居との二時期、計四時期が考えられる。

さて、今まで述べてきた竪穴住居より小型のものに竪穴造構がある。JT01のようにAグループの大型住居の傍に位置し、径は2m前後、周囲に4・5本の柱穴を持ち、床の中央に焼土の認められる造構である。居住するにはせますぎるので竪穴造構として区分したが、住居の可能性のあることをつけ加えたい。

2 フラスコ状ピットについて

本遺跡で検出されたフラスコ状ピットは15基である。

このうち2基は住居跡に付設されたものであり、残り13基は単独で構築されたものである。

まず、4号フラスコ状ピットは、28号住居跡の北隅に付設されたものである。5号フラスコ状ピットは、23号住居跡の北隅に付設されている。県内で住居跡内にフラスコ状ピットが付設されている例に秋田市下堀(富樫ほか、1976)、秋田市鹿野戸(伊藤ほか、1976)、男鹿市大畠台(磯村ほか、1979)、八竜町葦刈沢(鍋倉ほか、1974)遺跡がある。

1・2・4~15号フラスコ状ピットは単独で構築され、遺跡の西(舌状台地の先端部)に群集して検出された。これらフラスコ状ピットの群集地は住居跡群(Aグループ)の外側に位置するものが多い。

3号フラスコ状ビットも単独で構築されたものであるが、Bグループの住居跡群の外側にあり、北側を調査できず断言はできないが、群をなしていた可能性がある。琴丘町宝冠前遺跡（伊藤ほか、1978）では40余基のフラスコ状ビット群が検出された。大畠台遺跡（磯村ほか1977年調査）では10余基のフラスコ状ビットが検出されている。

単独に構築されたフラスコ状ビットには上屋構築のためと考えられる柱穴がめぐるものがある。1, 2, 3, 12, 13号フラスコ状ビットがそれである。またフラスコ状ビットの口縁部に蓋をするためと考えられる施設をもつものがある。これは口縁部が広がっているフラスコ状ビットを指す。6, 7, 9, 11号フラスコ状ビットがそれである。柱穴のめぐる検出例は県内では、八竜町蓋刈沢（前掲書）、秋田市鹿野戸（前掲書）、山本町古館堤頭遺跡（伊藤ほか、1977），などがある。

蓋をするためと考えられる施設のある発掘例は、八竜町蓋刈沢遺跡（前掲書）で検出されている。

底面にビットを有するフラスコ状ビットが4例ある。8・11号フラスコ状ビットは、底面のはば中央に浅い柱穴状のビットを有する。9号フラスコ状ビットは底面西側に、さらにフラスコ状ビットが接続し、二重フラスコ状ビットになっている。15号フラスコ状ビット底面の東側には橈円形の深いビットがある。

フラスコ状ビットの用途については、おとし穴、貯蔵穴、冬期のねぐら、祭祀施設、土塙墓などの諸説がある。

本遺跡のフラスコ状ビットは、前述の通り、住居跡に付設されたり、上屋構築のためと考えられる柱穴がめぐったり、蓋をするためのものと考えられる施設があつたりする。

さらに遺物の出土状態をみると、人骨が出土したり、石組、その他の祭祀を考えさせたりする遺物が出土していない。貯蔵穴と考えることがもっとも妥当のようである。夏にフラスコ状ビットの気温と湿度を観測してみた。2号フラスコ状ビットでは、外気の温湿度が 3.8°C , 45%のとき、内部は 1.8°C , 94%であった。9号フラスコ状ビットでは、外気の温湿度が 2.6°C , 60%のとき上段の内部では 1.9°C , 90%であり、下段では 1.5°C , 90%であった。古館堤頭遺跡では、フラスコ状ビットの上屋を復元した。冬期間の温湿度に微妙に反応し、氷点下を示すこともある。しかし、口縁部に蓋をすると、外気に影響されることなく、内部は温度 2°C 前後、湿度約80%を保つことが併明した。このデータは、植物質性の食料を越冬させるのに適当な温湿度である（藤本、1974）。本遺跡の1号フラスコ状ビットでは、炭化クルミが出土している。

増田町梨ノ木塚遺跡では、フラスコ状ビットの床面から多量のクリが出土している（嵐山、1978）。

V む す び

館下Ⅰ遺跡の発掘調査は、遺跡を広範囲にわたって調査した県内でも1・2を争う大規模な発掘調査であった。その結果、後期Ⅲ石器時代と縄文時代中後期の遺跡であることが判明した。特に、縄文時代中期中葉の集落は段丘上の西寄りに、末葉の集落は北東縁寄りに居住地を変えて形成され、その住居の平面形も楕円形と円形、炉も地床炉と石圓がという明瞭な違いのある集落のあり方を明らかにした点で大きな意義があったと考える。

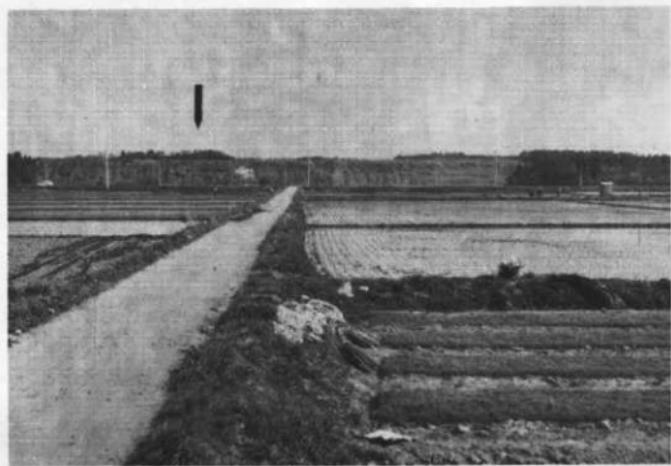
参考及び引用文献 (順不同)

1. 秋田県教育委員会 1977 「新秋田空港周辺遺跡分布調査報告書」
2. 宮城県教育委員会 1969 「宮城県遠田郡涌谷町長根貝塚調査概報」
3. 十勝内遺跡調査団 1969 「青森県弘前市十勝内縄文式遺跡調査予報 十勝内」
4. 杉原莊介 1956 「日本考古学講座・縄文時代」 河出書房
5. みちのく考古学研究会編
　　遮光器 2号 1969
　　同 8号 1974
6. 秋田県教育委員会 1978 「大内坂II遺跡発掘調査報告書」
7. 宮城県教育委員会 1976 「宮城県文化財発掘調査略報」
8. 芝内古文化研究会 1955 「山形県飽海郡吹浦遺跡調査報告」
9. 北奥古代文化研究会 1977 「北日本の石積石垣について」
10. 新地町教育委員会 1978 「三貴地」
11. 秋田県教育委員会 1978 「中台遺跡発掘調査報告書」
12. 大和久義平 1960 「円筒上層式の細分」
秋田考古学第16号
13. 秋田県文化財保護協会 1957 「調査研究報告書」
14. 宮城県教育委員会 1967 「西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報」
15. 岩手県教育委員会 1977 「埋蔵文化財発掘調査略報」
16. 楠本政助 1973 「仙台湾における先史狩漁文化」
17. 江坂輝弥 1957 「青森県蟹沢遺跡調査報告」 石器時代第5号
18. 宮城県教育委員会 1975 「宮城県文化財発掘調査略報 昭和48・49年度分」
19. 杉原莊介編
　　「日本の考古学 第1巻 先土器時代」 河出書房
20. 鎌木義昌編
　　「日本の考古学 第2巻 縄文時代」 河出書房
21. 十和田町教育委員会 1971 「黒森山麓縄文期竪穴群」
22. 跡間町文化財保護委員会 1964 「紫雲出」
23. (財) 岩手県埋蔵文化財センター 1977 「郡南村 湯沢遺跡」
24. 村越潔 1968 「岩木山麓古代遺跡発掘報告書」
25. 上小阿仁村教育委員会 1978 「上小阿仁村 不動羅遺跡概要」
26. 知内歴史研究会 1975 「森越」
27. 岩手県陸前高田市教育委員会 1954 「門前貝塚」
28. 宮城県教育委員会 1973 「菅生田遺跡調査概報」

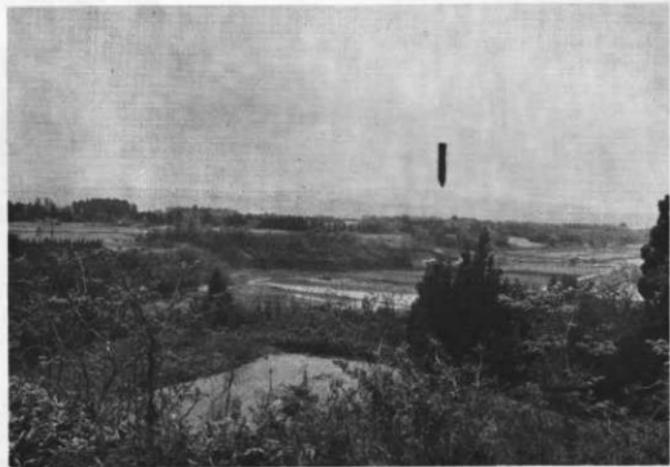
29. 宮城県教育委員会 1978 「北沢遺跡発掘調査概報」
30. 村越潔 1974 「円筒土器文化」 雄山閣
31. 青森県平賀町教育委員会 1974 「青森県平賀町府竹地区 埋蔵文化財発掘調査報告書」
32. 協和町教育委員会 1977 「米ヶ森遺跡発掘調査報告書」
33. 藤森栄一 1963 「縄文中期における石匙の機能的変化について」 考古学雑誌第49巻第3号
34. 青森県教育委員会 1977 「三内沢部遺跡発掘調査報告書」
35. 江坂輝弥編 1970 「石神遺跡」 ニューエンス社。
36. 麻生優 加藤晋平他 1975 「日本の旧石器文化 1. 総論編」 雄山閣
37. 麻生優 加藤晋平他, 1976 「日本の旧石器文化, 5 旧石器文化の研究法」 雄山閣
38. 児玉幸多他 1979 「図説 日本文化の歴史 1. 先史、原史」 小学館
39. 草丘町教育委員会 1978 「宝毫前遺跡緊急発掘調査報告書」
40. 山本町教育委員会 1977 「古館提頃遺跡発掘調査報告書」
41. 秋田市教育委員会 1976 「小阿地、下堤遺跡、坂ノ上遺跡発掘調査報告書」
42. 山形県教育委員会 1978 「の湯遺跡、村中遺跡、古都B遺跡、助川遺跡、上台遺跡調査報告書」
43. 大場利男 1961 「北海道式石冠の用途と意義」 考古学雑誌第46巻第4号
44. 青森県教育委員会 1975 「泉山遺跡発掘調査報告書」
45. 青森県教育委員会 1977 「熊沢遺跡」
46. 青森県教育委員会 1974 「中の平遺跡発掘調査報告書」
47. 福島県いわき市教育委員会磐城出張所 1968 「小名浜」
48. 加曾利貝塚友の会 千葉市加曾利貝塚博物館 1975 「縄文土器のつくり方、第3集」
49. L. H. キーリー 「フリント製石器はどう使われたか」 1978 サイエンス日本経済新聞社。
50. 八竜町教育委員会、鍋倉勝夫 1974 「荒刈沢貝塚、第3 第4次概報」
51. 秋田県教育委員会 1976 「新秋田空港周辺遺跡鹿野戸遺跡、石坂上遺跡発掘調査報告書」
52. 藤本順治 1974 「越冬野菜の貯蔵法」 農業秋田12号
53. 渡辺誠 1975 「縄文時代の植物食」 雄山閣
54. 佐原真 1977 「石斧論」 松崎寿和先生退官記念事業会編 「考古学論集」
55. 工藤竹久 1977 「北日本の石槍、石鉄について」 北奥古代文化研究会編、北奥古代文化第9号
56. 小林達雄 1974 「縄文世界における土器の廢棄について」 国史学 93号
57. 宮城県南方町 1975 「宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘報告」
58. S. A. セミヨーノフ(田中琢抄訳) 1968 「石器の用途と使用痕」 考古学研究56、第14巻、第4号
59. 水野正好 1969 「縄文時代集落復元への基礎的操作」 古代文化21巻3・4号
60. 水野正好 1974 「集落」 考古学ジャーナル 100号
61. 鈴木克彦 1976 「東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年的考察」 北奥古代文化第8号



館下遺跡周辺の航空写真



遺跡遠景（南から）



遺跡遠景（北西から）



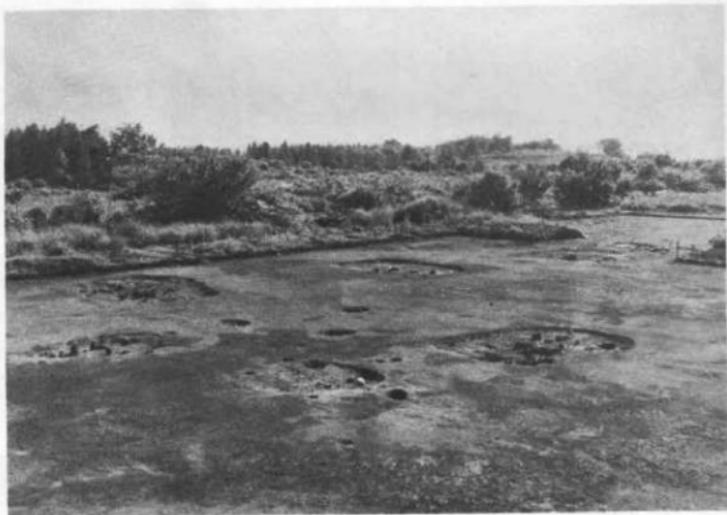
発掘調査前のようにす



発掘風景



A グループ 北西部の住居跡群



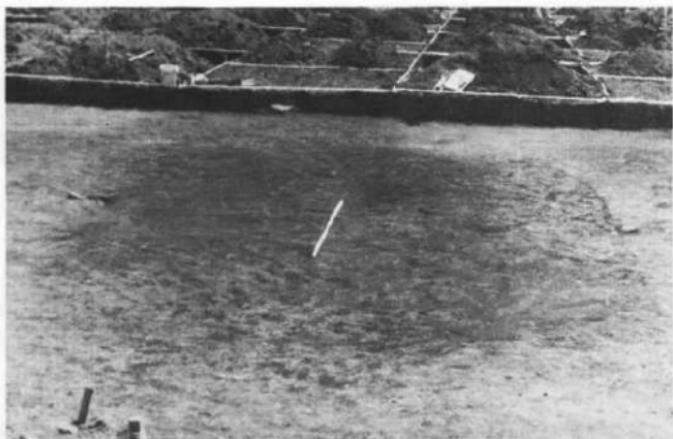
A グループ南西部の住居跡群



A グループ西隅の住居跡とフラスコ状ピット群



B グループの住居跡群



1号住居跡の確認



1号住居跡



4号住居跡



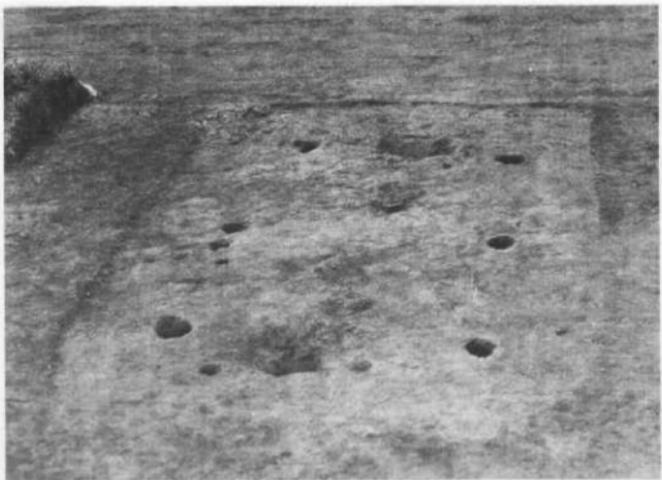
5号住居跡



6号住居跡



7号住居跡



12号住居跡



13号住居跡



30号住居跡



31号住居跡



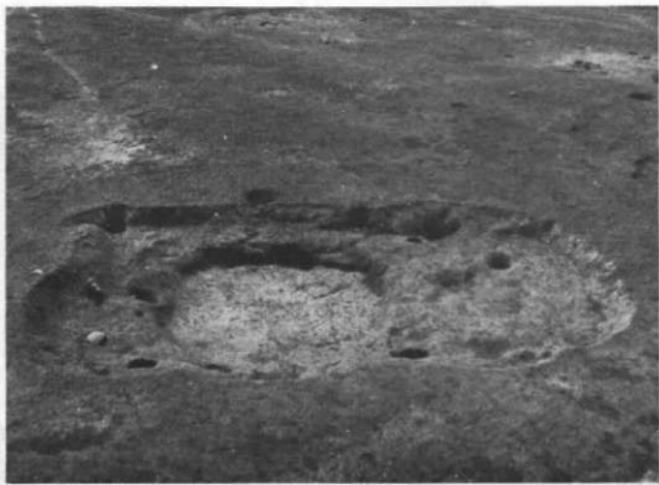
34号住居跡と13・14号フラスコ状ピット



15号住居跡と溝状土塹



18号住居跡



19号・25号住居跡



20号住居跡



21号・23号住居跡と5号フラスコ状ピット



22号住居跡



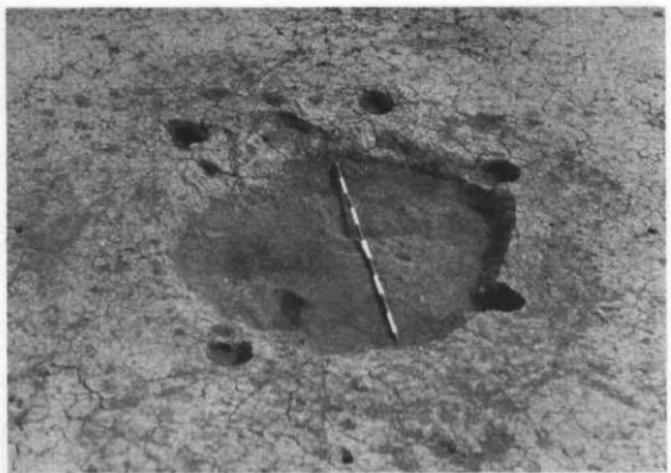
24号住居跡



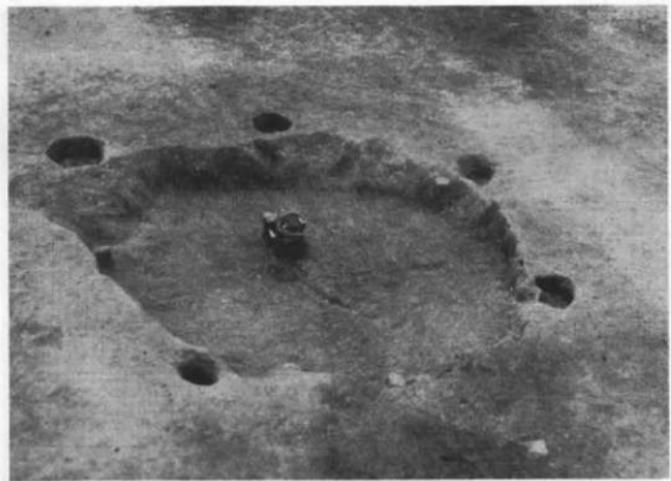
26号・27号住居跡



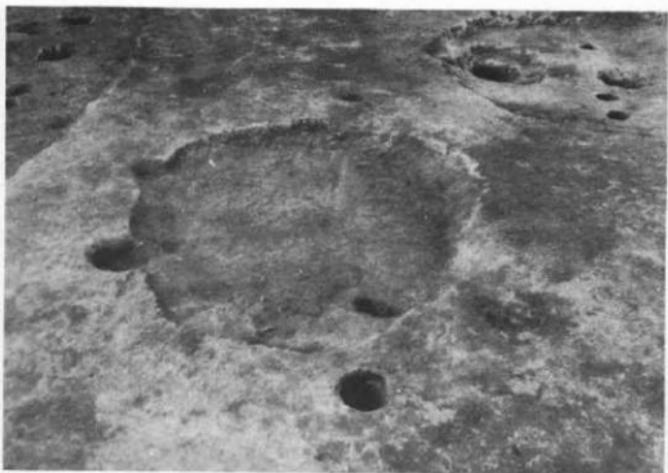
28号住居跡と4号フラスコ状ピット



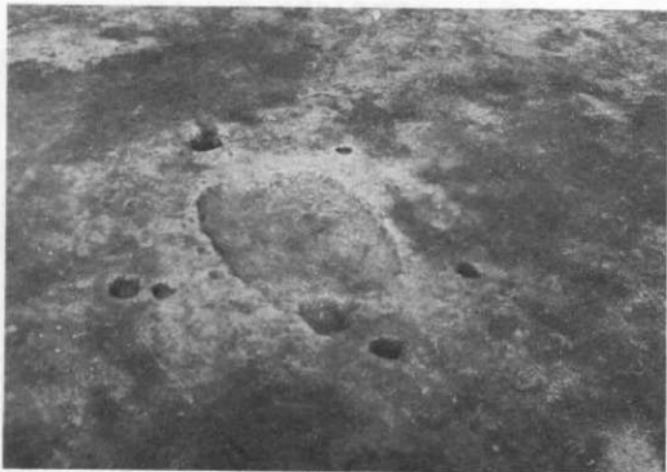
1号竪穴造構



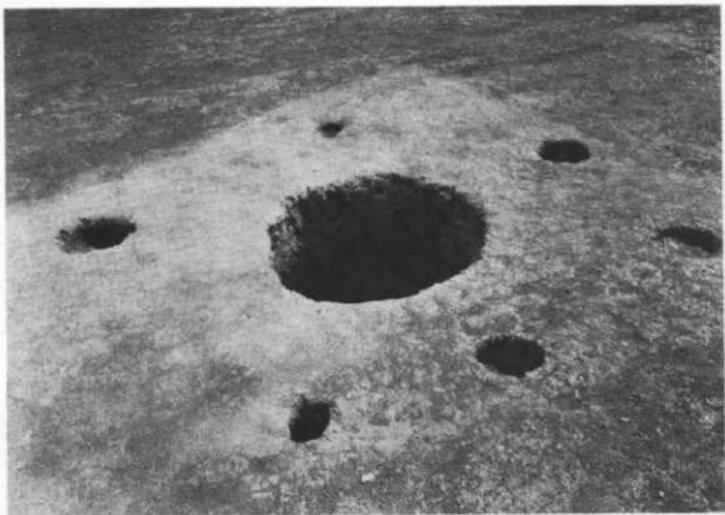
2号竪穴造構



4号竖穴遗構



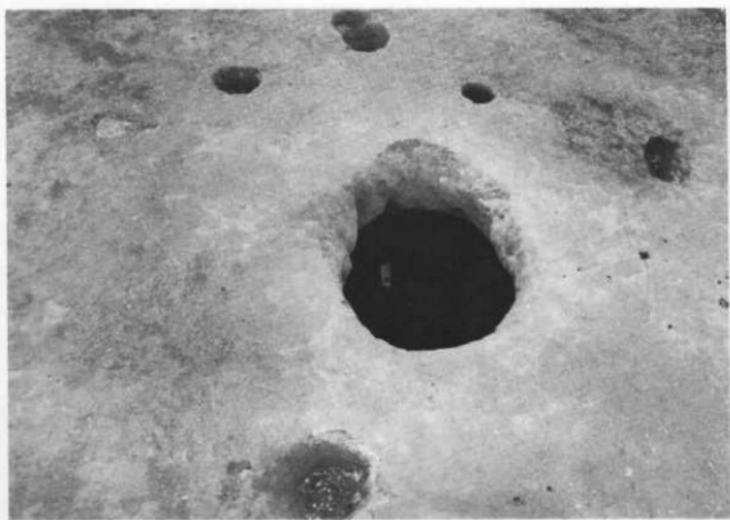
10号竖穴遗構



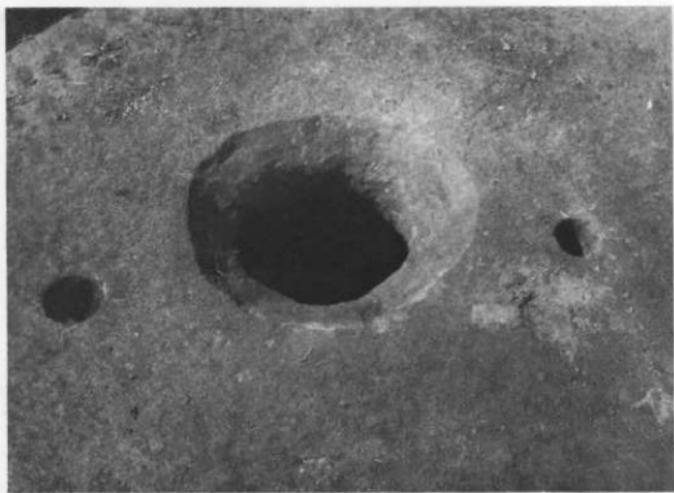
1号フラスコ状ビット



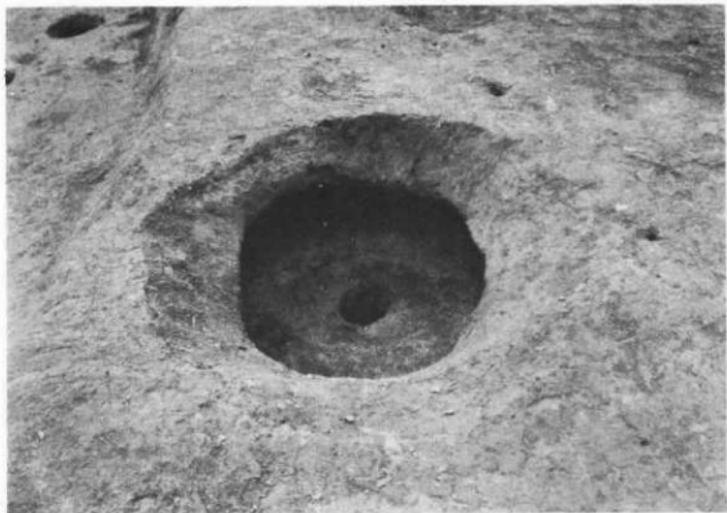
22号竪穴造構



9号フラスコ状ビット(二重構造のもの)



7号フラスコ状ビット



11号 フラスコ状ビット



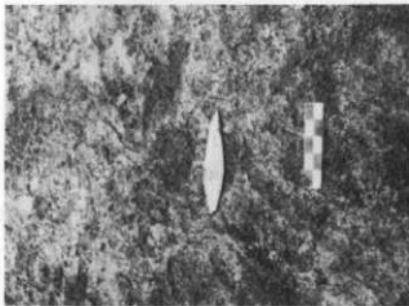
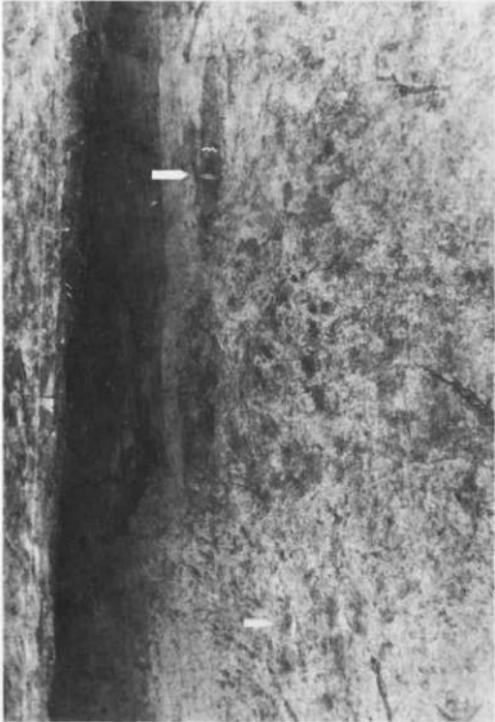
12号 フラスコ状ビット



13号フラスコ状ピット



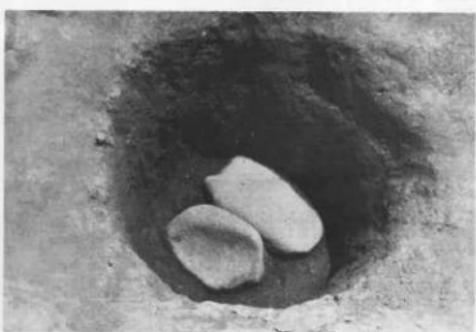
13号フラスコ状ピット土器出土の状態



ナイフ形石器 出土状態



ピット内の石皿
(7号住居跡)



特殊ピット内の石皿
(5号住居跡)



台石と剥片 (6号住居跡)

埋甕

(3号住居跡)



土器出土状態

(12号住居跡)





1号住居跡の石棒



耳飾



石棒



石耜



石椎



打制石斧



三日月状石器



箕状石器



凹石



石冠



石錘

石器の出土状態



屋外石圓炉



屋外石圓炉



屋外石圓炉



28号住居跡の石圓炉



18号住居跡の石圓炉



21号住居跡の石圓炉



23号住居跡の石圓炉

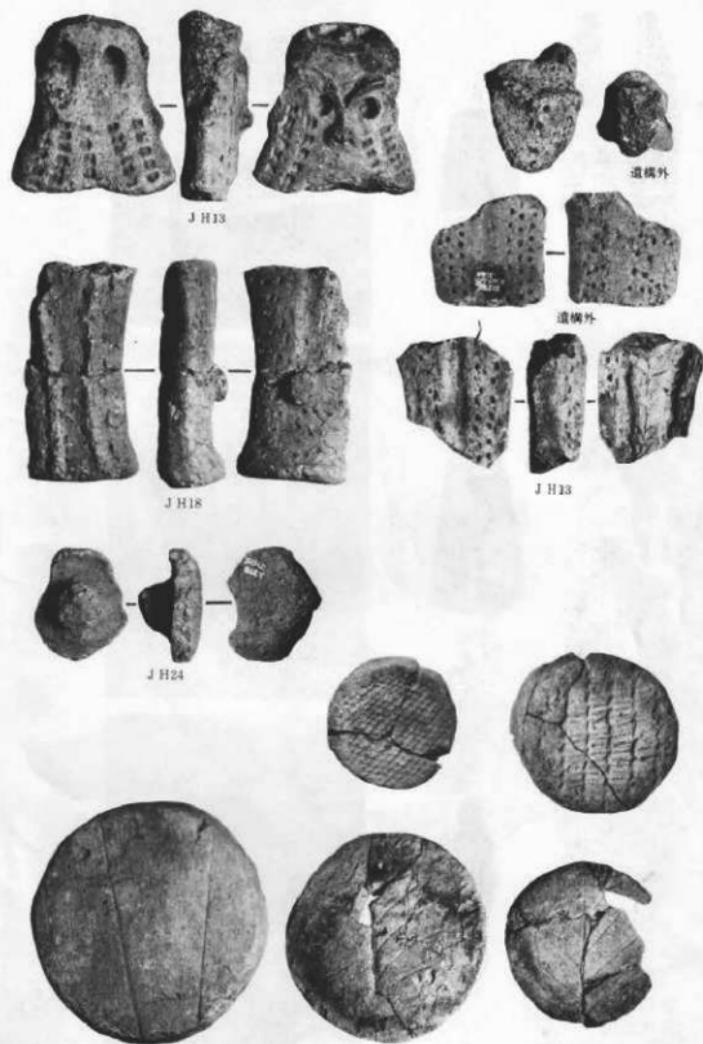


17号住居跡の石圓炉

石圓炉



ナイフ形石器・垂飾品・耳飾・土器

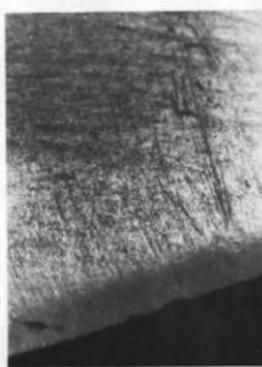


土偶・スタンプ状土製品・土器底部

光沢と線状痕



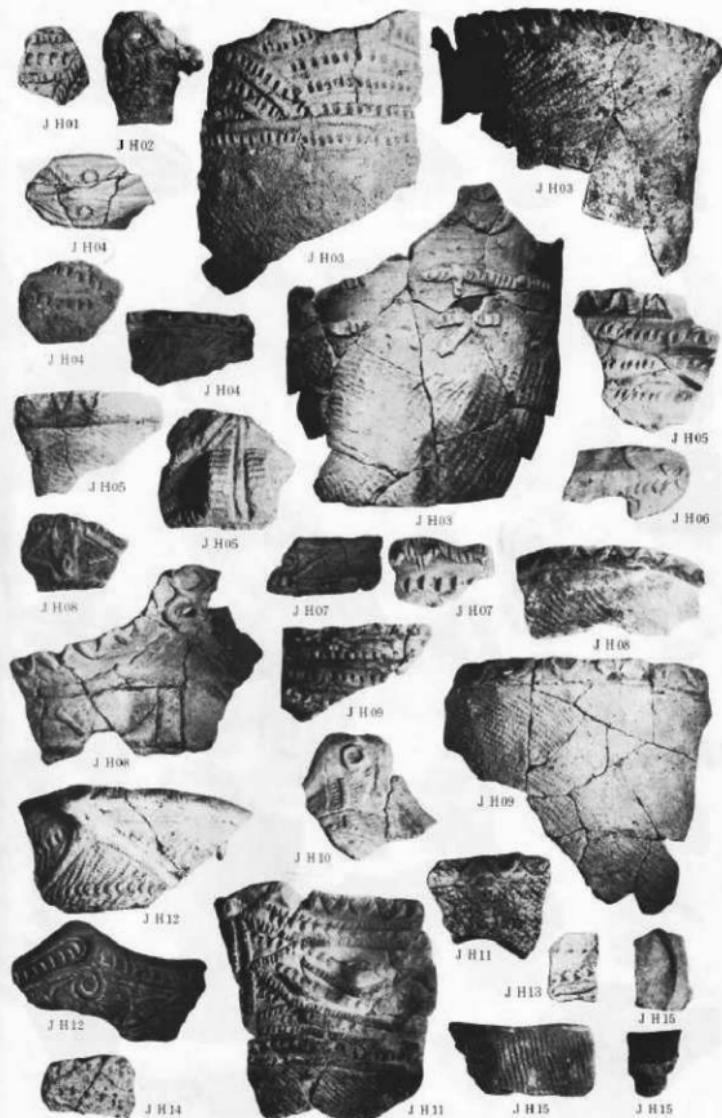
線状痕



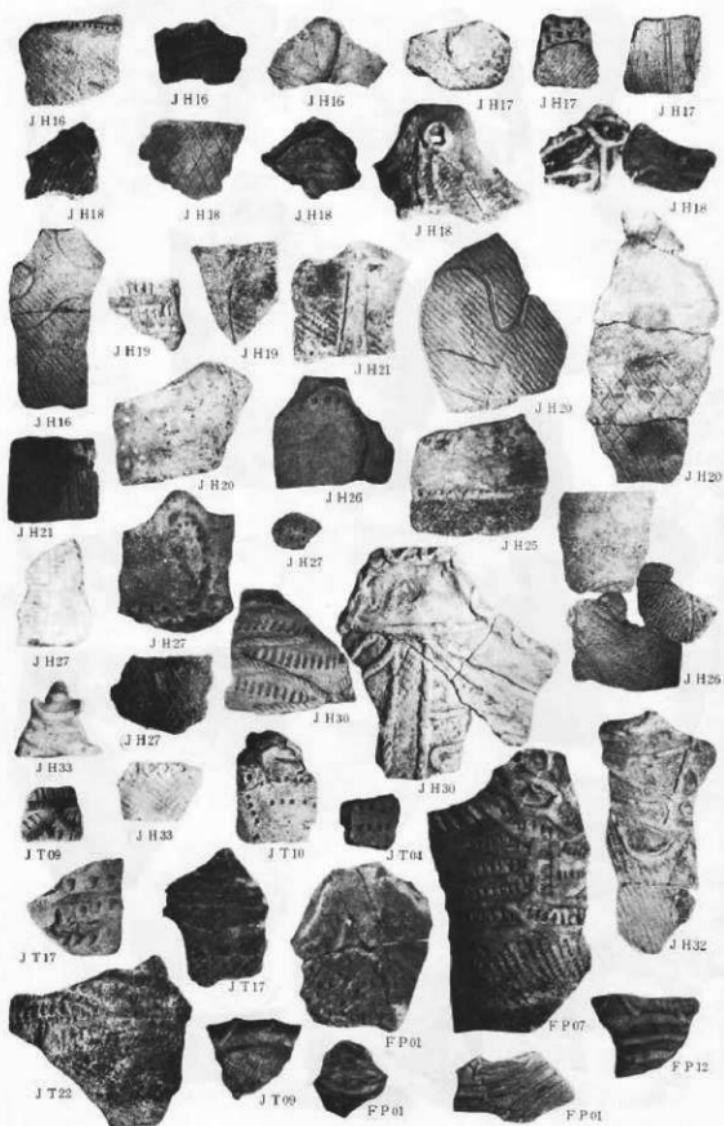
摩耗痕



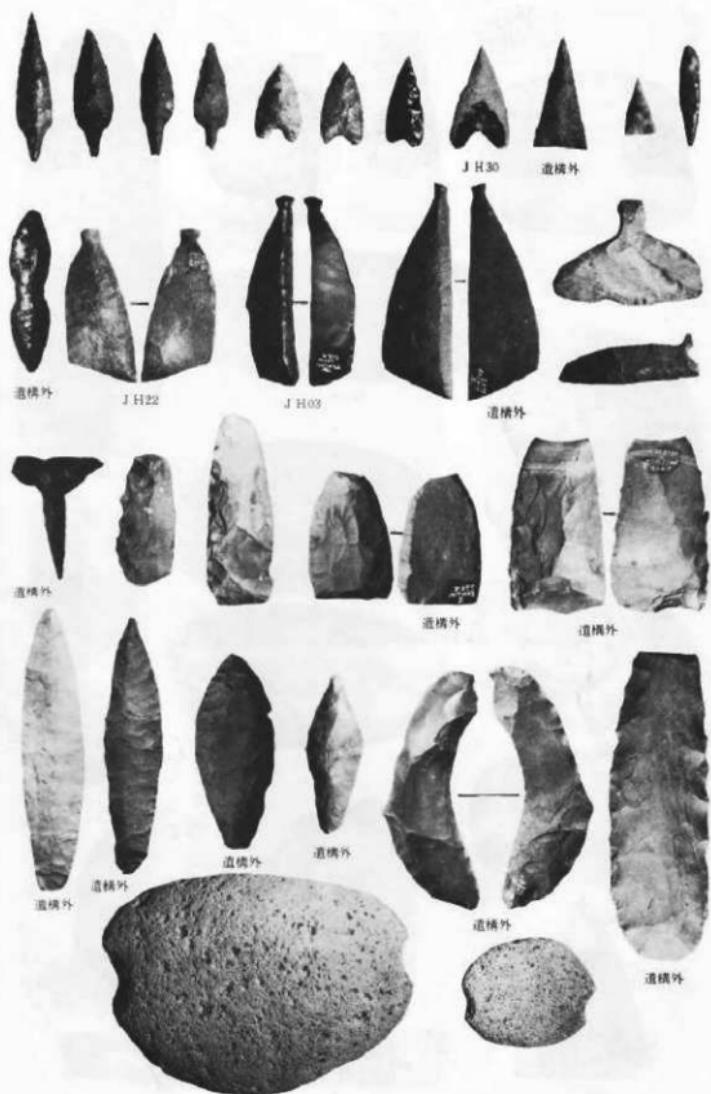
石器の使用痕



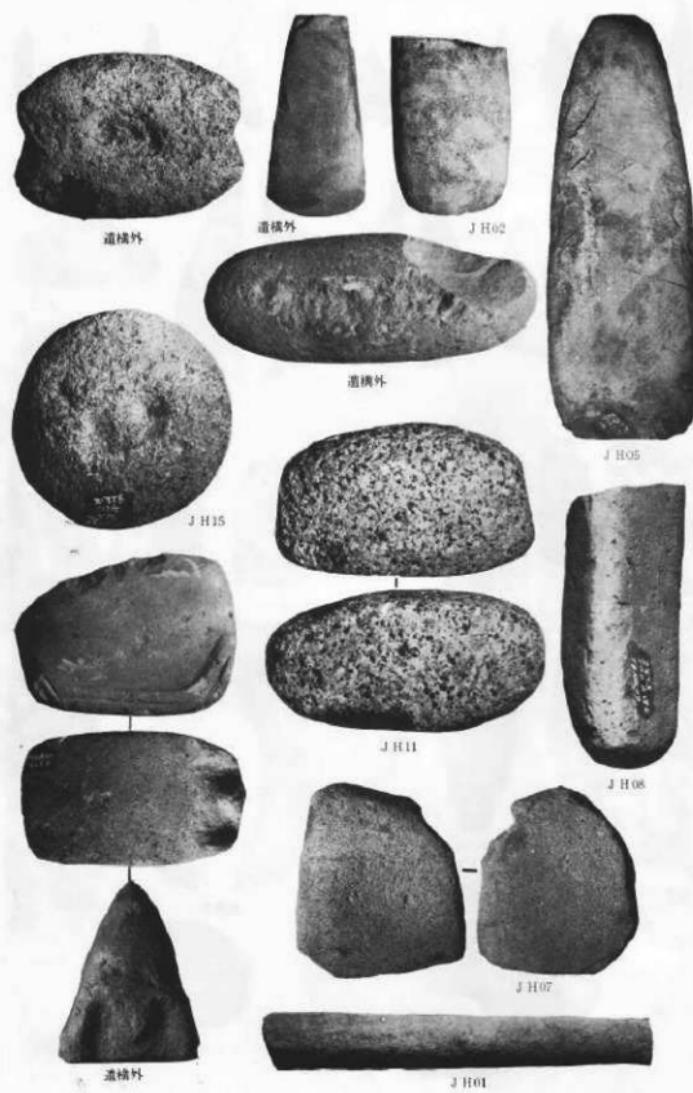
土 器



土 器



石 器



石 器